

さうなもんだノウ 玉「いや、あの人となら眞平だ店者でもあんないやな人といふものアあり  
 ヤア志ないよチヤ誰か表の格子から覗いて居るよ誰だへのぞくのは八さんかチヤ八さんでもな  
 いのチ、傳さんだコウ覗きやア四もんだよこゝは女湯ぢやアないよ傳さん 傳「さうかぢらア湯  
 やだとおもつたとんだ門違へだつけアハ、ハ、おばさん今日はめつぼう暑いねへ 母「さうさ  
 どうも寔たまらねへよ暑くつてマア立て居ずと上つて咄しなナ 玉「今に傳さん辻番の親仁が通  
 れといふよ「ちげへねへよくいふやつだの トおもてのかうしを こゝらあたりのまはりの髪結どんな  
 事でも鵜呑の傳吉此土地にひさしくいるとみえその言葉甚だおほへいもちろん三みせん弟子  
 にはあらず只毎日入り来りてむだ口ばかりはなすとみえたり 玉「おまへけふは隙か四万六千日  
 だのにいそがしさうなものだ傳吉なんの朝ッから立つてやつ付たもの晝中にやアちつと休ま  
 ねへぢやアつゝかねへよがつかりして 玉「さうか朝ッからつゝけてやつたらこの暑さぢやアが  
 つかりする暑さのう大かた腰がふら／＼するだらうあんまりつめてやるのは毒だだよチホ、ハ、  
 ハ、傳「アハ、ハ、ハ、こいつアおかしくつていゝ朝ッからやつ付たの腰がふら／＼するのとい  
 つたら影てきいたら仕事たア思はれねへでおかしからうよ彼事だとおもつてノウおばさん母「ホ  
 ハ、ハ、ほんにさうさのとかく若いうちといふものはちよつといふ事も下がりの様でおかし  
 くつてならねへよホ、ハ、ハ、コウ傳さんおめへ此間頼だ剃刀はまだ出ねへか出たら持て来てく

んなナ 傳「ウ、さうだつけさつぱり忘れた豪傑に切るのをのけて置た後に持て来やう 玉「いつ  
 でもそんな事ばかりいつて今度わすれるときかないよ 傳「大丈夫だもうわすれやアしねへコ  
 ウお玉さんおめへどうぞしたかへぶ顔の色がわりいぜ大かた戀病ぢやアねへか 玉「ちげへね  
 へほんにこの頃はちつと苦勞な事があるせへなんだかふさいでならないよそれだからお飯もね  
 つから食られないはな 傳「アウ、さぎ／＼何みてはねるかそれでも五六杯お飯アくへるだら  
 う 玉「たく山だよしてもおくれ信州者ぢやアあるまひしコウ傳さんおまへの心はわたしやアぞ  
 つこんまつてゐるからいふがのコウなんど金づくでもないかない事はどうしたらよからうのう  
 傳「ハテナどんな理屈かぢらねへが今時の代世界に金づくで出来ねへといふ事があるものかノ  
 ウおばさん 母「ほんにさうさこの子が又何をいふかつまらねへ事ばかり地獄のさたも金次第  
 さの 玉「なんのおツかアは譯もあらないでそんな事ぢやアないよ 母「なんの事かさつぱりわか  
 らねへハ、ハ、ほんに晩の仕かけをするのだが米やへ行てくるのをさつぱり忘れたおいらち  
 よつと行て来るから氣を付けてくんな傳さんおめへも咄してお出たのまをさふきんでふく 玉「そん  
 ならおツかアおまへその序にアノ三味線が出来たか聞て来ておくれな 母「チ、さうだつけのう  
 アノ張替ももう出来たらう久しい事だのうまことにあの三絃やはずるいよ外よりア上手だから  
 やるものゝいつ張替にやつてもつしいかはやく拵へてくれた例がねへ催促に行たんびにやれ日



和がわりいのすべつたのころんだのもう／＼らちがあかねへツちやアねへそのくせお直段は  
 高直だ玉いしやねそのかはり外で張せたよりは音締もよし皮のはなれねへのが奇妙だよ母な  
 んのおめへは内にばつかりあるからいしがあいらアねつから宜アねへ彼所の前を通る度毎に催  
 促をするのも恰好がわりいから三度に一度はまはり道をしてあすこの前を通らねへやうにする  
 はなばか／＼しい事だ錢を出して足を指子木にしてお蔭で駒下駄の歯がよつぽどへつたやうよ  
 アハ、／＼、どりやそんなら行て来やうトながしげたをあしにつけ出る鷹、コリお玉さんあゝしてみる  
 とおツかアもよつぽど口まめだのう玉さうよそれだからいづでもついで言合てならねへよそれ  
 はさうと今いつた事の鷹あつと待な大概おめへの胸の中はきかずとも承知の介だ大かた八百  
 半の息子さんの事だらうトいはれてお玉はむねにぎつて玉おまへよく知つてお出たのうどこぞではな  
 しでもあつたかへ鷹ハテそこが鶺鴒の傳吉だアなどんな事でも御ぞんじねへといふこたアみ  
 ぢんもなしだアノ斯だらう手みじかにいやア惚たんだらう玉ア、マアそんなものさコウこん  
 な事をいふといやらしいやうだが子今までわたしやア惚たの好たのとおもつた事はおぼえなん  
 だが此間ツからどういふこつたかアノ半さんとか繁兵衛さんとかを見る度毎にどうも斯も口で  
 いはれないほどおつな氣になつて命もなんにも入らなくなつて一遍でもいゝから心のたけを打  
 めけていひたいと思ひこんでもまさか心易くもない人になんばあつかまきくつてもいはれもせ

ずもう／＼寐ても覺ても此頃ぢやア繁さんの事が胸につかへていて詮方のないほどくるしいか  
 らなんでもわたしやアばからしい事だが魅込でもしやアしないかとおもふよ鷹アウ強氣に惚  
 もほれ込だのきつい道成寺の清煙と來ている大蛇に成ちやアいかねへぜ玉アレサ戯談ぢやア  
 ないよ夫だからおまへの心の底をきいた上せひとも取持てもらはふと思つていてもおまへの來  
 る時はいつでも外の者が來ているから間が悪くつていひ出さなんだがトいつて此の事ばかり  
 はなんぼ實の親でもおツかアには言はずひとり氣で氣をもんでいたは子こりやア私が一生のお  
 願ひだからどうぞ出來ないまでも骨を折て此戀を叶へておくれでないか其かはりにやア骨折代  
 もおまへがいふ通りにするからどうか詮方はないかね鷹そりやアずいぶんお禮次第でどうか  
 工夫がねへでもねへけれど此間文もやつたぢやアねへか玉さうさ半さんの處のお三どんにや  
 う／＼心易くなつてはなぐすりをやつて文はどいけてもらつたけれど封もきらずに返されたが  
 あんまり情志らずぢやアないか其又情志らずの男にやつぱり惚て思きられないといふよつぽど  
 やばな事だがね是がほんの因果とやらだらうこんな事をいふと自惚のやうだが方々の人さんに  
 袖襦をひかれこんなおたふくだけれど最負にされてマア女の一人前だものあつかましく附文を  
 するのよよく／＼の事てなくつちやア出來まいぢやアないか其文を見もしないでもぎどうに氣  
 もどされたをそれなりに手を空しく引こんぢやア人に志られた時外聞が悪いからそこでおまへ







さんに馳かてゆく

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引初編卷之上 終

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引初編卷之中

第二回

かくてお玉は傳吉でんきちに右みぎのよしをたのみてあとにそはくど左ひだりしたらかくと思案しあんをしつまつ間まほどなく歸かへりくるうのみの傳吉 傳でんこうくお玉さん狂言きやうげんの筋すぢがちつと違ちがつて來きた役者やくしやに少せうさし合あひができてお玉「チャ」どうしたのだへ豆八まめはちさんがどうぞしたのかエナ 傳でん「ナアニ豆八まめはちやアねへおちよさんの暑氣あつけにでもあたつたさうで急に虫むしがかぶるといつてどうかお船ふねもやめになりさうなあんべゑしきだアお玉「チャ」それはつまらないねへそれぢやアみんな太郎たろうべゑかどかへ 傳でん所ところが決して太郎たろうべゑでねへ子こ爰こゝに一いツ妙めうきてれつと云謀計いんばかりごとがあるの漢かんの張良ちやうりやうが一い升しやうの飯めしをくらつて町内ちやうない中糞ちゆうくそをたれたつても孔明かうめいが五合ごがうの酒さけをかつ食くらつて十八丁せうべん小便せうべんをたれやうがどうして側そばへも寄よつて事ことちやアねへお玉「チャ」なんの事ことたへ志こころやうりやうだのさうめんだのとなんぼ七月しちがつでもまだ盆ぼんも來きも来きないに 傳でん「ナアニさうぢやアねへ張良ちやうりやうに孔明かうめいたア唐からの軍師ぐんしよ軍師ぐんしぢやアわからねへのナニサめつばう強つよへ智惠ちゑのある人ひとだがおれのちゑにやア叶かなふめへといふ事ことよお玉「チャ」さうかおまへたいさう物識ものしりだねそして何かへその張良ちやうりやうさまのはかり



事とはどんな事だへ 傳「サア爰だてのこの謀計をやらかす時ア大づけぢやアねへが一點張では  
 づれつこのねへ大丈夫だがなか／＼うかつにやア出来ねへ子お玉なせへマアなんでもいゝから  
 はやくちよいといつてお聞せなれつたくつてならない 傳「どうして／＼第一丸印づくだから  
 手おもいよお玉そりやアお前時刻もいつた通り金の事ならどうでも都合するからマア譯をはや  
 く聞しておくれよ 傳「サアその妙計といふのはノびんぼう伊勢屋の香太郎のアノ人とおめへは  
 あんまり附會た事はあるめへがそりやア極酒好でもしれへ男よ繁さんが遊びに行なはる時ア  
 いつでも末社で行から豆八におめへの事を吹込で金をマアにぎらせるだノよしかさうして味方  
 に引入れてアノ香太郎を豆八におびき出させて委細かまはず二人を繁さん所へおしかけさせる  
 さよしかさうして豆八にもふさま説つけさせていやでもおうでも口車で繁さんを船へそびく  
 のだなんでもつり出しせへすりや締めたもんだそこで爰が用心だちよつと耳をだしなトすりよつ  
 ちそれこう／＼するはよしかノそれ斯するから斯いふとソレもうしめこのうさぎだらうノよし  
 か是ぢやアよもやはづれツこはありやアしめへト暫らくべちや／＼さゝやけはお玉は聞てにこ  
 へ／＼よろこびお玉ほんにそれぢやア間違なしだよさうさへいけばまことにもう／＼本望だよそ  
 んならおまへ豆八さんの處へ行てうまく吹込でおくれなわたしの口から馮んでもおかしいから  
 それにしても丸印を先へやらなくつちやアいかないがマアどのくらいやつたらよからう子 傳「

マアちつとばかりやるがいゝはなうまくいつたら又あどで禮をするよ云からお玉さうさねへそ  
 れぢやアさうしやうト佛壇の下のおし入れのまへら戸のぢやうをあけたんすの引出しより金を  
 出し紙にくる／＼とひねりてお玉「サア夫なら是でうまくやつておくれダが少くはあるまいか  
 ねト傳吉が手へわたせばひねくりまはして 傳「ナアニすくねへ處か是ぢやアよつばど多いやう  
 だお玉「おほかアおまへいゝやうにしてはやく首尾をきかせておくれよ 傳「オウこいつアありが  
 てへトたちまち 傳「かならず氣遣へまなさんな圖ぼしをはづす事ぢやアねへからぐつと落ち付  
 てまつていなせへお玉「くだいやうだがたのんだよ 傳「ハテようござへす百も合點二百も承知諸  
 事万事は胸にあるから苦勞にまなさんトはなうた交りに出てゆくろかげを見おくりて  
 ホツトお玉がためいきとともにつきだす八ツのかねゴチン引／＼

第三回

八百半が勝手口をさしのぞく牽頭の豆八「チト物が問たうござりますこの御近所にお幫間で  
 色の白いきれいな男で豆八さんとかおつしやるお方はござりませんかトいふにお三は臺所に藥  
 をせんじてゐたりしが振返りみてふつとふきだしお三「チャ／＼お名は存て居ますが豆八さんと  
 おつしやるお方は森藏のやうな顔ツつきで色の黒いお方で御座ますよオホ、お三「おきやア



がれ澤山だコウお三どんあめへこの内へ来た時分は旦那さま飯くらはつせへ膳ごしれへし  
 べえかアアニまだ腹がへらねへかすんだらあんでつつけへ尻をこかつせへ直腹がへるもんだ  
 アなアんのかのとやらかしたつけが此頃じやアもう水道の水が染込だものだからべえへ詞は  
 断物にしたのお三チヤよしてもおくんなさい飯禁こそいたせいつそんなべえへ詞をまこと  
 に豆八さんは口がわるいよ 豆さやうさ男はまことに美男だがおしい事にちつと口が悪いが諸  
 事十分にヤアいかねへものさのコウむだ口はむだ口繁さんはお宿にかお三ハイお出なさいます  
 がお千代さんがお気分がおわるいから 豆さうだどのう夫で態々出かけて来た何にしてもお目  
 にかへらう上つてもよからうかのお三ハイ旦那さまはお見世でございませすからはやくお上んな  
 さいまし若旦那さまはアお二階でございませすよ 豆チツト合點チイへ呑太さんサアへお  
 出なせへトくろ呑太郎 呑ハイごめんなせへお二階へ参るのか 豆サア御一所にお出なせへト二  
 かいのはしごをどんへへへへ繁兵衛はお千代があつさにあたりてくるしみしゆえかいはうしな  
 がら本をよみて居たりしがそれと見るより膝をなをして 繁これはお揃ひでサアへこつちへ  
 ずつとこつちが風が入りますそこは日が近くつて暑い呑太郎さん爰の所へお出なせへ 呑志か  
 らば御免トあへ座をしめたがひにお定りのあいさつすみて 豆ときにもし奥方が御腦氣と  
 承はりましたがさぞ御心配それゆえ呑太郎さんと同道してお見まひがてらわざへ推参すこ

しはお快い方でございませすか 繁それは近頃御深切マア大きに快方さチナアニさしたる事でも  
 ありませんやつぱり暑邪にあてられたのさおちよみんながお出だちつと起てはなしでも志ねへ  
 かトいはれてお千代は起なほりちよ呑太郎さんよくお出なすつた豆八さんいけません折角お  
 船のお約束でわたしは支度まで志ましたがあ急につよくかぶつてまゐつてまことにもうくるしみ  
 ましたよ 豆へエさやうでございませすかそれは散々な事イエもうわたくしも霍亂はいたしま  
 したがヤなかへどうして苦しいのなんのど口でいふやうな事ぢやアございませせん。時にモシ  
 それぢやア折角のお催しもまづ大かたは御延引かね 繁なアにさう云心でもないが見なざる通  
 りの辭宜だからわたしやアかまはねへが貴公にちつとお氣の毒だ 豆そりやアモシわたくしに  
 なら御心痛は御無用どうでお供でまいる事だから 繁實は今日参詣志ねへのは残念さおちよも  
 わたしも観音さまを平生からまことに信向するし殊にいづでも六千日にはまいらねへといふ事  
 は今までないからほんになんだか氣にかゝるのさ 呑なるほど観音さまでも金毘羅さまでも自  
 分の常から信心する神佛へ月参りなんどはじめてから何か障りなとでも出来て一度でも参り損  
 ると氣にかゝります實にちげへございませんのサわたくしも今日は是非参る氣でぶらへ出か  
 けますとこの豆八さんにぶつと逢ましたら半さんのお内義さんが斯へだといひましたから取  
 あへずお案じ申て参りましたどうでわたくしが是から参詣いたしますからお前さんがたの代参



によく拜んで来てあげませう 豆吞さんおめへ一人で参んなさるならわたしが一處に行やせう  
 お千代さんの平愈を祈りながら旦那の代参はわたしが志やう直に出かけやうか 繁なにさく  
 さう貴公たちばかり勞しちやア却てわたしが氣がすまねへそんなら斯仕やせうお千代おめへ過  
 刻からみると餘程宜からもう氣づけへもあるめへによつて船でそろく出かけてみなナ今日は  
 丁度風もなし船もそんなにゆれも志めへ内にあるよりやア行方がよからうちハイ有がたうご  
 ざいますわたくしも参りたい事は参りたいがもしひよつと船の中で先刻のやうにさしこみます  
 と却て御苦勞をかけますからわたくしはマアよしにいたしませうそのかはりあなたはどうぞ皆  
 さんと御一所にお参んなすつてわたくしの分もお拜みなすつて下さいまし 繁それもそうだ  
 がおめへをば内へ遺して行ちやアやつぱりどうも案じられるよちよナニ決してお案じなすつて  
 くださいますなあとつぎんもお出なさるしお三もをりますから氣づかひはございませんそれに  
 大きに心もちもよくなりましたからわたくしの事はお案じなさらずに御ゆるりとお参りなさる  
 がよろしうござります 豆なるほどお千代さんのおつしやるのが金言だいかさま船中であつよ  
 くお悪くつては志やうがなしマアおころよい方だからそんな事はありもいたしますめへが万  
 が一あつた時はと深くお心の付ましたはさすがく遠慮なき時はかならず近き憂ひありモ  
 シ旦那奥方の仰があの通りなりあなたに枉て駕を促して観音薩埵に丹誠をこらし大悲大事のわ

が妻をすみやかに平癒なさしめたまへとソレ祈念して御覽じまし忽ち快氣うたがひなしさ子エ  
 吞さんそんなものじやアありますめへか 吞ちげへなしこりやア足下の諫言の通りせひく繁  
 さん御参詣なさいお千代さんもさうすればよろこびだ 繁いかさま公たちの諫に志たがひそ  
 んなら今から同伴志やうかおちよそれちやア参つてくるからノ按摩でもよんで按でもらひなそ  
 してなんぞ給てへものがあるならの芋松にでも瓜介にでもいひ付て取てもらふがいよちよハ  
 イありがたうアノあなたお召物を三に出させませうかエ 繁ナアニおれが出すからいよ氣色  
 の悪い時はやれこれと氣をつかひなさんなトいたはりながら着ものをきかへみじか羽織を引か  
 ける豆八「お支度がよろしいならそろく出陣と致しませう 繁大きにお待遠そんならお千代行  
 て来るよアノ藥を精出して吞なはやく歸つてくるから 吞志かしおちよさんちさむしからう  
 ちよなにわたくしはよろしうござりますさやうならお志づかに 繁チイさア出かけやせうト三  
 人は下へをりおもてへ立出てなじみの船宿へいたり屋根船に打のりいろく酒肴を取入れて觀  
 音へと棹さしぬ尤三味線なしのまじめな志やれにて豆八がむだ口は酒に乗じて聲高く船中大い  
 に興をもよほしますく酔に入るなるべし 豆旦那モシつかねへ事てございませうがこの頃評判  
 の妃后を御覽じましたか「アウ妃后とはアノ何かおたまどかいふ 豆ウさやうくあの娘は實  
 にモシ天性の美女玉顔常に粉黛を用ひず素顔に愛敬の艶をかけ目もとの色氣は冷々として見る



もの忽ち心を蕩かし口もどの笑回は莞爾として視る人千金に換んといふ當世男殺しとは是の婦人を謂つべしさ子 繁「フウ違へぬへ希世の奇女ともいひてへの 馬「ナゼ／＼あんな美しい娘を鬼女とはどこが鬼と見えます子 繁「なにさ鬼の事ぢやアねへ世にめづらかな婦人だといふ事よまかし煙蕩家だといふ事だの 馬「どうして／＼それはほんの僻事さ子わたくしも懇意でございませうがそこにはちつと譯あり甘露糖といふ來歴をちよつびりつままで話説まませうそも／＼か的美婦人を淫婦だの好色だのと評しますが原來容貌といひ技藝といひあなたは今おつしやる通り世に珍らかな婦人だから分限者が座敷へ呼でもマア委細なしに澤山祝義をやりの酒長宴になつて扱どうだと口説ところが一尙不承知もちろんあのくらしいな美婦だから自分の心に思ふやうな男がないから身もまかせず座敷へ出て足もとを見て轉んだ事もなけりやころばした客もなしさけれども人は尾に尾をつけてモシ源右衛門さん聞んしたかアノ店の助兵衛がな近いころゑらい評判のお玉たら何たらいふ藝子やう婦人になゑらうはまりくさつてテ金を大ぶん捨たげなければナ一向なびかんさかいまつと／＼と金つくして口説んした相談は出來ずどう／＼遣ひ過したさうなト上方へ附けのぼせになりくさつたがあの子の女はなんでも吝ぢやある人化して金取といふ事ぢやなんのかのといひますがやつぱりアノ子のわるいぢやアないがエテ店者や屋敷の衆はいたゞく氣でのろけてかゝつてぬだりも志ねへに自分の方から無性に金を遣てお

いちやアねだられたの欺されたのと女郎か賣女を買やうに初からかゝるが了簡ちげへさのう尋さんさうぢやアねへか 蚕「マア／＼そりやア宜が些と盃を傾むけやう足下は話しに實が入るといつまでも志やべつてゐるから聞て居ても口がすくなる 馬「ほんにさうだつて志からば御盃を頂戴なせへト一ツほしてこれ よりまた／＼さいつおさへつむだをいひ／＼酒くむほどにいっしか船はあづまばしの川岸へつくゆゑみな／＼はこゝよりあがりて觀音へ參けいし大公樓にてちよつびりしやれ黄昏ちかくなるまゝにいざとてふたゝび船に打のり元來し方へ棹さす所この船にすこし後れて同じく一艘の家根船來りしが獨りの男小べりにつかまりかほさし出してこなたへ向ひ「モシ／＼その船にお出なさるなア繁さんじやアございませんかエモシ「ヤ豆八さんも御一所だぬト豆八「きいつけのな 馬「ヤだれだとおもつたら傳公かモシ「旦那髮結の傳が呼でをりませ 繁「チ、ほんにの傳吉觀音さまか足下が來るなら一所につれて來りやアよかつた 蚕「傳印ならおれも知る人だチ「傳吉「だれと一處だチ「美しい姉さんが見えるのそつちへ行ふか傳吉「傳「チヤ香さんだぬこいつア妙だみんなおちかづきの顔だちつとこつちへお出なせへまかしおめへさん方の方にやア味へものがありやせうなんならそつちへ行やせうか 繁「フウちつとこつちへ來さつしまかしお連が有ちやア「ふになりて コウ豆八「連はだれだの中が薄ッくらくつて分らぬへ豆八「どれ／＼見とゞけませうト志やうにくびを長くしてあとの船をさしのぞき「チヤ志



らぬへ女中衆だともつたらお玉さんだねノウ傳公さうだらうモシお玉さん恨みだねエ志らぬ  
 へ顔は情ねへ子志らぬへものだとばかりおもつた玉「イヤ豆八さんさうぢやアないか子堪  
 忍してお吳なさいわたしがわるかつたからアノちつとこつちへお出ナ馬そつちへお出よりこ  
 つちへお出ナだモシお玉さん爰で逢ふのは優曇華の花待得たるおまへのお顔モシ有がたやまと  
 や濱むらやそつちのけのお玉大明神さまくくいざこの船へ御のりうつり候へハチ引ほ  
 んくイヨ引お玉「チホ、ハ、アノ豆八さんそちらへまいつてもようございますかへ馬いしの  
 くれへかそしておまへの方の船はさきへおかへしサアく傳公もこつちへ來給へくトむ志や  
 うにせり立るお玉は船頭の虎にむかひお玉「アノ虎さんそれぢやアおまへどうぞさきへ歸つてお  
 くれどうで又わたしが歸りに寄から虎「エイすんならわつちやアさきへ歸りやすよお玉「ア、さ  
 うしておくれ大きに御勞苦だつた子そんならきんさんに船房の事よろしくよトすてせり傳さんおま  
 へもこつちへお出ト船へのりうつるお玉「チ、こわかつたまこと足がぶるくしたアノどなたも  
 御免なさいましよトいふうち傳吉ものりうつれば一艘の船は艫をはやみてぞ漕でゆく

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引初編卷之中終

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引初編卷之下

第四回

さても繁兵衛はすぎし頃お玉の方より多をおくられてその返事さへせざりしが諸事如才なき通  
 人なればわざとそしらぬ顔をして手にもちし猪口をすまして繁「モシお玉さんとやらよく観音  
 さまへお参りだ子今まで折ふしお見かけ申てお名もかねて聞ては居たが一座するのはけふがは  
 じめてこりやア頂くのだが持あはせだからはかりながら一ツ献るよトいれてお玉は「イヤさや  
 うでございますかほんにまちがひましてまだお近づきにもなりませんに今日はマアふしぎな御  
 縁でトあさなの「豆八さんの御引合やらさやうならいたしますヨトひさつほして「呑さんお久し  
 りでありますから上ますよ呑太郎「これはお珍らしいお方のおさかづきだから早そく頂戴とい  
 ふところだがマヅひとつお押へさ玉「イヤくもうおいじめなさるかへいやだ子エさやうなら  
 豆八さんちよつとお合豆八「チット奇妙時刻からお合を待て居たの、天神さまちよつとお酌を  
 おつぎにお頼のはみなさん御存じ相の山。繁さん呑さん傳吉さん。あわらひならばわらはんせ。  
 お酒はどんと呑しだい。おかんは替りめ丁度よし。ところで御肴つまみ喰。あさしみなりと



も。酔の物なりとも又は大平つまみ物でも御勝手次第にござりませア引す。奉は薩摩で。ヤレコ  
 ノ打次第。サ、のんでくりよウ。酔ちやいやア。お合だアヲツト來な。こりよ吞でくりよウハ  
 ア御馳走〜〜 驚ア、やかましい大きな聲だぞ鯨の遠吼か大蛇のうなるやうだ 玉ヲホ、  
 、豆八さんまこと此をかしくつてい〜ねへ 豆ヲニエをかしくつてい〜エお床入りの文句の  
 やうだ子 玉ヲヤ氣がつかないよをかしいねへ傳言豆八さんはまめ人のまめが好物だから直き  
 おつう氣をまはすだア 豆ヲツト眞平御めん素麴ひやぞうめんはすなはち是に安置し奉る汁を  
 つけて御賞翫あれツ時に赫々たる群星黒雲に覆はれて光りを失ひびつか〜の稻光りはごろ  
 つき先生をさそひ出してびち〜すつてんどんと來さうなあんばい勿論尤 甚以て宜ない怪  
 雲が散亂する子吞なんだ御大造にしやちこばつた口をきくの儒者の寐言とも聞とれねへ 豆ア  
 さすが田夫野人だはへ小子なんぞは博物の君子だからちよつびりと一言吐ても俗語は用んてい  
 づれ大人は漢語さ子エモシ旦那 驚違へねへまかし足下は悪物の大酒と來てゐるから一合でも  
 二合でも船中で吐れちやアおそれるの小間物見世は眞平だ 豆ヤこれはいかな旦那までが嗚呼  
 女子と小人はやしなひがたしと聖人がいひおかれたが違へねへてノウ傳言 儼さうさ子ぬしと  
 精神にやアおそれると 豆エ、わるくしやれらアいま〜しいみな〜アハ、ハ、ハ、驚ほんに  
 戯談はあどけいやな空氣になつて來たごろ〜が來なけりやアい〜が 玉ヲヤさやうサねへい

やでございますねヲヤ光りますよあつちの方でこわいねへ 驚それがやアおまへ雷はきらひか  
 へ 玉ハイまどにきらひでござりますごろ〜といふとちいみあがりませヨ 豆たいさう弱む  
 した子から大勢ゐるから何もおそれるにやアあたられねへそれに雷公なんぞはわたしどもの仲間  
 内だハテナぜといつて見なせへ天地の間の太鼓持だもの 驚ハ、ハ、ハ、なんの事だんだむかし  
 断だの 玉ヲホ、ハ、豆八さんおまへはまことにあまのむやくだね雷さまの鳴さうな時は戯談  
 にもそんな事をいふものじやアないぞアレ遠くの方でごろ〜なるよ 豆なんのかまふことは  
 ねへはナかういふ時はさわぐもんだ傳言吞さんサア〜騒ぎやせう〜ア、かういふ事なら猫  
 を一疋持て來てなんぞうなつて俗物めらの心耳をすましてやりたかつた子エモシ旦那 驚ナン  
 ノ今日等三みせんをべこつかせるのはどつと志ねへよあたりが三絃の寄合だものごつたになつ  
 てねつからさえねへ 豆アウ成程そこもあればふたもありかッそんならマア酒にでもしやうコ  
 ヲ吉公どうだらう一ト降來やうかの せんごう吉さやうサ子いづれふりませうがまだ急にふりや  
 アまますめへ 豆アウそれぢやアア明日か明後日降のぞ 吉へんまさかさうでもありません  
 めへ 豆ホイそいつはやつぱり兵衛太郎だ 玉豆八さんおまへはまことに元氣だ子わたしやア  
 なんだか氣色がわるくなつて來たよ 豆ナニ氣色がそいつアおしめへだなんぞにあたんなすつ  
 たのぢやアねへか 玉どうだか子いつそ胸さきがま〜するよアイタ、ハ、ハ、驚そりやアこ







へチ、べらぼうといへば今吉公に蠟そくをたのみやアよかつたエ、べらぼうな事をしたぞこい  
 つア斯志ちやアおけねへ消ると大變だそれにでへぶごろついで来ました子ドレ一寸行て買て來  
 ませうやつぱりわたくしがわすれるやつさ 繁さうかそんなら早く行て買て來ねへエ、又吞  
 つくも傳吉も婿があかねへのウ序にそこらにあるだらうから早く來いといつてくんねへ 馬チ  
 ツト吞こみ承知の介そんならちよいと行て來ますトいそいで出ゆけどもまだひとりもかへり來  
 らずお玉はくるしきいきをつきながら 玉「アレいつそひかりますよアイタ、あなた御免な  
 すつて下さいましよつひにない癩で御苦勞かけますもわたくしは病ゆえいたしかたもございま  
 せんがあなたは折角あたの志みにお出なすつたのにとんだ御厄介でアイタ、まことにお氣  
 の毒さまでございますどうぞ憐れさまながら爰の處をつよくおしてくださいますし 繁「なんのな  
 んのこんな時は心遣ひは志なさんなドレ、こゝらかおそろしい動氣だチア、どうぞ雷がつよ  
 くならねばいゝがでへぶひかりがつよくなつて來たほんに今日は癩に縁がある日だと見えて晝  
 間もお千代の癩で肝をつぶしたやつさソレ、かうか、ト力かぎりおさへるうちだん、強  
 く差込しと見え齒をくひまばりてうんどばかりのつけにさるゆゑ繁兵衛はおどろき「ヤア、  
 こりやア大變だエ、どいつも、婿のあかねへやつらだエ、醫者を買て來るとも藥を連てくる  
 ともすればいゝこんな又間のわるい時アありやア志ねへト「お玉のみへ、コレ、お玉さん氣を志

つかり持なお玉さんエ、情ねへお通じなしたお玉さん、なんにしてもこまつたもの  
 だまことにどうも仕やうがねへ又豆八まで何を手間どるか番太郎で蠟燭は賣さうなものだにい  
 ま、しいやつらだコレお玉さん氣がつかねへかお玉さんトよべどこたへもなか、に氣の  
 つくやうすもなきゆゑに繁兵衛はこまりはてあたりを見まはし盃すましの水を猪口にすくひあ  
 げて 繁「マア、薬のかはりにこの水でものまして見やうトお玉の口へ入れんとすれども齒を  
 くひしばりていつかうはいらざいかはせんと途方にくれしがきつと心に思案してすくひし水  
 を我口にふくみお玉をぐつと抱あげて口から口へ口うつしに入ればふしぎやごつくりと咽を通  
 りしやうすゆゑ「お玉さん氣をたしかに持なせへお玉さん、ト幾聲となく呼たつればお  
 玉はたちまち目を見ひらき繁兵衛の顔を見てにっこり笑ひ 玉「繁さん堪忍してくださいますし今  
 のはみんな虚でございますよトいはれて繁兵衛はびつくりし「エ、ト後へ身をそらせあまりの  
 事にあきれはて顔を見つめて居たりしが 繁「ソ、そんなら今のやうに氣を引つけたもみんな虚  
 かいつはりかトせつこむほどお玉はにこつき 玉「サアびつくりなさるは御もつともお腹もお立  
 なさいませうがわたくしが胸の中をどうぞ聞てくださいましこんな事を申ましたらあつかまし  
 い女だと思しめしませうが恥かしい事ながら日外よりあなたのお姿ふつとお見初申ましてから  
 明ても暮てもお顔が目につき夢に見るほど忘れかねつゝむにあまる胸の中のせつない事を二度



までも多に書てあげましたをマアお情ない封も切らず其儘お返しなさいましたもお嫁公さんの  
あるお身ゆゑ御無理ともおもひませんがあなたも戀の情態を御存じないではあるまいし儘にな  
らぬは浮世の義理あきらめるとか思ひきれどかたどへ出来ないお返事でもくださいましたらわ  
たくしも夫をお心ゆかしとして思ひきる瀬もございませうがいはいふにますとやらお返事  
きかぬそれゆゑにどうあきらめても忘れかねせめては一度直々にお目にかゝつて胸の中をおま  
らせ申すたよりもと観音さまへ願かけしたそのお蔭やら思ひもよらずあなたと一ツ船には居て  
おみんなが側にをりますから譯さへお話し申されずそれからふつと思ひつきのはじめに知つた  
癩の眞似こんなせつないおめをして心のたけをお志らせ申すも女の身であられもない虚いつは  
りと思しめしませうが外に志やうもございませぬゆゑおだまし申す氣はなけれど據ない今の  
虚少しは胸をお察しなすつて堪忍して下さいました始終をかたる口車繁兵衛はこれをまこと  
思ひ斯くまでおもふ心ざし一ト通りにてはひるがへすまじとだますに手なしと言葉をやはらげ  
繁なるほどわたしのやうな二才野郎を虚にも惚てくんなさるは嬉しくなくつてどうするもの  
かまたがおまへもまつての通りお千代といふ厄介もありなま中な事仕だしてもとも未はどげ  
もままいしおたがひに苦勞をもとめるばかりで誹られたり笑はれたりしては恥かしくもありを  
かしくもなし尤もおまへへの志しをなかく空にやアおもはぬへが浮世の義理や何や彼や儘にな

らぬが警の通りこの道理を聞わけていふまでもねへが縁なきむかしとあきらめてくんなさ  
にやア恨みだよウ合點がいつたかお玉さんといふかほをつくくうちながめほろりとお玉は  
目に涙玉御もつともござりますあなたのおつしやるお言葉にすこしも無理はございません  
すつぱりとあきらめました繁「フウそんなら今いつた事を聞わけてか玉「ハイちつとも未練は  
のこしませんおさらばでございますといふより早く川の中へとびこまんとするゆゑあはてし引  
とめ繁「エ、めつさうなどうする氣だあきらめたといふから安心したらとほうもねへマア身を  
なげやうとはどういふ心だお玉さんけしからぬへ事をするものだととめられて泣きあふるは  
し玉「どういふ氣だとはお情ない心のありたけ恥かしい事をあなたにお聞せ申たのにお千代さ  
んに義理立していやとおつしやるのは御無理もなしあなたのお口からおつまやるまいが戸の建ら  
れぬ人の口もしこの事を誰ぞ聞て一人いひ二人いひしてお玉ははおかれたとか恥をかいたとか  
評はんされてはどの面さらして人どつき合が出来ませうその生恥をさらすより死で苦勞を助か  
るおちとめなさるは却ておうらみ未練は微塵ものこしませんとふりはなして又死なんぞありさ  
まに繁兵衛はなほ抱きとめ繁「エ、おめへもマア聞わけのねへわたしに未練のこらさずば  
世間に男はいくらもありそんなちいさな量見をやめてわたしの異見についてくんなさうすれば  
こんな安ぼつてへ野郎よりやア立派な男をわたしさがして未始終おめへの爲になるやうなト



お玉いふなもきかぬ「玉い、イヤ〜〜たど〜どんなにおつしやつても外ほかに望のぞみはございませぬおまへさ  
 んにきらはれて何なに樂たのしみがござりませう南無阿なむみだぶつト覺悟かくごをきはめとめてもとまらぬ顔色  
 ゆゑ繁兵衛しげへいもさすが岩木いわぎにあらねばかくまで志こころざし不憫よびんとおもへば襟元えりもとからぞつと吹込ふきこむ  
 戀風こひかぜに心こころもそいろにときめきて未始すまし終じゆうはともかくもかゝる美人びじんをこのまゝに捨すておく男をとこのあるべ  
 きとたちまちかはる心こころの内亂うちみだれそめしがわざはひのはじめとなりしぞ是非せひもなし「それほどま  
 でに思おもひつめて惚ほ込こんでくれた志こころざしどうして受うけずにおられやうおめへの心こころの濟すむやうにマア左ひだりも右みぎ  
 もしやうからかならず短氣たんきは志こころざさんな 玉い、そんならアノ聞きとハけて思おもひをはらしてくだ  
 さいますかヲ、うれしいといはせておいてお笑わらなざるお心こころぢやアございませぬか「エ、おめ  
 へも疑うたがへぶかいこんなうつくしい君きみとさしむかひの船ふねの中釋迦しやくかでも捨すてて置おけるものか今いまの言ことばが  
 眞實まことなら命いのちにかけても殺ころしやア志こころざねへヲやでへぶつよく鳴なつて來きたぜ 玉い、そんならいよ〜今夜こんや  
 から二世も三世もかはらぬ夫婦ふうふ 繁しげ、エそれぢやアどうやらお千代ちよの前まへへ 玉い、義理ぎりがたゝぬとお  
 つしやるならわたしはやつぱり身みを投なげて 繁しげ、エ、義理ぎりもへちまもいらぬへからマア落おちついでた  
 がひの胸むねを 玉い、はらすはあなたのお情なさけばかりアレたいさう光ひかりましたト繁兵衛しげへいにひつたり抱いだき  
 つくとたんのひやうしに挑灯てうちんの明あかりはきえて志こころざんの關折せきをりしもばら〜雨あめの音おとびか〜〜  
 ころ〜〜 繁しげ、ソリヤこそつよく鳴なつて來きた是これこそほんに二人ふたりが縁えんを結むすぶの雷かみなりさま「ヲ、うれ

しいトふるへ〜音おともきびしきい〜づちのて 二人ふたりは夢中むちゆうで「くはばら〜〜



盛衰 娘太平記操之早引初編卷之下 終

操之早引第二編序

吾友なる曲山人。別名を三文舎自樂といふ。性來筆道に巧にして文を能  
 し書を能す。且世間の人情に涉て。常に流行の書を著し。其名おさく  
 聞えたりしに。惜哉没故して。その志を果すに至らず。顔回が才ありと  
 いへども。不幸短命なるが如し。こゝに操の早引てふは。婀娜なる色に  
 身を崩して。貞烈なる渾家を捐。慈仁ある父を思はず。放蕩惰弱の息子  
 の傳記は。色に溺るゝ世の弱官を。戒めんとする一端ならむ。然るを此  
 稿半遺りて。全部の趣向知らずといへども。大概作者の用心は。巻尾に  
 至りて善を善とし。悪を悪とするの外に出ねば。販元主の乞に任せ遺稿  
 の不足を補ひて。まづ全本とはなしたれど。遺稿は則月日經て。時好に  
 後れし條もあらんされど。故人の筆の文。今さら改むべきならねば。其



儘にしてさて止つ。己れも婀娜なる道に疎く。色のいの字の味ひをば。夢にも知らざる野夫偏屈。大かた斯で有うかと。宛推量の著述をば。看許し給へと願ふになん

于時天保八のとし睦月の空はれて黄鳥のはつ音幽に聞ながら

松亭の窓下に誌す

盛衰娘太平記操之早引二編卷之上

江戸曲山人著

第四回

世に美なる婦人をさして狐といひ。古狸と呼ぶもよく人を誑かすゆゑに。如此渾名せるものなるべし。されば八百や繁兵衛は。お玉が陥計とは一點もならず。切なる心とのみおもひてわりなく夢を結びしが。いかなる事を契りけん。にくからぬ妻のお千代にも。ましてかわゆさ戀しさ。心はさらに夢見し如く。これより物ごと手につか。只お玉と床を俱にし比翼の鳥連理の枝。偕老同穴のかたらひの外に樂しみなしと契るものから。もとより發明の生質なりしが。親に孝を盡くすことをわすれ。妻を愛る心もなく。お玉母子の氣に入りし。家をたづね多くの金の費をいとはず。造作を奇麗美やかになし。こゝにお玉を引とりて。心きゝたる下女をかへ何不足なきやうにして。こゝを家とし。日夜を分たず酒色にのみ溺れしは。嗚呼是非もなき事なりかし。かゝりしほどに繁兵衛は。内に臥す夜は稀なるゆゑ。お千代も薄々これを知りて。父半六の耳にいらば。いかにはせんとおもひ過され心をいたむる事大かたならず。折にふれ事によそへて諫めんとすれど。さすが又心よわく言も出さず。人老らぬ胸をくるしめける。頃し



も秋の菊月の中旬。後の月見の支度とて。八百半が臺所に。ち千代は下女と調子を相手に。團子をまろめながら。お三にむかひてちよ「アノ三やわたしやアこの間から。おまへのいふ事を嘘だどばつかり思つて居たに。この頃の若旦那の御様子といひ。わたしは何を申しても。さつぱりお氣にいらぬかして。疔癩ばかりお起しなされるヨそしてアノお玉さんとやらも。容貌といひ藝はよし。わたしのやうな田舎ものどちがつて。口は軽し如才はなし。ほんにお氣に入るはづだのふおさん「チャ／＼おちよさん何でございますへ。あんな娘をそんなにお稱なされる事がございませうか。顔こそ美しくつて。わたくしのやうなちたふくではございせんが。どうしてあなたなんぞとくらべものになりますものか。マア第一こゝが悪うございます。下おのれがむねそれにあなたと違つて。髪は結へずか。針仕事といつたら。ほころび所か雑巾を一ツさす便をあらず。食事ごしらひなら。團子を一ツまるめ得ずサそのくせ美味好みて。酒はたらふく吞ますとさ。マアさういふばくれん娘に。どうしてお引掛なさいましたか。若旦那さまも若旦那さまでございますねへ。人は美目より只心どかなんとかで。顔はツかり美しくつても。胸に悪を持って居ちやアなんにもなりやアいたしません。馬鹿／＼しいあんなきいた風な娘は。わたくしなんざアきつうきらひでございますヨト咄しに實が入り手に持し團子押つぶしたり引のばしたりひねくりまわす聲高ばなし。お千代は夫に氣をかねてちよ「アレ三や。そんな大きな聲をして。

お玉さんの事をわるくお云でない。若旦那さんがお目をお覺しなすつてお耳へはいると悪いから。さん「なんのよろまうございます。あなたのお氣がよいものだから。若旦那さまは好きなをなさり次第だ。わたくしなんざア。側で齒がゆくつてなりませんノウ芋松どん芋松「アウさうよ／＼。モシお千代さん此間の晩アノお玉の宅のめへを通りましたら。若旦那さんや何か大勢でぞん／＼二階で大さわぎさ。そしてお玉の聲で。べちやくちや／＼志やべつて居ますから。おまへさんの事を考へると。なんだか胸ツクそがわるくつてならねへから。そこらア尋ねて馬の草鞋を見つけて。たゞきつけてやらうと思ひますと。めつぼうおつかねへ犬がをりまして。わん／＼と吼ましたから。いちもくさんに逃出しましたが。くやしくつてなりましなんだちよ「エ、めつそうな。マアそんな無法な事をして。モシひよつと若旦那さんに當つたらどうするのだへ。そなたの爲にはお主じやアないかへ芋松「エ。マアそんなものでございます。おちよ「チャホ、ホ、あきれれるヨ。チャお目が覺たかして。お手がなるやうだヨ。ハイ／＼只今參じますさん「ほんにおよびなさいます。團子ももう出来ましたから。あなたはあはやくあちらへお出なさいました。いふうちお千代は手をあらひそこ／＼にして奥二階へゆきちよ「あなたお呼なさいましたかへん「お呼びなさいました處か。さつきから一百五六十手をたいたちよ「チャ／＼啜はツかりあつ志やいますヨはん「左様して手めへ何をして居るのだちよ「ハイ今團



子を丸めてをりましたはん「ナニ團子をか。まだ製へてまはねへのか。べらぼうに埒があかねへぞ大かた丸めるよりは。志やべる方へ念が入るから。今日の團子はつばきだらけで。格別に味がよからうちよ」又そんな悪口をおつしやいますはん「それはいいが。おとつさんはまだお歸んなさらねへかちよ」ハイまだでございませはん「そんならのおれは今からちよつと出るから。お歸んなすつたら何とでも置いてくんなちよ」ハイそれでもどちらへお出なさいませか。もし御用でも有たときははん「ナニツイそこだと言ておきねへちよ」それでもマアどちらでございませはん「ナゼどこでもいじやアねへかちよ」あなたはさうおつしやいますか。どんな御用があるまゝいものでもはん「いとどいふ事ヨ。いけまつこい。そんな小むづかしい事をいふなら頼みやアしねへ。おれが足でおれが好きな所へ行のに。いさもくさもあるものかト少し疝しやくにて着ものをきかへ。立出んとするゆゑおちよは引とめちよ」マア「お待なすつて下さいませあなたのお出なさる處は。くわしくお聞申さずとも。お玉さんの所とはどうから存じてをりますか。悋氣は女の嗜みゆゑ。御異見も申す心はなけれど。あなたがあ玉さんの色香にひかされ。もとより深くもあらぬ御酒を。お過しなさるばかりでなく。お身持のわるいを。おとつさんもまことに御苦勞にあそばして。この間から二度三度わたくしにおつしやいますは。おれが口から繁兵衛にいふては。却てそこに角が立ゆゑ。折を見てそなたの口から。よう異見をしてくりやれト

おつしやるたびにわたくしの。胸のうちのくるしさは。どのやうでござりませうおとつさんお言葉ではござりますが。生れついた無口なわたくし。あなたに向つてなんとマア。御異見申す様もなけれど。申さなければおとつさんへ濟ず。あなたのお爲にもならぬからと。心には思つてをりますか。口へ出して申ましたら。定めてお玉さんを嫉むのか。と思し召ませうが。さら／＼さうではございません。譬お玉さんのその外に。お心になつた女中があるなら。二人でも三人でもお呼なすつて。御本妻にもお妾にもお心志だいなさいませも。決して悋氣はいたしません。アノお玉さんに限つては。おとつさんのお氣にもいらす。お身のお爲にならぬゆゑ。お聞入れのない事を知りつゝ。申すもやつぱりあなたのお心にもいらす。ア、やかましい百も承知だ。生れついた無口もすさまじい。よく御器用におしやべんなさるぞ。ざいぶん折角のおぼしめしで。御信切の御異見だから。聞氣だげふはいそがしくもあり。マア此頃ひまの時耳の中を。よく掃除してゆつくりと聞てやらうト本ではなこくるなさせな。おちよは猶も泣つてちよ「お腹の立のも御用のあるのも。御無理とはぞんじませんが。あなたは可愛いお玉さんの事ゆゑ。おこゝろは付ますまいが。世間の人の噂にも心だてのよくない。生れと尾に尾をつけては申すものゝ。人なみならぬお玉さんの氣質。十三四の時から多くの男に肌をふれたいたづら者。それを御承知かぞんじませんが。とても未始終あなたのお爲になりませ事



ではござりますまい。それゆゑおとつさんも御苦勞になすつてわたくしにどやかくおつしやるも。みんなあなたを思し召からわたくしは譬下女はしたになりましても。少しもいとひはいたしませぬが。お玉さんばかり女ではなし。女郎でも藝者でも心だてさへよいものなら。それをお内へお呼なすつて。おとつさんのお氣のやすまるやうに。どうぞ左様してくださいまし。さういたすと。私もほんいといふ事ヨ承知だよ。まことに安心いたしますしほんいよわかつて居るヨ。いといふのにだまらぬへか。コレよくつもつて見な。素人のお玉でさへ。内へ入れる處かへ彼奴ゆゑに些ばかりの金をつかつたのを。親父は目玉をむきみにしてか。手めへは角をはやして居るか。どうして女郎や藝者なんぞを。飯焚女を抱へるやうに。さうツイちよつと内へ入れられるぐらゐなら。いさもくさもあるものか。コウ爰をよく聞な手めへに愛想がつきて言のじやアぬへが。の今時の代世界にヨ。たつた一人の女房に御機嫌をとつてサ。斯なさいませんかへいさやう。仕りませう。アノ芝居が見どうございます。へい御覽じまし。物見御遊山御勝手次第。落ばなしうつし繪八人藝こへもお供をいたしませう。なんのかのど御注文どふりになるやうな。うんのろな野郎があるものか。又手めへのやうな貞實な女もすくぬへの。亭主はお好密夫あきらひだから。石部金吉の嫁になると丁度よかつたッけ勿論女房は家の道具色事は世界の楽しみだものヲ。たどへ浮氣者でもいたづらものでも。そこに頓着があるも

のか。浮氣合點薄情承知で惚こんだのは。おれが物好それともおれがお玉に惚たのがあなたの心にかなはぬなら。それには是非がないのお内へお歸んなさるとも。どうとも斯とも御勝手次第アどつくり分別をして御覽じろ。これは大きにおやかまゑう又そのうち御意得ませうドレいつて來やうかトあくまでちやかして出てゆく。跡にお千代はかなしさつらさ。こらへかねたる溜なみだわつとばかりに泣ふして。をつとの心のかわりし事と。わが身の末をあんじ過して。涙のとめどぞなかりける

第五回

本舞臺は三間ならぬ二間口。日あたりもよき南向。中窓のある板塀に。開戸付し小庭から。飛石つたひの出入口。内やゆかしき一住居は。是ぞ八百や繁兵衛がお玉と契る比翼樓。たがひに中のみつましきは。額の文字にあらはれたり。お玉は次の六疊の間に寐ころびながら。咄し合手は彼雁食の豆八なり。いつもかはらぬ高むゑに。おべつかをいふ舌のさき豆八「モシお玉さんエ。いつぞや四万六千日の晩の段取はもうどうも妙でありやした子。呑さんが醫者を連れて來るといつたのと。船衆の吉公が。付替る蠟燭をわすれて來たのは。もくろんだ外の趣向だが。どうも稀代によく狂言がはまりました。故人南北が筆を加へたかどあやしまれて。實にモシ感



さ子お玉「左様さねへ。あの時のまた雷さまもよつばど気がきいて居たヨ。あれで幕切が大きいよ。よかつたッけ豆八」そこが大わらひサおめへさんの方は船中で。雷さまをキツカケに。アレモウこわいとかなんどか言て。かぢり付の。うまい狂言だけれど。こつちは又おのく、腰合した酒店へ落つきの。委細かまはず、盃を傾けのちのく、ますく、酔に乗じて。唄ふやらうなるやら。テントおもしろしで踊らぬばかりサ。處でカチく、とひやうし木を聞て座中面を見あはせの。ふつと気が付て。モウだんまりの幕もきれたらう。サア来い奴原シテ来いなど。尻引かちの面々駈出さうとした處が。大雨車軸をながし。雷電ころく、びつしやりだからこれほどたがひに顔見あはせても。志かたがねへから。評議區々處が髮結の傳吉が。いつの間にとこから見付て来たか。臥座のきれたやつを持って来たゆゑ。おのく、みな赤裸となり。着類をひとつにし、禪まではづして。かの臥座へつゝみ。四人拔身をぶらく、ぶらさげて駈出す處が。どれもく、名ある名作だから。手もなく三本足が歩行やうで。ヤモをかしかつたのなんのと。神武以來ないをかしみさ子お玉「チホ、。ほんに此あひだも傳さんが其咄しでどんなに笑つたらうほんに見たかつた子トいひつゝ、たばこをすひ付さうにして「チャ火が消た。ナニお茄子や。火を一ッおくれ 下女なす「ハイく、トたつてきたり火お玉「アノそして序にお茶を一ッくん。そして二階の花瓶へすゝきをいれて。床の間へ置てくん。今におつかアが歸つて来て。おむづかる

と悪いからなす「ハイく、團子も一所にあげて置ませうかお玉「左様さのふ。序にあげて置てもよからう。アノ豆八さんおまへアノ團子はどうだへ。一ッおたべでないか 豆「イヤモウ眞平さ。晝間内でしたたまやらかしやしたをしてナニハ。御母公さまは。いづかたへ御來駕だ子お玉「チャ大そうあがめ奉る子。御母公さまは今洗湯へお出あそばしたのサ豆八「ハ、ア。それはさうと。旦那はモウお出なさりさうなものだがお玉「左様さねへ。はやく來るとおつしやつたッけ。だいぶけふはお遅いヨ。大かたお内でお千代さんといちやつゆいてもお出なさるだらう豆八「違ひなし思ひやられやす。まかし此頃はそんな景色すこしもなしさ。その筈だて子。お玉さんといふ新婦貴が出来たから。持ふるしのはどうしても通用が悪いのサお玉「チャ気が付なんだ。よろしく申ておくれ豆八「へいく、お返事は御口上かな。なんぞお重のおうつりはござりませんかッお玉「チホ、。アノおうつりには。空をあげますのさ豆八「へん澤山だ。どうもならぬへアツハ、。トむだをいふ時入來るは。繁兵衛と吞太郎なり。豆八は見るとより出むかへ。六段めの勘平といふみえにて。豆八「これはく、御兩所ともに。見ぐるしきあばらやへよふこそその御入來。とまじめな顔で手をつけば。吞太郎もぬからぬ顔で。呑ッウ見れば家内に料理のやうすもないやうだか豆八「イヤモウずんと馳走は内證事。おかまひ申はいたしません御勝手次第にいざまづあれへイヨ音羽やア引ッはん「おきやアがれなんのさまだ三人「アハ、。豆八「旦那モシ大さ



うおまたせなすつた子。わたくしやア先刻から。ヤ。待たの候の權八小紫は。モウお床へまはりましたはん「なんの事だくだらねへ豆八」ホイ又しくじつたお玉「チャよくお出なすつて下さいました。おまへさんなせお遅ふございましたはん」フウはやく来るつもりだつたが。山の神が御託宣をあげたから。それで大きに遅くなつたお玉「チャ山の神とはおちよさんの事でございませうかへ。そんなに悪くおつしやると云付ますヨはん」大事ねへの。この頃はちよ代めがどうも老人めへた口をきくから。癪にさわつてならねへのよマア「二階へ天じやうしよう。サア香さんも豆八も來ねへ」ト二階のぼし「豆八」ハイ「」お山晴天でございッ。掛念佛でのぼつてくりやう。なアンマアいだアンぶウ引ト「ごなりならははん」エ、さう「」しい静にしねへか。どかくこの病人にもこまる。謔言が止めへうちは本復はしめへぞ豆八「オットあやま針の療治も古いかッあやまだいて寐てあたぼてぐいぎまりの翌日はぶんながしの居残りどやらかしてへ子はん「いよ尤だよ。諸事おれが胸にあるヨ。なんでもこの難病は般若湯酒のなけりやア治しがたいのト手をちよん」どた「」けば。ハイ引とお玉はあがり來りお玉「モシおまへさんアノ奇觀亭から。お誂へ物だと申て。いろ「」お肴を持て參りましたヨはん」さうか。來がけに左様言ておいたからだ。そいつ大待兼ヨ。はやく持て來な豆八「モシ」お玉さん。爛はぐつと暖爛にやつてほしい子。チャットいふだけ野暮かッ。いはずとも事だつてお玉「チホ、。、。よくさう

口が廻るねへ豆八「そのはづさ子。腹が減りやア目がまはるから。酒が呑てへから。口がまはるのさお玉「チャ澤山だねト下へゆく是より爛もでき。くさん」の肴をとりならべて。お玉も中にうちまじり大酒宴となる程にひくやらうたふやら。踊るやら日もくれて。月もさかりにさし込にぞ。猶ひとしほおもしろじとて。みな「」あくまで酔に乗じ興に入り滑稽をつくす事。なが「」しければこゝに記さず繁兵衛をはじめ豆八吞太郎。ひとしくこゝに酔たふれて前後もまらぬ高いびき、かゝる處へ入來るは彼髮結の鵜香の傳吉「イヨウ剛傑に湯出ッた」。モシお玉さん豆八さんの面は。まるで湯出たての蜻のやうだ子お玉「チホ、。、そんなわる口をお云でない。目をさますとわるいから。おまへモウちつと早く來るとよかつたよ。誠に大らんちきだッけ 傳「そいつア強が腹などをした。旦那早くお出なすつたかへお玉「インエ暮方にお出なすつたよお千代さんがおむづかつたさうだと 傳「それサ。その事に付てはなし有サ。ナニサ先刻子お玉「チャットおまち音高しだから。爰ぢやアわりの。マア志たへお出 傳「さうか子。そんならマア「ぺえきめて行やせうト側にある茶碗を左りの手にもち右にちやうしを持。ふつて見て「フウあるな妙「ト手ぶやくにつぎ「ア、甘露ありがたし旦那のお吸物を頂戴ッ。チ、ごめて「冷ッこい所が。またひと志ほ。フウこつちは何だハ、ア鯛の漬焼か。こいつ奇妙。志かしでへぶあれたの不動だ。お玉さんおめへマア先へお出なせへわたしやアモウ「ッおちやうつけだお玉「チ



ヤ／＼おまへひまたらうに今お燭を仕なほしてあげやう 眞なアに是でよしこのさ。やり取なしのぐい呑のぐい仕舞。一斤／＼の青ツきり。むりな口舌に茶碗酒。まんざらでねへやつさトひとり茶わんで引かける。お玉ははなしをはやく聞たく。心のうちにはやとかしく。おもへど左様もいはれねば。おれつてへヨの思入にて。さきへ階子を下てゆけば傳吉は殘殺を。つツのさちらして吞まひ。跡より階子を下りてゆく

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引二編卷之上 終

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引二編卷之中

東都 曲山人 松亭金水 合作

第七回

折から母は行燈の。側に残りの口取や。刺身皿まで引よせて。飯を喰て居たりしが。傳吉を見て 世傳さんあめへなせ遅かつた。仕事を仕まつて直に來ると宜かつたのに 傳左様さ。早く來やうと思つたツけが。ちよいと親分の處へ顔を出したら。友達が 大勢居やアがつて。無理むてへに引ずり上げて喰も去ねへまたしもんだの。珍らしくもねへ蛤の売むしでやつたらに強やアがつたが。味くねへとは思ひながら。吞かゝるとおつなもんで。まさかに半途でやめられねへから。ツイうか／＼かつくらけへしたやつヨ。親分が生姜だから。つまらねへ。夫でめつぼうおそまき日光蕃椒となつたのすお玉マア夫はいゝからこつちへお出ト一間のうちへ招き入れ小聲に成て 玉コウ傳さん。咄しがあるとはどういふ事だへ 傳それか。斯いふ理屈サわつちが先刻旦那の處へ行て。見せで瓜助といふ男の髪を結て居やしたよしか。すると見せの二階が繁さんなんぞの座敷で。何かお千代さんと聲がするから。こいつ晝日中いちやつくのか畜生



めど。耳をすまして聞てゐると 玉さぞのろけたらうチ 傳「さうでなしス。するとおちよさんが少しうるみ聲で御異見さ。モシあなたへ。わたくしは知るまいと思し召ませうが。お玉さんにお惚なすつた事は。よふく存てをります。アノお玉さんはそれはく心だての悪いいたづらものそれを御存なくお通ひなすつては。未始終のお爲にもならず第一おとッさんへ御不孝でござりますとか何どかいふと。旦那がくつと癪にさはつて。いゝはおれが好で惚たのだ。女房は家の道具。色事は世界のたのしみだ。今時たつた一人の女房にこびついて。御機嫌をとるやうな。うんのろがあるものか。馬鹿な面な。だれだと思ふア、つがもねへど。成田屋といふ思入で。委細かまはずお出かけたつたら。跡におちよさんが一人舞臺で。よつばと愁歎があつたやうすサ 玉「チャ／＼さうかへそれぢやアわたしの事を。尿を味噌に言て焚付たんだね。何のきいた風な女だ。千手かどつかの郷在もんの癖をして。繁さんの嫁にならふとはあつかましい女だ。何でもわたしを邪魔にして。いひてへ三昧をならべ立て。中を絶ふといふ氣だらうが。全脚根性が曲つて居るヨ。男といふものは女房の外に働次第で。二人でも三人でも女をこしれへるのはあたりめへだのに。嫉妬をやくのは氣が知れねへ。第一あんな田舎者だもの。たどへ繁さんでなくッても。誰がぞつこん可愛がつてこびついて居るやうな。唐變木があるものか。わたしも女のきれッばしだものチ。一日繁さんと馴染だからは。ちよつかな事で切れるものか。

あつちに荒神さまが有なら。こつちにやア太神宮さまがあるはな。ノウ傳さんさうじやアねへか 傳「アウさうさ違へねへの真中だお玉「どうぞして此意趣を返してやりてへのふ。くやしなくつてならねへ。どうしたらよからう 傳「左様さ男同士の喧嘩じやアなし。まさか女の事だから伏待をして打のめされも止めへス 玉「どふかい、事が有さうなものだのト小首をかたむけ暫く考へしがたちまち手をはたと打て 玉「それく能事を思ひついたらよ斯いふ趣向を 傳「アウそいつアよからう。きつと妙だの 玉「なんだへまだ咄もしないに先くいりな 傳「當時早香込にやらねへけりやア。流行におくれ狼さの。そうしてどう言案じた 玉「斯さ。ちよつと耳をお貸ト耳に口よせまばらくさゝやき「チ。といふ狂言だが。日外もあまへの骨折で。わたしが思ひもといいたから。今度もいやでもあるだらうが。是非くどうぞはたらいておくれな 傳「アウなるほどこいつア妙案じだ。夫じやア今度はわつちが色男になつて。お千代さんを 玉「コレサ聲が高いはね。音羽屋の才三氣どりで一番うまくやつておくれ 傳「へん有がてへ。モウ何にもいはずとよしサ。諸事鶉香の傳吉だヨ。そのかはりうまくやつたら古いやつだが丸印をまつかり 玉「それはいふだけ野暮だアね 傳「チツト眞平御免の勸化トいふとき拍子木「カチ／＼／＼カチ 傳「チヤモウ四ツだわつちやア直に歸りやせうト立あがる二階でむせうに手がなる 傳「ハア旦那がお目覺と見へる。お目にかゝると遅くなるからよろしく申ておくんせへ 玉「左様



かへそんならかならず頼んだヨ 鹽「アイト表へ出てゆく。お玉は階子をどん／＼あがるはん」お玉か。ア、酔たぞ。アノ水を一盃くん玉「ハイチャおめが覺ましたテト水をくみ來りて玉「ア繁さんお前さんモウお寝らないかへ。あつちへお床もどつて置ましたよはん」アウさうか。寝やう／＼。ア、ひどく酔たゲエイ引。豆八や呑さんは起さずといか 玉「ハイこゝへ寝かして置てもようございませうはん」アウそれも左様かへ。そんなら寢所へ行やんせうか 玉「サアお出なさいまし。アノわたくしが背負てあげませうかはん」なんのわるく洒落らア力もねへくせに 玉「アレマアおぶはして御覽なさいよ。チャ重たいそんなに上からお押なすツチャアいや／＼はん」重てへ筈よ張籠じやアねへもの。ソレ斯かアウなか／＼力があるの。コウおめへの乳は乳袋が小せへのふ。お千代のはおめへのよりアよつぽど大きいぜ 玉「チャさうでございませうかへ。乳の大きいのはすけべえだとはん」へんうまくいふの。小せへのは猶すけべえだらう 玉「チャようございませう。あなたに似てすけべえさ子はん」あきれもしねへの。イヤ又此肌ざわりのやわ／＼とした處は。どうも千金こてへられねへ畜生め 玉「アレサくすぐつたい。わるい戯談ばツかりなざるよトとち狂ひながら寢所へはいるはん」ヤアどつこいとお興をすへて夫からと 玉「チャおまへさんアノ小用にまだお出なさいません子はん」アウおめへの股ぐらへひよぐり込氣だからの 玉「チャ悪い口だねへはん」さうよ悪い口もなけりやア。かわいがられる口も知れね

へのス 玉「マア戯談はやめにして。サア小用にお出なさいましよはん」ハイ／＼さやうならお供をいたしませうト連立ててうづばへゆくはん」サアおめへは雪隠へ這入な。おれは小便所へやら、かすから 玉「ナニわたくしやア跡でもようございませはん」エ、やばな事をいふの。一所に便て一所に寝るのが當時流行だ 玉「ほんにさやうさねへト雪隠へはいれば繁兵衛は小便をしながらアウはん」イヨウゑらい音だの。お玉どうしたもんだ無禮な。人の鼻の先で。アウと屁を放とは顔に似合ねへ色氣なしだぜ 玉「チャ／＼いやだよ。おまへさんがお屁をなすツて置て。人にお托なさるよ。餘程虫がいねへはん」ナニ虫がよかアねへ音がいのだ。まかし一河の流れ一樹の蔭一ツ雪隠で屁を臭合も。前の世からの因縁だらうヨ 玉「チホ、とんだ處へ理屈をお付なすつたねへ。おまへさんのははんの利屈屁といふのだはん」おきやアがれ澤山だトむだを云ながらふしどへかへる 玉「モシ今ごろはさぞお千代さんが案じてお出なさるだらう子はん」又そんな事をいつて塞がせるヨ。おそれるぜ 玉「それでもおまへさんとお睦しかつたのに。わたしと云悪魔が這入たから。さぞ恨んでも出だらうと思ふと。怖くつてなりませんよはん」馬鹿なそんな。やぼつてへ事はいひツこなしおもしろくもねへ。勿論この頃じやア親御がやかましくいふそうでの。お千代もなんだの彼だのと意見めへた事をいふけれど。なんのかまふ事があるものか。まかり違やア。さらけ出す分の事だ 玉「爰でこそそんな立派な口をおき／＼なさるが。お千



代さんがやさしい聲で。モシあなたへサアお休みなさいまし。お多葉粉を一ふくあげませうかへ。なんぞとおもてなしぶりがありませんと。おまへさんは直にぐたぐたにおんななさるだらう。それにお千代さんは大そう手がお有だといふ事だからはんなんの嘘をつくぜ。手があるの足があるのといつたつても。山出しの在郷者だもの。カラ面白くねへの石佛を抱て寐るやうなものよ。玉「チャ〜おつウおつしやるヨ田舎者といふものは子。根々丈夫で強いといふから。まことにおもひやられますヨはんよく其様ないやみをいふぜ。おめへにも似合ねへ。志かしお千代ばかりでなくどこの嫁でも内儀さんでも。手がなくつておもしろくねへに。歸してゐるぜ。なせといつて見な。ソレ女房のあるものが女郎買が止すか。孫のある隠居が妾ぐるひをしたりよ。地者と賣婦といふ名の變りばかりで。手のあると無のは實にをかしいヨ。何も女に變つた利屈もねへが。素人に小町のやうな女ばかりもなく。賣女に好色な女ばかりもねへがの。どうもまことに不思議なものよの。玉「チャ〜なんでございますへ。不測だのなんのど。地者でも賣女でも何もかはつた事はあるまいが珍らしいと珍らしくないので。變つたやうに思はれませうヨ。アノママ「漫々の子供が。うなぎよりは外の魚が好で。上菓子やの子が美しい菓子より。駄菓子を好て食るやうなもので。鼻に付ては悪味とやら。ママ嫁も貰ひ立の初物のうちは格別にくづらしい物だから放蕩な亭主もその當座は内にはッかり居ませうが。毎日食ると鼻について段々珍

らしくなくなつて。それに何日何時でも御用が足るから。どうしても倦勝手でございますのさはん「違へねへ。ホンニ左様だのふ女郎を買つても。まはしの多い晩なんぞは落ついてはなしも出来れ〜から。いづれ何か喰たりねへで。ひもじい目をする事はいく度もあるから。格別に風味がい〜といふやつだ。ほんに餅は餅やとはよく言たものヨ。内で製た物は味くなくつて。錢を出して買つた物は味へやうなもので。女房も金を出して買ねへだけに。第一信向がねへから。おもしろくねへ筈だ。そこを見ると何でも腹一面食のはわりいよ。物事うちばに食て居ることだ玉「さやうさ第一毒でございますとさはん「左様ヨ腹も身のうちだ。是からは扣へめに箸を取ふよママそんならお珍らしい處を。ちよいと一口御賞翫せうかトお玉の手をとり引よせる。玉「そんな事をお言なさるが。おしつけ飽たらふり向ても御覽なさるまいはん「ヘンそんなに大食をするものか。ソレ腹も身のうちだ。玉「きつと其口をおわすれなさいますなヨト〇〇〇〇〇〇寄そば天井で。れづみの聲「チウ〜〜〜。

第八回

琴「うらめしやうす雪のわが縁。うらむまじや。むかしは情ありしを」コロリンシヤンと聞ゆるはたい垣一重隣なる。娘が琴を浚ふ聲。ものおもふ身は殊さらに。耳にさはりて其方をふ







ん。幾度いつてもおなじ事だが。實に死ぬほど惚ぬいた。此傳吉を不便だと。思つてどうぞわ  
つちが願ひをちよ「エ、めつそうな傳吉さん。おまへそれは本氣かへ。マアよく積つてお見なさ  
い斯し、旦夕心やすく。出這入もしなさりながら。其様な事があつて見ちやア。世間へも濟ま  
すまい。殊に私は申さずとも事だが。繁兵衛といふ良人のある身。少しの間斯して居ても。  
人の疑ひをうけて濟ません。サアはやくお歸んなさいト腹立まされに突飛す。その手をおさへ  
て。傳ヲツトあぶない。短氣な事をおしでないツ。モシお千代さんおめへさんは。顔にも  
似合ねへ強情だねへ。其様とは聞ずとも。百も承知二百も合點。もし顯はれた其時にやア。お  
めへさんの了簡しでへで。逃るといふなら逃ませうし。俱に死なふといひなさるなら。二ツと  
ねへ命でも。さらに惜とは思ひやせんこれほどまでにおもひ詰た。此傳吉を突出そうとは。そ  
りやア狼いぜ。モシハテサおめへさんも。餘まりな情志らずだチト力まかせに引よせて。  
羽二重よりも和らかき。お千代が顔へ傳吉が。にくてらしさの青髭を。こすり付れば今はたま  
らざ。お千代はあれよと身を踊らせ。こなたへ除んとする處を。解かへりし黒縹子の。帯を志  
つかと傳吉が。とらへて其處へ引倒す。お千代も今は一生懸命。たどへかよはき女子なりとも  
手籠にされて戯淫れんやと。命かぎりの膂力を出して。手を放さんともがけども。男の力にか  
なひがたく。聲ふり立て下女下男を。呼んとすれど不測やな咽はつまりて聲出ず。されば悔し

き涙のみ。玉ちる秋の夜あらしや。時雨にあらで袖ぬる、七顛八倒あせる身を。なほ傳吉は志  
つかりど。○○○○○水淺ぎの湯もじを引ケば志ら雪に。光りをそえし肌の光澤さふはさせ  
じど居つても。寐てもかひなき女の力つひにお千代は傳吉が。○○○○○。關はわれ  
から許さねど身を汚されし悔しさに。齒をかみまめて茫然たり。傳吉お千代を均おこし。顔を  
見つめて莞爾とわらひ。傳どうだおちよさん。これほどまでにおもふ傳吉。まんざら憎くもあ  
りますすめへ。よく考へて御覽じろ。繁兵衛さんは立派な良人。そりやアいはずと知れてあるが。  
ハテ心根が邪見じやアねへか。此様な美しい女房を。この夜の長いにたゞひとり。宅へ寐かし  
て自分じやア。大ばくれんの革羽折十里四方へ名のひいた。淫奔女にだまされて。大切な金  
錢を湯水のやうにつかひす。いゝ氣になつて居なさるとは。第一白痴の行どまりト云たら腹  
も立うけれど實に左様じやアありやせんか。それをまた正直に。一人貞女を立とふし。留守を  
して居るといふ。おめへさんも馬鹿律義だへンチツト氣のある女なら。亭主が外で色をすりや  
ア。好た男を引ずりこんで。樂むのはあたりめへと。理窟をつけて今ごろ迄にやア密夫の。二  
人や三人拵れへねへと云やうな野暮がたい女はありやせん。長平浮世に短エ命さ。何をたの志  
みに生てるものか。おめへさんも是からア。その氣になつて傳吉を可愛がつて○○○○○。  
見かけこそは憎ていなれ。繁兵衛さんより實があるぜト目を細くして○○○○○お千代はうるさ



さ腹立しさに。泪をぬぐふるみ聲ちよ「おまへが實か繁兵衛さんが。不實か邪見かまらなないが親の許した誠の良人。たとへどこのよに嫌はれても何のそれをつらいとも憾とも思ひませう。たゞ哀しいはおまへの無理。得心もせぬものを。捕らへてどうく戯淫で。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。エ、憎らしい傳吉さん。爺父さんも今宵はお留守。おさんや何かも廊二階。遠いと言ても一ツ家に。寐て居るものを呼おこし。どうかして腹を醫やうと。思ふても聲は出ず。體はおまへに押へられ。手ごめにされたが悔しいはへトまたもや泪はらくと。泣ふすを傳吉が。せゝら笑ふて立あがり。傳「よふく思ひは晴したけれど。得心づくで打とけて。〇〇〇〇にやア曲がない。どうで一同じや左様はいくめへ。また明日の晩來やせうから。酒でも買て待てゐな。ドレ歸らうト側にある。手拭とつて身を起し優くとして出てゆく。おちよはほつと喘息も。狩場の雉子の卒歩をのがれし。心地に跡を見あくりつ宵に皆に言つけて。ままりをばよくさせたのに。何處から這入て來たかまらん。怖い事やと身をふるはし。氣のせへかして〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。浄水に行んと行燈を。つけてうつすや蠟燭の。眞の汗さへ胸さきに。流れてふつと目をひらけば。これ轉寐の夢にして四邊は深とふけわたり。つれさせてふなく虫の。枕に近く聞えたり。餘りのことに茫然と。おちよは霎時合點ゆかず見れば四下に入氣もなく。こわれたりしと思ひつる。髪さへまやんと元のまゝ。そんなら夢であつたのか。ア、嬉しやと

悦こんで。立は餘りに身を悶へしか。寐衣帶さへ湯卷さへどけて落るに我ならで。ハツト驚き不審く。兎かく夢とは思はれねど。人にいふべき事ならねば。其まゝにして一日過。二日過つる其うちに。かの傳吉は朝夕に。來れど例にかはりなく。仕事まふて歸りゆく。おちよは傳吉が顔見るたびに。思ひ出すさへ怖ろしく。元來内氣の性質。あれが誠の事ならば。なか／＼生ては居られまい。危ことゝ人志れず。物おもふ身も後終に。無實のうき名立田山。顔に紅葉の争ひを。引出すべき前象と。思ひ合して哀れなり。

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引二編卷之中 終



盛衰 娘太平記操之早引二編卷之下

第九回

あふ坂のゆふ告鳥にあらばこそ。君が往來をなくくも。美面も心も何一ツ。不足はあらぬ八百  
 繁が。妻のお千代は過世の罪か障かどにかくに。穩ならぬ胸のうち。悵氣はせねど良人が身持。  
 朝な夕なに氣にかり。親の手まへも汲かねて濕り勝なる袖口も。朽て斷離れんおもひなり今  
 日は親父も繁兵衛も。宿には居れど繁兵衛は。昨夜の酒の持こしか。色青ざめて子舎のうち。  
 浦團かつぎて一寢入。やうく目に目がさめてん「コウくお千代。ア、何處へ往たチツト間が  
 あると勝手這入をして三や何かを對身にまた陸な事はしやべらぬへ。チイおちよく「ハイ  
 ハイチヤお目が覺ました子。あなたマアいつそお色がわるうございますヨ。此處かお氣持がわ  
 るかアございませんかはん「ム、氣もちも悪い筈ヨ。些保養をしやうとおもつて内をあけりや  
 ア。また内でもそれくくに保養をはのめらア左様いふと手めへ勝手のやうだけれど。男は働き  
 しでへで。妾側女は勿論。圍ひ物をしようが妓女を買ふが構ひはねへが。良人が左様だからと  
 云て。女房にまで始められちやアたまらぬへちよ「チヤ何でございますとへ。可笑なことをおつし

やいますねへ。私は何も致しはいたしませんはん致しはいたしませんが。たゞせました斗り  
 かハ、ハ、ちよ「何だかどうも譯らないことをおつしやるヨ。私しやアどうも否でございますヨ。  
 アノ何をいたしたのでございます。左様おつしやいまし。エモシ何でございますエはん「ア、  
 やかましいそれよりマア湯を一ツくれ。そして其處の引出しに。万金丹が有から取てくれ。ア  
 アくるしいどうも吞過ると翌日によはるちよ「また其様に召あがらないでも宜ございませうに。  
 全躰この頃まで嫌ひな御酒をばん「エ、やかましい。また老婆じみた御異見か。ヘンそれより  
 やア御自分が天窓の蠅でもお退ひなせへト言ながら万金丹を口へいれ。湯をぐつと一口のみし  
 が其處へ吐出してはん「ア、熱いくべらばうに沸て居らア。熱けりやアあついと。點でことは  
 りやアい。此頃ア何かうわくして居やがるから。折ふし此様な目に逢せらア大概おれたも  
 んだ。藥を飲といふのに。沸湯をうめもせず持て来るやうな。氣のきかねへんちよ「きもねへ  
 どきません。と云んとせしがこゝぞこれ。女子の嗜む所なりと。こぼれし湯を紙でふきちよ「チ  
 ヤ御免なさいましヨ。終氣がつきましなんだ。舌をやけどなさいましたかへ。どうせうのふ  
 繁「ヘン是が元になつて死んだら猶歡びだらうが。マアく此位な事じやア死ぬ氣づかひはね  
 へから氣の毒だちよ「貴君はマア。つひにもない。よく色々な事をおつしやいますね。何だか



私は。いつそ氣になります。誰ぞがなんとかやましたのかへ。尤私のやうな。足はないものでございませうから。萬事お氣には入りますまいがト云かけて涙ぐむ。當下繁兵衛はむつくりと起あがり。お千代が鬘をつかみて引倒しは、ウヌゑるめへと思つて。何だ空涙ア流しやアがるな。ナニわたしのやうな足はない者だから。氣に入るめへとは能いつたコレ足はさア足はねへやうにナ。良人を守つて居るエ。おれが氣保養に。一日と二日泊つて來りやア。己れも宅で色の戀のどふざけやがらア。コレ手めへ何ぞといふと。ヤレ本も讀だの躰方も習つたのだ。御大造なとを云やアがるが。何處のどの書物に。密夫をゑろと書いてあつた。エ、ふさ／＼しい女だアト口にまかして置るのみか。腹立まぎれの擱り拳に。三ツ四ツうたれて鬘はどけ。櫛笄もばらばらと。落る涙の止どなくお千代は良人が手をおさへて「アレサマア何でございませうエお氣に入らない事があつて。打たゝかるゝは厭ひませんが。密夫をした不義をしたと。被仰のがわかりませぬ。定めて私を憎む人が。有と無とおまへさんに。申た故ではございませうがどうしてマア怖しい。たどへあなたが三十日。乃至百日半年の。お留守をいたして居ればとて。そのやうな事が出來ませう。是はッかりは疑ひを。どうぞ晴してくださいますト云せも敢ぬに繁兵衛は。目をむき出して聲をはりたては「ホンニ盗人たけ／＼しいとは手めへの事だ。立派な證據を押へられて居ても。まだつべこべと利口らしい事をいふのかエちよ、チヤ立派な證據とは

何でございませう。身に覺えもないとに。證據のあらう理はございませぬ。何でも貴君のおつしやるとを。背くまいとはぞんじます。是はッかりは夫なりに。ハイと申ては居られませぬ。何様な證據がございませうかトレお見せなすつてくださいますは「チ、見せぬへでどうするものかトハいふものゝ大事な證據。手めへの手にやア渡されぬへ。おれがいち／＼讀で聞せる。耳をほじつて待て居るエト立あがつて出す手箱のうち。とり出す一通繁兵衛さら／＼とおしひらき

此ほどはおもひよらす御めもじ致しゆる／＼と御かたらひ申候事誠に／＼御嬉しくそれより後は猶さらに其移り香のさりやら御姿のみ目にちらつきて何事も手につかず朝ゆふこがれ／＼いよ／＼其ふし御かたらひのごとく不圖した事が縁となり一旦枕をかはせしからは二世の夫をも捨小舟此身に心中たてどふしてよしや火の中水の中虎ふす野邊の果までもはなれまいどのお言葉はよもや啞では有まいと夫はッかりを樂みにおもへど立派な主あるお方どうした風の吹まはしでもしお心が替つたならどそれのみ案じて胸のうち

ちよ「チヤマアそりやア何の事でございませう。そしてマア其文は。誰から誰へ遣つたのでございませうハ、とぼけるなコリヤアひつじの傳吉から。手めへの所へ差越た文ヨ。まだまだおもしろいめへましい事が。くど／＼と書いてある。サア是からが肝心肝文



ふかくもほさつし下さるべく我々風情の身とちがひ少しも不自由なき身をすてしのほ  
 深切命にかつても忘れやらざせんじりり  
 はん「へん是からさきにまだ大變な言ぐさがあるが。そりやアまた後編の事に仕やう。まづ是はか  
 りでその細首をばつたりとやらがす罪は澤山だア。志かしおらア其様な野暮はいはねへ。これ  
 から傳吉を呼びに遣り。手めへを奇麗にくれてやるから。有難へとおもふがい。ちよどうも  
 私にやア。さつぱり合點が参りません。アノ傳吉とやらいふ人は廓へ来る髮結さん。折ふし  
 顔を見るばかりで。終しか口を利もせず。况て色だの戀だのとは。そりやア何かの間違で  
 はん「間違も殊によらア。これ此文の末を見る。おちよさまへひつじより。と此通り書てある。  
 羊といふは傳吉が渾名。サアこれでも言譯があるかちよ「ハイ言譯はございます。覺えのないの  
 が何より證據はん「エ、ふさふさしい此女めエ。まだ志ら〜と言振をるかへ。何ぼ手めへ根生  
 をすえて。驚を鳥と言ふとしても。大事な文を寐所の下へ。わすれて置たが運の盡だア。サア  
 有様にいふならよし。言はずは此方に仕かたがあるト若氣に早る繁兵衛が。側にありあふじ首を。  
 逆手にとりて白眼つければ。おちよは落る涙をおさへちよ「おまへさんもマアけしからない。嘘  
 か真事かろく〜に。わかりもしない其先に私をお殺しなさるお氣かへ。たどへ命をもられ  
 るが。怖いからとて覺えもない。不義淫奔の罪をマア。どうして此身に請られませう。是ほど

いふのを聞入なく。どう有ても殺すとなら。どうとも貴君の御勝手次第ト魂すえたる女の  
 念。良人の顔を見詰つ。猶もなみだの玉あられ。心の内におもふには。少しも覺えのないと  
 を。文を證據に兎やかくといはる〜つらさ悔しきは。何に喩へんやうはなけれど。思へばこの  
 頃轉寢に。見たる夢こそ正夢にて。なき名を流す種とはなりしか。然はいへいまだ下紐の。關  
 は許さぬものなるを斯馴々した多玉章を。送るべきわけはなし。是には定めて仔細あらん。と  
 おもふものから差あたり。名宛を證據に良人が腹だち。何といひ解術もなく。呆れはてたる計  
 なり

第十回

折から来るひつじの傳吉。子舎の隔紙おしあけて。傳「へい御めんなせへ。ホイ是はしたり若旦那  
 那とお千代さん。口説最中とも志らず。ハ、ハ、ハ、不躰千万。へいまた後に参じませうト往んど  
 するを繁兵衛がはん「チイ傳吉〜。丁度能所だツた。マア此方へ這入なせへ。傳「ハイ何でござ  
 いますはん「マア其處へ居らッせへ。何だとは不届男だ。日頃から目をかけて。最負にしてやる  
 おれが面へ。よく泥を塗つたナ。大かた夢にも知るめへ。思ふだらうが悪事千里。皇天さま  
 が許さぬへ。お千代と貴さまが不義淫奔の。尻がわれたぞ覺悟をしろ。葵下坂二ツ胴。物の見



事にすつぱりと。やらかす筈だがコレ傳吉。そりやアザんと昔のとで。今ぢやア其様な事は  
 やらぬへ。おれも江戸ッ子の切ッぱしだ野暮なことは言ねへヨ。奇れいにお千代を貴さまに呉  
 やう。其かはりにやアこの町内へ。足踏はさせられぬへぜ傳「ハイ」これに旦那。イヤ  
 さぞお腹も立ませう不御恩になるおめへさんの。お顔を泥す氣はござへませんが。ハテ其處  
 が思案の外。面目次第もござりませんが。今のやうに被仰て下されば。漸々胸もおちつ  
 て。地獄で佛と申さうか。これが誠に命の親。サアお千代さん是从からア世間はれてのおまへと  
 夫婦。一ツ竈破鍋にも。此と蓋が腕ツきり。拵いで食せる案じなさんな。ヤレコレで  
 落ついたト胸をなで平氣な顔。お千代はきいて悔りしちよ「イヤアおまへは氣が違ひはま  
 ないかへ。私が何時おまへと。其様な事をしました。先刻からして旦那の腹だち。知らぬと言  
 ても聞入なく。困つた處へおまへが來たから是で證りが立うかと嬉しくおもへば何だど一  
 を一ツまたともないものを。私と情合でもあるやうに。旦那さんに悞つたり。サアこれからは  
 表はれての。夫婦とは何の事だへ。ヲ、否なこと。アノ人はなんでも氣が違つて居るさう  
 だ。芋松は居ないか。コレ瓜助やアノ髮結さんを其方へ連れて往てくんな。エ、氣味の  
 わるい傳「これさ」お千代さん。何ば旦那の前だと言ても。其様につれなく言てくれずとも  
 宜じやアなしかへ。此中も繁兵衛さんは彼所へ泊りの晩に。わたしが來たらヲ、よく來た。旦那

那は毎日毎晩お玉さんとおたのしみ。此方も生た人間だ。○○○○○○○○。樂なくつちやア  
 命がつかぬへと言なすつて。私が來るや否や。志かこの子舎で。ソレ夜の明方まで○○○  
 てかおいの戀しいのと。此髭面を食付たり。○○○○○○○○。ハ、ハ、ハ、今のお若  
 さに。物覺えが悪いねへ。志か其時小遣ひに。困ると言たらおまへがいふにやア。金といつ  
 ちやア手元がないが。困るなら是を貸うと。玉の付たこの銀簪志か鏡臺の引出しから。出  
 て貸てくれたじやアねへかそれもおすれて此傳吉が。盗んだなんぞと言なさんな。夫から直に  
 質に置てど。思つたけれど可愛らしい。おまへの深切考へて見りやア。餘まり無慙で。くるし  
 い中でも持てあるト懷より出す烟草入の。底をさぐつて傳「ア、コレに。有た」トとり出  
 せば。繁兵衛は見ているよ急立。にらめるお千代は氣も狂亂「何から何までどうして見て  
 も。合點のゆかぬことばツかり。女の邪推かまらぬが。それじやアおまへは旦那さんと云合  
 して。吾儕の身に瑕をつけ。この宅を逃出して新道の嬢を直さうとか。何とかいふ相談だ  
 らう子。左様なら左様と明々地に言ておくれなら宜。たどへ私がどのやうに思つたどて是非も  
 ない事。親司さんへもお断申て。どうでも旦那のお心の。濟やうにいたしませうはトいはせも  
 あへず繁兵衛は。いと逆立眼を睨てはん「いはせて置ばべら」と途方もぬへことを言やアが  
 らア。ウヌが密夫をした罪を消うとおもつて。何だ云合して事をするたア。不届ことをいふ女



だ。人が勘辨すりやア圖に乗のか。此様な奴は見せしめの爲に。息の根をとめてやらうトすつくと立てお千代が襟首。捕へんとする所を「ヤレまて繁兵衛やうすは聞たト一間を出る親司の半六。左りに珠敷を爪ぐりて半」こりや繁兵衛。その腹立は尤まごく。なる程おぬしのいふ通り。顔に似合ぬ不届女だ。イヤまた其處に居る傳吉どのもまはり場の嫁を淫戯で。イケ志やア〜として居るとは。これもまた膽のよい人。そこで似たものは夫婦とやら。すつぱり奇麗にくれて遣うと。良人からして暇の出たものサア連れて往うといふも無理ではないが。良人は暇をくれたにもしろ。わしも一旦お千代とは。親子の縁を組だもの。まだ肝心の此親司から。暇をやらぬ女兒なら。左様自由自在にもなるまい。ナ。傳吉どの左様ではないか。今日から後はわしが女兒まづ〜わしが方へ引とつて。容子に寄たら近〜に。貴様の方へ嫁入すも。この親司か胸にある。お千代來やれと手を取ばお千代は泰山のおもはくを。思ひかねつゝ立難るを。半六まきりに引立て。奥の間へこそ入にけれ。跡見おくりて繁兵衛が。いまだ怒りも解やらす。にがみ切たる景勢に。傳吉は手もちなく。こそ〜として逃出し。表へ出れば莞爾と。一人こころに點頭て。やがて新道へはしりゆく。折からお玉は湯上りの。まだ露たる髪。荒櫛にて搔あげながら玉母御や。おめ〜こんど京橋の方へ往たなら。忘れず仙女香を買て来ておくれヨ。どうも外のおしろいは私にやアつけにくくつてならないは。そしておま〜も黒油の

美玄香といふのを買ってつけな。鬢や何か胡麻鹽になつて見ツともないわね。アノ油をつけ御覽眞黒によく毛が染るから。所々のお老婆さん達が付て。みんな若やぐツサ。母左様かあれも若やいで。旦那でもどらうかアハハハハ。玉ア、旦那でもどるがいのサ。ナニ母御。女は幾歳になつてもすたらねへのヨ。母エ、この見はよく馬鹿アいふのウ。おれが今さらどうなるものかハハハ。處へ入きたり。「なんだで〜ぶお睦ましい子。母ヲヤ傳さんか。マアあがんな。ナニサわたしが坂本の黒油をつけて若やいで。旦那を取らうといふ噺したが。何とおめ〜わたしを世話にしてくれる氣はね〜か。傳有ども〜大ありサ。そのかはり己の方へ月〜三兩ツツ小づけへを送んね〜ハハハ。母大かた其様な事だらうと思つたハハハ。玉傳さんマア雑談はあいて。彼事は何様しておくれだ。傳ヲツトよし〜。そりやア憚ながら諸事鶉吞の傳吉だア。すつかり甘くやりやした。玉ヲヤ左様か〜そして。傳マア鳥渡此方へトお玉が袖を引て二階の上り口の二疊へゆき。こそ〜と在し次第をはなし。傳ナント贗文の計略から。その騒動をうかひ。時分はよしとまけ込で。何處までもおれが密夫をしたに違へぬ〜と。踏反た所な〜ア。まるで高麗やか海老藏の仕うちだらう既の事に。アノ美しくいお千代さんの手を引て。出る所だツたが。爺父さんが邪々をいれて。其處は外れやした。志かし繁兵衛さんは實にわたしが密夫だと思つて居るから。マア以來顔は合せ悪いわけに成やしたのサ。玉左様か〜



甘くやつた子。それじやア繁さんもお千代さんに。大概は愛想がつきた子。傳「つきた所か。既に  
 の事に鼻の先か。小鬚でもちよんぎられやうとしたのス。玉「チャ／＼左様かへ可笑かつたらう  
 ねへ。傳「馬鹿ア言ねへ。あれがその片相手だものヲをかしい所か餘殃がおそろしいやア。玉「ホ  
 ノニ左様だねへ。傳さん誠にモウ有がたうヨ。マア夫までにしておくれなら。九分通りお千代  
 さんも親家へ返されるだらう子。傳「そりやア當りめへだが。爺さんが何様いふ了簡だか忘れね  
 へトはいふものゝわたしが一番悪玉になりやア。何でもかでも邪が非でも。お千代さんを  
 貫はねへけりやアならねへト。言て寐込やさア。左様して見ねへ。爺さんがなけなしの齒をギ  
 リ／＼噛でも詮方がねへ。たどへ嘘でも實でも。此方の體を切にかけてする日にやア。女を引  
 とるか。手切の金をとるか。どツちか。こツちかまねへじやアおかねへのヨ。玉ム、それは  
 左様だは。斯言ちやア可笑が先はおまへ。大めへの身上だらう。僅なことを兎や角といふと。  
 名が出るから。其處へ附こんでこねりやア。どうでもなるだらうはねへ其時にやア。また私も  
 繁さんの方へ。太鼓のたゝきやうがあるから何でもおまへが損のいく様にはしないヨ。傳「マア  
 そりやア後日の狂言ヨ。なんとお玉さんはまでにした。勞資に。チツト貸てくんない恩にかけ  
 るンぢやアねへが。外のものに出来たら懸だ。おめへも其處を汲わけて。くれねへじやア可笑  
 くねへ。玉「お安イこツたが子。今日は生憎文なしたア子。私にまた彼處の宅へ。乗込やうにで

もなつてお見そりやアおまへまつかりと温たまらせるぜ。傳「コウお玉さん。それじやアおめへ  
 約束がちがふだらうぜ。彼處の宅へ乗込なア。何時の事たかまだ當はねへ。それまで便々ど侍  
 て居られるものか。馬鹿アいはねへで今鳥渡。間に合してくんねへナ。玉「チャおまへもマア無  
 理な人だ子。無いものを詮方がないはね。傳「そんなら何ぞ質草でも貸ねへナ。玉「アレおまへも  
 まつこい。何も私が禮をしまいといふのじやアあるまいし。まアモウちつとおまちナ。傳「フン  
 をかしくもねへ。他にさんぞ骨を折せて。三步や一兩のはした金に。糸目を付る位なら。ナニ  
 借ずと宜ごせへす。其かはり今ツから。八百半が所へ往て。今日の仕打はみンなお玉にたのま  
 れた狂言だ。あれへざれへ言てしまはア。ばか／＼しいト立あがるをお玉は周章で引とめ  
 玉「エ、わからねへ傳さんだノウ。誰もやらないとは言ないヨ。傳「ナニ入やせん。わつちも男  
 だ入ねへト。言出しちやア入やせんト振断つて駈出さんと。するをお玉が引とむる。折から表  
 に人の音ぐわら／＼ト明く格子戸の。音に恟り傳吉が。ちらりと見れば其姿。繁兵衛ならんと  
 思ふにぞ。物をもいはずうら口より。足をはやめて立かへる。



盛衰 榮枯 娘太平記操之早引二編卷之下終

娘太平記操之早引二編卷之下終

娘太平記第二輯叙

天壽貳す。身を脩てもて時を俟は。命を立る所以なり。と孟子の格言は  
さる事ながら。聰明叡智に生れても。短命なれば本意を得遂す。こゝに  
筑波仙橘子。は文筆の道に賢くて。弱冠より文字を能せり。されば其譽  
四方に聞えて。書賈千里の遠を厭ず。競て書を乞上梓にす。また其暇あ  
る時は。戲墨を好で和漢の故事。或は今様の振を取合して。兒戲の册子  
を綴るものから。人もて是を珍奇となし。良其名も香しく。或時は一文  
舍自樂といひ。或は司馬山人。曲山人等の數號を標して。人情世態の浮  
世册子は。自ら畫てその調法。大かたならざる畸人なりしが。嗚呼惜い  
哉不幸にして。早く黄泉の客となる。然るに此草子も初輯より。第二  
輯の半に至るに。思きや遺稿とならんとは。されば書肆その執心を感じ。



上梓せんことを思へども。いまだ全部にいたらねば。余に其事を委ねたり。固來予もまた知己なれば。その儘に閣んは本意なく。故人の趣向はいざ知らねど。斯もあらう歎との中撓に。書嗣たりしが僥倖に。御評判よきは自他の徼幸。艸葉の蔭の歡びとは。おもひやられて有難く。這回はますく、精を入れ。既に發市の時に至りて。何ぞ序文と書肆が需めに。その來歴を書つけて。御鼻負さまへ告るになむ。

己亥の盛夏

松亭主人題

盛衰 娘太平記操之早引第三編卷之上

第十一回

憎うては鼓かぬ杖ぞ雪の竹。とは古人の秀吟にして。實に人情をたどて。よく云協へたり。雪降に竹へつもりて。其竹の折んとするにぞ。杖もて竹をうち。積れる雪をはらひて。竹の無事ならんことを欲すとなり。人の親のこゝろこれにおなじ。子の悪きを見て是を打懲すは。一點程も子の悪きにはあらず。その悪を改め善に移して。その子の一生を安穩に送らせ。人にも賞させ。且また親も安堵せんとの心にして。これ慈悲の廣大なる所なれば。人の子たる者は。その親の慈悲を疎におもはず。もし打懲さるゝことありとも。親を怨まずして身の行ひを顧みて。悪きを改め善に進むべきに。然はなくしてその親を怨み怒り。却てやけになりて。益放蕩をなし。果には親を捐て他へ行其身の氣隨をなして。親の苦勞をも顧みぬものあり。是等の類ひは面こそ人なれ。心は獸に等しと云んか。江湖上の稚女童男。よくこの理を鑒みて。人倫の道に背き給ふな。再説八百屋の半六は。お千代を連れて奥へ入り。珠數を傍にさし置て。火鉢の傍にどつかと座して。はらりと落す涙を拭半六「サテお千代。今改めて言でもないが。其方を嫁



に貰つてからは夫婦の中も睦やうすで。繁兵衛もどり締り。商ひに精出すゆへ。私も大きに安堵して。店の事には少しも構はず。念佛講に實が入て。たゞ後生一三昧。人にも樂な身の上やと。羨まれたも昨日今日。サア何様いふ因果だやら。このころ繁兵衛めが不身持千万。私が云のは造作もないが。それでは迷惑おもうかど。子の心をも遠慮して。其方に折言合め。異見させれば嫉妬と。こゝろえるかして一向きかず。猶つづのる放蕩は。この親父が眼にもあまれど。サテ其處が親馬鹿で。まさか彼式のこと勘當もされず。といふて捨て置れまいかと。平氣な顔はして居ても。心の内では起舎。種々思案をまて居る處へ。其方が不義とやら姪奔とやらを。仕たと云ての今日の騒きは頓から聞て居たけれど。他の事とも違ふ譯。滅多に口出しも出来ない。蔭に居て容子を聞は。アノ髮結の傳吉めが。何んで手柄でも仕たやうに開きなほつて密夫に。違ひないと手前から。名乗は倅を馬鹿にするのか。然もなければ是にはてつきり。仔細があらふと聞て居るうち。倅は益腹を立て。其方を傳吉に遣らうといふ。切羽詰つた容子を聞かね。仲へ這入て引分けたは。役には立ずと親の威光。サア是までには仕たもの。どふも其方の腹がまねぬ。日頃からの立舉動なかく其様な淫亂なことを。仕やうとは思はねへが。其處がどうも思案の外で。重も輕も彼道ばかりは。おもはず心の狂ふもの。万一また傳吉と。文章の取遣でもした事が。有て見れば濟ねへわけ。とはいふものゝ倅めが。種々不埒を

仕居によつて。終に大人しい某方まで。心があぢになるは道理。シタガお千代。其處が女の悲しきで。良人が斯いふ不埒をするから。私も箇様仕ますと。言て見れば世上は暗。恐れながら將軍さまから定めおかれる掟が濟ぬ。女は女の道があつて。氣儘にならぬは浮世のならひ。其處を能く辨まへて。憂難をもよく堪へ。踏はづさぬを貞女といふぞへ。ア、左様いふたら見の最負をする。爺父だと思ふか知らぬが。私は左様した者ではない。其方も日頃知つて通り。金は金。石は石。たゞへ私子でも他人でも。善悪はよう知つて居るト行届たる言葉の端。お千代は更に覺へなき。無實の罪といへばえに。どふいふ譯か傳吉が。密夫仕たに違ひない。連て行くと馴々しき言葉の綾も合點ゆかず。夫ゆへにこそ物堅き。泰山にまでも疑がはれ。たゞへ知らずと言解とも。我口ばかりでこの證を。立るよしなき身の因果。いかゞはせんと女氣に。胸も張裂氣も亂れ。たゞ平伏して聲高く。泣より外に詮方も。渚に漂よふ捨小舟。風にもまるゝ如くなり。良あつて氣を沈め。涙を拭て起あがり。泰山の傍へ膝すりよせてらゝだんくのお詞は。逸々能く聞解しました。貴君のお疑ひ遊ばすのは。些も御無理はございませんが。なんぼ私が不束でも。それはよく辨まへて居ます。たゞへば五人七人の。妾をお使ひなさらうとも。または唄女や圍女。餘所の娘御と懇を。なさりませうとも悋氣嫉妬は女のたしなみ。まかし夫ゆへ身上の。破滅にでもなります譯なら。意見いたすは格別の事。畢竟申さは私



の。お守の仕やうが届かないから。他所へ出てお氣ばらしを。なさるであらうと。それを苦勞にいたすくらゐ。なか／＼怨みに思ひますの。腹を立のど申事は。一點ほどもござりませす。また傳吉と情合がある。證據の文と若旦那が讀でお聞せなすつたのは。夢にも知らぬ無理難題。どういふ事か解りませんと。申た處がアノ傳吉が。何の事やら其處へ來て。密夫を志たに違ひない。申て見ればなほのと。若旦那のお腹立。御尤も御無理とも。いふに言はれぬ私。胸のうちを篤りと。汲わけて下さいましといふも涙の露しぐれ。鼻つまらせて聲うるむ。半六は點頭て。半なる程左様で有うとは。思つたけれど。傳吉が。彼様言て見れば。横合から。左様ではあるまいと口も出されず。虚か實を眞直に。糺さうといへばあの時に。私も一容に腹を立て。不義姦奔をした奴等。繁兵衛は赦すとも。この爺父が合點ならぬ。兩個どもに繩をかけ。知縣所へ曳出さうと。言たら怖れて虚だといふか。夫でもまた強説を言通せば。是非に及ばず其方と兩個に繩をかけて。曳出さねば云出した甲斐もなし。左様しては其方も不便。また外聞もよくない。マア何かなしに引分たは。自己が方にも些ばかり。了簡のある事だ。夫ならいよ／＼其方の身に。些も覺へはない事だ。ちよ／＼それはモウ今日の。天道さまをかけてございませんが。アノ傳吉が私に。何ぞ意趣でもありますのか。影も形もない嘘を吐て。困らせるのが誠にモウ。悔しくつてなりませんと云掛て。齒を切り。またもやわつと平伏ば。半コレサ

お千代。其様に泣まい。その身さへ清淨なら。證の立時節はあるわい。然ながら不義姦奔と。名の立た嫁を宅へも置れまい。筋道の付あいだ。姑おは云は半六が妹にて長谷の觀音の地内に寮の所に居るがよい。不肖ながら此爺父が。萬事香込で居るからは。其方の悪いやうにもせず。悴の恥にもならぬように。納め方は幾許もある。サア早く顔でも直して。なくつてならぬ立廻りの。手元の物をとり捕へ。マア／＼暫く往て居るが宜。姑はまた知つての通り。自己と違つて女ながら。酔も甘いも承知して居る通りもの。悪くする事ではないから。些も心配なしに。隙な時には奥山か裏田圃か。墨水か。慰み所は不殘近し。却て保養に成でもあらう。ドリヤ芋松に言付て。篋屋でも恃まうと立ゆく泰山の後影。見をくるお千代が拭ひあへぬ。涙を押へてふし拜み。良人が邪慳にひきかへて。情もふかき泰山のお詞。些もはやう解が立。もとの通りに納まらば。死んで未來の其先の。先の世までもわすれぬ御恩と。口には言はぬと心にて。念ずるもまた殊勝なり

かくて篋屋も來りければ。お千代は手道具をとり集め。泣々泰山に暇を乞。何かのこを細々と。恃置て立出ツ。利益も大慈の圓通菩薩が。場と聞さへ恃母しき。地内の姑が方にゆき。まばしは忍ぶ世の中の。憂もつらきも時節ぞと。發明てもなほ形なき。身の成果を啣なるべし



骸骨のうへを粧ふて花見かな。とは皆人の知る鬼貫が。悟の道の一句はあれど。それを悟らぬが浮世の樂しみ。悟つて見れば東西もなし。繁兵衛は先刻より。お玉と兩個對坐。遣たり取り合の押へど。何の風情もなき酒宴に。いたく酔しか傍にある。湯飲をどつて。繁「コウお玉一杯酌でくんな。玉「エそれでお上りかへ。およしなはいナねへ。お前様はマア何様か被成ださうで。終になく澤山お上りだヨ。また跡で苦しいから。モウ宜におしなはいナ。繁「ナニサ宜から酌でくんなヨトお玉の前へ湯飲茶碗を突つけければ。お玉はグイと引たくり。玉「猪口におしなはいヨばかりしい。此様な物で飲と悪度はねへ。エ、繁さん。お前様何ぞ私が氣にいらぬ事でも仕たのかへ。半「ハ、ハ、ハ、なぜ玉「なぜもないもんだ子。先刻から色々引縛んで物をお言で。そして例と違つて何だか何様も腹でも立てお在のやうだものヲ。何も披き直つて眞顔に言のじやアないが子。私の不足のは元來承知してお在でからに。何の事たかアおらなないが。これが悪かア悪りいど。打付て言てお呉なはいナ。それじやアお前様も私のおもふ半分でもなくつて。誠に他人がましい仕打だと思ふヨ。繁「チヤ異な事を言のふ。お前に於てたゞの五厘でも悪い事はなし。また自己も何の氣も着ねへが。そりやア終心易だて我儘も言たらう。もし氣に當つた事が有たら堪忍しねへ。へん最其様なことを言だす時分だらうト。後の一言を玉「チヤ半さん何たどへ。其様な事を言出す時分とは何の事てございますエ。繁「エ。ハテサ何でも宜はナ此方の事ヨ。玉「外

の雜戯たア違ひますから。何様も私きやア聞捨にやアなりません子。先刻からの仕打といひ。また左様お言なはるのを見ちやア。誰ぞまやくつた人でも有て。私の氣が變つたでも思つてお在のかへ。エ、左様思はれちやア埋らないねへ。嘘なら慈母にでも誰にでも聞て御覽なはい。お前様の來ない節にやア何だか鬱塞として物毎が手に着なくつて。折節慈母にエ、此兒は何を漂蕩して居るヨ。氣拔でも仕たのかど。叱られる事は毎事あるは子。その位に思つて居るものを。お前様もマア餘まりじやアないか子。大かたお千代さんに叱言をいはれて。モウ止氣にお成だから。何かに柄をすげて。氣鹿なるやうな事をお言だらうが。私きも思ひ想つて斯なつたからにやア。死でも離れば仕ないから左様思つてお呉なはいト。繁兵衛が顔を見つめれば。半「また始まつたモウそのお千代々々は止にして貰へて。何ぞといふと面白くもねへ。玉「左様サまたどうせ内室さんのやうに。面白くはないのサ。繁「エ、この女ア彼様いへば斯いふと。よくつべこべと啗るなア。惣身に口が開て居るさうだ。玉「アイ私きやア悪婆だから啗りますヨ。どふせ世間志らずのお嬢さんが。花嫁に來たのとは違ふのサ。繁「チヨツ忌々ましいべらぼうだ。人の氣もまりやアがらねへでト。波々酌たる猪口の酒を。お玉が膝へ投つける。是は奈何なる故ぞといふに。於千代が事の胸にありて。未その怒り解やらす。お玉は既にそのよしを。推量すれどもそしらぬ躰にて。詞の中に刃を含み。男の心を曳んため。或は嫉妬の趣をなして。男を蕩かす



手管の魂膽。現に癖者と知られたり

第十一回

當下お玉は頬をふくらし。眼を鬧と見ひらきて。繁兵衛を白眼つけッ、玉「イヤ馬鹿くしい戯弄てお呉でない。斯見へてもこのお玉さんは。其様な権柄で行のじやアないは。悪い事が有ならば。幾許でも誤まりませア。夫婦喧嘩や口舌の餘汁を。此方へあたられちやア迷惑だ子。それほど否なら男らしく。奇麗に否だと言て御覽。何の人ヲ。不景氣なト言つ、膝の酒を拭く。折から表の戸を瓦落理と。明て入來る幫間の豆八。豆「ハ、ハ、トまづ可笑もなきに空笑をして「コリヤア御夫婦水不入のお酒宴。どころへ鳥渡豆八が。お邪魔にまかり出雲の國大社の神さまにも弾き出されてこの年月膝を抱寐の獨雄が前も有たものじやアございせんか。餘りお中が宵はまち。そして怨みて曉まで。口舌はたへぬ圍のうち。アッハ、ハ、ハ、此様な洒落もねへもんだハ、ハ、ハ、繁「豆公は例もく元氣だノ。マア一ツ飲な。玉「ホンニお前の様に氣を持て居たら。苦勞がなくツて宜らうねへ。豆「その代り今まうす通り。女には疏豆。番太郎の店先に。ごろついで居様といふのだハ、ハ、ハ、ドレ一ツ頂かうといふ折繁兵衛は衝と立て雪隠へ行。豆八は聲を低めて。豆「今日は旦那印は何様か被成たのかへ。小聲になりて。玉「チツト宅に接合がある

からサ。豆「アム左様カナ。斯と今ツから何處ぞへ曳出しは何様だらう。玉「お前勸めてお見。モウ先刻から何だか氣むづかしいは。夫だから慈母も何所へか送て仕舞たヨ。豆「ハ、ハ、ハ、左様か。モウ終に無事ト咄す所へ立歸る。繁兵衛が前へ猪口を置いて。豆「まづ御返杯。トキニ旦那。俄の替り目がどんだ能と言ますが。今ツからお供をいたしたい子。お玉さんも御同伴に子へお玉さん玉「左様サ宜らう。まかし旦那が何だか今日は浮々なさらねへで。そして何か腹を立てお出のやうだから。私きやアモウ酒を飲でも甘くないは。お前何卒旦那の氣を直させてお呉な。豆「ハ、ハ、ハ、左様か子。何様いふ仔細かまらなないが。イヤ全くお玉さんの辟だらう。どうも此旦那に限ちやア。其様に野暮に腹を立たり。また酔て管を巻なんぞといふ事は。爪の垢ほどもないお方だものヲ。夫ともまたお玉さんが。他に情體な事でも仕なすつたかアしらないが。近頃は旦那に首ツきりといふもんだから。夫もあるまいし。玉「アレサ否な豆さんだねへ。其様な事をおくびにも出してお呉でない。誠に白規定面では。豆「チツト夫だから有はままいといふのサ。また其様な筋合が有て御覽じろエマア。斯まうす私はじめ。お味方を申て。直に攻落します。其處等は決してお案事なせへますなヨ。此嬢さはお玉さんが尿だ糞だと言時分からしての馴染といふは。ノウお玉さん自己ばかりだらう。夫りやア續魂知りぬいて。幾歳の時に初花が咲て。幾歳の時に。ソレ何様したといふことまで。そりやア産の慈母よりやア精く知ツて居るから。私に逢ちやア



一言もなしさハ、ハ、繁「左様いふと豆公老年の棚御めくぜ 豆」どころが老ては倍壯なるべしと。漢の唐人が言た通り。年々歳々に若やぎます 繁「そりやア宜が幾歳の時に初花が咲て。夫から幾時のごきに其様したか。其處を聞てへチ 豆」其處はかの講釋師が「肝心の所へいくと」跡は明晩と言て。客を引やうな譯で 玉「アレ豆さん。いゝ加減にお 暗 何も私の一代記をならべ立ないでも能はず 豆「ハ、ハ、ハ、十九や廿歳で一代記もねへもんだ。四半代記位な所だハ、ハ、ハ、繁「イヤその僅か四半代記でせへ。種々な故事來歴が有といふものだからたまらねへ 玉「モウ止てお呉なはい。親もないものを寄て群て嘲弄てお呉でないヨ。私きやア氣が小さいから。其様に言れると逆上て狂亂さうになるは 繁「ハ、ハ、ハ、左様だらう。根が恍惚子といふものだから。ノウ豆公 豆「左様サ。今時の恍惚子は油斷がならぬ 玉「何ぞ自己に趣意でもあるのかノウ じれつてへ 繁「コレサ左様急腹になるもんぢやアねへはな。美婦といふものは不殘左様だ。萬事嫉みから出る譯だから詮方がねへ 玉「ハイ、御免遊ばせ。澤山おひやかしなさいまし 繁「ハ、ハ、こりやア可笑。ナニお前をひやかしたつて醬油をかけても喰れぬへ 玉「和たり捻だりしてお上りだらう 豆「イヤハヤどうもならん。折角旦那の方の御喜元が直つたかとおもふと。また奥方のはうが御不興となる。ハテ世間は儘にならぬへ。實に英雄は並び立ずで。兎角片落がるにやア困る 玉「ナニサお前はあまりでないけれど。先刻から旦那に存分いじめられたから。

是からまた旦那をいじめ返して上なくツちやア 繁「女が立ねへが 豆「へッ立ものも持ねへ癖にハ、ハ、ハ、玉「エ、モ當しい何とでもお言。どうせお前がたの口にやア協はないから。此方は無言で酒でも呑ほうが宜はトお玉は手酌で二ツ三ツ。續て香を繁兵衛は。莞爾と笑ひながら繁「コレサ些こつちへも酌が宜じやアねへかト猪口を引たくる。お玉はアレヨトその猪口を。取かへさんとするをとらせず。取らう遣らじと取付引付。居り相撲に異ならず。お玉は負じと力を入れて。おせばこなたも倒されじと。押合ふはづみにばつたりと。兩個一勢に倒るれば。透さぬ豆「八押入より。蒲團を出して引被せ 豆「サア中直りは濟だ。仲人の役御祝義は。まつかり頂かにはやアなりませんと押へつければ 玉「ア、くるしい。豆さん烏渡起してお呉ヨ。アレサ息がつまるはず 豆「そんなら是から些でも。痴話喧嘩を仕ツこなしたヨ 玉「モウ、誤た、はよウくふざけるヨ。髪をだいなしにしたはナ憎らしい 豆「ハ、ハ、ハ、夫婦喧嘩の仲人は。後で憎まれぬへ例なしサ 玉「それだつて強く押付るものチ 豆「サア息繼に一ツお遣なせへハ、ハ、玉「チャ繁さんは直に寐るのかノウ。後生樂な。エ、繁さんモシ旦那鳥渡マアお起なさいヨト揺ぶる 繁「ム、ム、マア些斯しておいて呉な 豆「夫なら左様してお置なせへ。ドレ私も歸りやせうト立あがる。斯とき慈母も歸り來り 豆「チャ、旦那がまたお醉被成たか 玉「慈母。戸を



鎖てお寐。私も寐るからト例のどほり戸締をして。母は二階へ行ければ。お玉は繁兵衛を揺起して。玉「サアほんどうにお寐ヨ。風を引はな。繁」ム、ム、引豆八は歸つたか。玉「モウ歸つたヨ。サア一ふく呑で目をお覺し。繁」些ばかり寐たかノ。ア、強宜に酔たはへ。玉「何だか知らないが急腹であわがりだからサ。私きやアまた心配を仕ながら飲だ所爲か。一向酔ない。アノ繁さんおまへ喜元が直つたかへエ。エ。繁」何の事たナ。自己が何ぞ腹でもたちやア仕めへし。玉「夫でも先刻は何だか腹を立てお在じやアないか。夫ともモウ私に飽たのかへエ。エ。お前は飽でも私の方じやア飽ないヨ。またお叱りだらうけれど。お千代さんといふ立派な内室さんの在のを。承知で惚た私だものを。其様な水性な事ちやアありませんから。お前様も左様思つてお呉なはい。繁」自己だつても何も浮薄じやアねへ。例もいふ通りサ。若於千代が罵しいこと言やア。敲き出してお前を宅へ入れやうといふ位たものヲこの時お玉は玉「口は調法とやらだねへ。何様してお前様がアノ可愛い、於千代さんを出して。私を宅へお入なはるものか。其様な氣懸はお言でない方が宜は。繁」ナンノつまらねへ何の爲に氣休めを言ものか。夫ならお玉。宅へ入れたら何様する。玉「何様も志ないけれど左様なりやア私の本望だからモウ死でも宜は。まかし其様な咄しは鼠が笑ふだらう。マア、於千代さんを大事にしてお在なはるが宜。そして退屈した時にやアこゝへも御出なさいまし。繁」お前なんぞといふと。お千代おちよといふけれど。自己其

様に恍惚ちやア居ねへせ。それに彼奴が悪いことをしたから。自己モウ縁を切て仕廻たト分解はいはねど此うへは。お玉を入れる下心にて。咄しにぐつと實が入は。お玉は心に笑を含み。まづ九分通り狂言が。甘く往たと歡べど。故意と恠りせし容子にて。玉「ナニエ於千代さんが淫奔をしたとへ。繁」左様サ。玉「何をおしたエ。繁」マアそりやアあとで知れるはな。玉「そしてモウ出してお仕廻のかへ。繁」左様サ自己直に敲き出さうと思つたけれど爺父が何か了簡があるといつて居るから。マア爺さんに任して置たのス。玉「夫じやア爺さんが仲人で納るだらう。繁」馬鹿ア言ねへナ。他の事とは違ふはな。玉「左様サねへ。女はどうも夫が有ちやア濟ませんねへ。繁」お前また自己が宅へ這入てから。他の郎に姪戯ちやアならねへせ。玉「チャ私きやア其様な浮薄ものど見へるかねへ。可愛そうに。お前様と這様なつてからは。ホンニ唄の通り雄猫でも抱た事はありませんものを。繁」附ても居ねへから何様だか知れやアしねへ。玉「附て居てせへ其様なことが出来るじやアないかホ、ホ、繁」コレサ左様ひるませねへでも宜ぢやアねへか。玉「ア左様じやアないヨ。何でもよゆく氣にお當だねへ。繁」チツト誤まり。玉「左様直に折れておくんなはりやア。實に可愛いヨ。繁」アイタ、ハ、エ、ひどい事をする女た。ドレ此方でも〇〇〇〇〇〇〇折から雲井を翔る雁のこゑ遠く聞えて深々さふけわたる



盛衰 榮枯 娘太平記操之早引三編卷之上終

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引三編卷之中

第十三回

表の潜り戸を瓦落裡と明て「お玉さん宅かト音信聲に中仕切の。障子を少し明て顔を突出し玉ヲヤ悔くらまた。誰だと思つたら傳さんだ子お上りナ傳上つても能か玉何だへをかアしな人だノウ。例無言で上りながら傳モウ是からア例と違つて。瓢蕩々々歩行やせんト言ながら上る玉なぜまた瓢蕩あるかれないのだエ傳何故と言があるもんか不殘お前のお蔭だアなぜ玉私が何様した傳ヘンお玉さん其様にとぼけて貰ふめヨ。お前に頼まれて自己が體にヤア。無も仕ねへ悪名がついて居るたらうじヤアねへか玉ム、千代さんの一件かへ傳コレサ其様な餘所とくしい事を。言て居られちヤアつまらねへせ。今朝も八百屋の瓜助に聞たが。繁さんがその事を強勢腹ア立て。昨日お千代さんをば何所へか遣て仕舞たさうだが。自己も只は置ねへと言て居るさうだ。勿論そりヤア自己も覺悟のめへだから今さら怖がる理はねへが。夫に志ちヤアお前約束の物を。早く仕てくれねへじヤア誠に困るヨ玉早く仕てあげたいが。實に此頃は子。モウ生憎だツちヤアないヨ傳ナンノ實に此頃はもねへもんだ。他に大切な事



をたのむからにやア。お前の方でも兼て覺悟してゐて呉るが宜じやアねへか。今になつて左様のめを突せられちやア。自己一個いゝ白痴だア。馬鹿くゝしい。コウお玉さん今も言通り。モウ自己アこの近所に放漂しやちア居られねへから。是非今日は捨て呉ねへ玉「そりやアお前私」が啞は吐かないから。モウ二三日お待ヨ。昨夜も繁さんが來たけれど。その一件で口へこそ出さないが。モウく氣むづかしく腹を立て居るから。中く丸印なソの事は。おくびにも出されないから困るは子。傳ム、左様か。そんならは何様しても出來ねへか子。玉「左様サ今日はむづかしい子。傳むづかしかア宜に仕やせう。夫じやア自己も身の證を立て。翌から活業でも始めやうト立にかゝる裾を引とめ。玉「またお前腹を立のかへ。その一件を繁さんの方へ。自訴やうといふのだらうが。夫ぢやアお前餘まり理らないじやアないか子。左様して見ると私もつまらず。お前だつて何も立派な雄子にも。なるまいじやアないか傳「立派にならうが成めへが。へン大きにお世話だ。コウ放して呉ねへナ。面白くもねへ玉「其様に言はずと宜ぢやアないか。夫ならず。傳さん私がこゝに些どばかりあるから。マア是を上げて置うから。跡は二三日お俟なねへ。傳「左様お前が理つて言やア。何も自己ア無理は言ねへ。左様して幾干ばかり貸て呉る玉「左様サ唯一兩ほつきやアないヨ。傳「餘まりだなア責めて二兩も貸ねへナ。玉「三兩ある位なら始めつから口を利は仕ないは。傳「何の人ヲ。お前十兩やらうといふ約束じやアねへか。玉「そり

やア私が八百屋へ乗込やうに成たらと言たんだは。傳「モウお前乗込一段に成ているじやアねへか。此位な大望をするのに。八兩や十兩じやア易いもんだ。夫に糸目を付る事はねへはなト數刻の論判を聞かぬてや。お玉が母は仲の間に。芋を紡で居りしが。隔紙をあけて出來り。傳「さんよくお出。コウお玉先刻から聞いていりやア。僅な事で彼是といふ容子だが。夫りやアお前が十分悪いヨ自己ア此間うちからの咄し合を。聞いても聞ねへ振りでいたけれど。今傳さんの言通り。八百屋へ這入る一段に成たのは。お前何と思ふかおらねへが。全く傳さんの骨折に違ひないのサ。是から先はお前が胸一ツで。繁さんとの相談もあらふといふものだが。その荒消化を仕て呉た人の事。夫にその一件で。マア言は干隔漢子にした理だから。何様にも仕てあげねへけりやアならねへ所だが。ノウ傳さん今も聞なざる通り。此嬢か不都合だと言からに。私「が何様でもして。三兩は捨へやうから。マア今日は夫で間に合してお呉ヨ。そのかはり二三日の中にやア。此嬢と約束を志なすつた通り。捨へて上させやうは子。傳「ム、よし／＼慈母のやうに言て呉りやア有がてへが。お玉さんのやうに言と。どうか自己が寐徒にても來たやうで恰好がわりいハ、ハ、ハ、母「夫ならお玉。お前其處にあると言たのを出しな。こりやア自己が死金と思つて。大事にして置ただけれど。お前の方で出來る間貸て置うト結梗袋から一朱銀で二兩把出し。都合三兩にして。母「サア傳さんよく改めてお出。傳「アイこりやアト。掌へ金をの



せ。人さし指にて其方此方。二三度つつきて。直に腹懸のかくしへざら〜と入れ傳「そんならまた二三日のうち。お頼みだぜト笑を含みて立あがり。鼻唄うたふて出て行けば。母は其跡を見送りて小聲になり。母「全躰お前が悪いはな。十兩遣うの何のど。餘まり約束が大造過らア。滅法界な玉「アレサ左様言て置いて甘く往たら。五兩もさづけて置うといふ氣だは子母へ。彼男が其様な手を食ふものか。お前はろくに知るめへが彼男は近間ちつと締て居る様子だけれど。全躰悪奴だアな。本來いつて見ると。此所等に居られる體じやアないのサ。玉「チヤ左様かへ始めて聞たヨ。夫じやアお構ものどやらか子母「左様ヨ。餘程な悪い事があつてノ。この土地を構はれて居るけれど。マア隠れて居るやうなものサ。夫でも君上のお慈悲で。活業をして居られるのは有がてへのサ。玉「ム、左様いふ身状の人か子へ。夫ならノ慈母。モウ私の方の一件も。實に彼人の言通り。九分九厘までは狂言が附て居て。最彼人が居なくつても宜いから。ソレ例も稽古に來る荒砥さんは子。名だかい荒砥さまの御家中だから。アノ人を恃んで此土地を追拂はせやうじやアないか。左様するとモウ此後彼是言て來る氣遣ひもなし。樂々とするは。全躰私と思ふにやア。悪い人を恃んだッけ。首尾よく八百屋へ乗込だ所が。何ぞの搔曲にやア貸せ〜でうるさからう。困つた事をしたつけど實は後悔して居る處だから。左様なると颯晴するから宜じやアないか。母「ム、そりやアお前よく氣が付た。夫なら大かた晩にやア荒砥さん

が來るだらうからお前其處を宜様に噺しなせへ。自己がまた側から太鼓を敲くヨト母子密々談らふほどにはや日は闕て晡時に油屋でございお油よろしう

さて夜に入れば。毎夜のごとく動也〜と入來る男の弟子。互に表徳をよび合あれば八や權やの突合は三尺帯に手拭を。腰にはさむが都ての風俗胴慢聲あれば鐵切聲あり。晚鐘にもあはぬ高調子。鉦にもあはぬ鈍聲は三年三月苦んでも上りめ見へぬを自惚に。大分節がよく成たと言れて乗が砧巻師匠は甘き安留米糖は執心がひと酒肴。最初は手輕に五の字の。醉がまはれば跡を引二升三升三絃の曲彈そも〜稽古所の制禁には騒ぎ文句や潮來節。その他時の流行唄を弾べからざるの誑はあれど當時其様な古風は通らず師匠の方から弟子中の。機嫌をどらねばならぬといふも扱むづかしき世間ならずやかくてお玉はかの荒砥何某といへる人に對髮結傳吉が素狀は。元如此々々のものなれど。今此土地に徘徊するは君上を恐れぬ所爲なりとさま〜あしく云做しければ荒砥は聞て主人青砥左衛門は世に聰明の賢人といはるゝ處に。髮結傳吉その罪有ながらこの土地に隠れ居るは官人の威光薄きに似たり。早々小吏に云付て。傳吉を捕へさせ。その罪を糺すべしと云ひければお玉母子は心中に悦べど故意と涙もろき躰にめてなし反者にもせよ日頃から。心易き彼傳吉嚴しき罪に成ぬやうお執成下されど口と心は表裏のその隱悪を競ぶれば傳吉にも猶益なるべ



けれど人の盛なる時は神佛もまた咎めなきにや。不義の富貴を究めけり。却説髮結の傳吉は。お玉が方より三兩の金を把て大に悦び。心あひたる友達を集め。飽まで酒をうち喰ひ。あるひは賭博に夜を明して。心のまゝに舉動ほどに。かの金もはや残少く。尤二三日の其うちには。また跡金をも受把べき。心巧みに聊患へず。兎角して二日三日過す所に。親しき友なる甲乙が。二三人口をそろへて。元來貴さまは此土地を構はれて。居る身分なるを。隠れて住居するよしを。青砥さまの聞つけて。今度嚴しき命を下され。貴様を捕へて問注所へ。曳來れとの事により。横目は手柄を顯はさんどて。昨夜よりして貴さまの在家を。此處彼處と尋ぬるなり。若し放蕩として居らば。忽地縲綫に及ぶべし。些とも早く身を隠せと。眉毛に焰のつきしといふ。喩のごとく周章で告れば。傳吉聞て驚き騒ぎ。聊の罪にて所を拂はれ。隠れて其處に住居するものも。我のみに限らぬを。何とて左様に嚴しきぞ。然はあれ早く身を隠さずば。災また近きにありと。思ふものから把持べき。調度衣類もあらざれば。其まゝ其處を走り出で。まづ何方へか往べきと。思案すれども當はなし。また知己の方へゆきてきけば。嚴しき詮議にて。人相恰好までを記し。尋ねらるゝよしをいふにぞ。傳吉ますく驚き周章。何處へ行とも此形容では。道の程さへ氣づかはしと。剃刀とつてくるくと。天窓を丸く剃丸め。硝子鏡に影を移して。ア、こ

れにては氣遣ひなし。通りもの傳さんも。忽地殊勝の坊さんとは。思ひがけない新道心。衣の奉加はお玉が殘金。それさへ一把に往れぬ身のうへ。まゝよ田舎はまた住吉と。小唄うたふて夜にまぎれ。何方ともなく行にけり

第十四回

雪は鷺毛に似て飛で散亂し。人は鶴装を着て立て徘徊すと。白居易が詩も。思ひ出られて興はあれど。猛風膚へを裂て。寒さに堪ねば巨燿に這入。壁に懸たる三絃とりて。音も幽なる爪弾に。ひとり心を慰むるは。また閑情の深くも有べし斯る所へ表より。お玉さん眞猫だ子ト言れてお玉は三絃を止め。玉「チャお松さんかへお這入なまつ」邪魔にやアならないかへ。玉「イ、エ些もお差なしだヨまつ」そんなら這入らふサアお前へお這入ヨト連の男にいふ。男「マア這入子へ。松「ム、だいぶ御遠慮だ子夫なら先へ這入らふと言ながら障子を明て這入。松「チャたつた一個かへ。玉「ア、一個で淋しくツてならなかつたはよくお在だねへ雪は澤山と降かへ。松「ア、其様でもないは。チャ何様したらうト後を向く。玉「誰ぞ來たのかへ。松「ア、私の墮落をつれて來たヨホ、玉「チャ磯さんかへ珍らしい子へト表の方を向き大きな聲で。玉「磯さん何だ子早くお上りナト言ども回答なしお松は駈出て。松「チャ何處か往たヨ。玉「何様したんだのを歸りやア



仕ないか 松「ナニ歸る事ぢやアないヨ大かた尿でもして居るだらう 玉「夫でも磯さんは誠に實がある子へ私が知つてもモウ丁度三年ばかりになる子へ 松「ア、出いり四年といふものアノ人の世話になるが子此頃は彼人も些左り前だからいけないは 玉「左様かへ夫でも根が丈夫だから動ひきはなからう 松「ナニ左様でもないのさ番頭が誠に凶見で子彼人が他へ出て十兩遣ふと。店でまた十兩無なるといふ譯だから溜らないは子 玉「お前また宅へ這入て何かの取始末を祓成なら宜丁度磯さんも内室さんはなし 松「左様いく位なら言分はないが。まさか左様も出来ないから 玉「ナニお前磯さんせへその氣なら譯はないじやアないか 松「親類や何かで種々むづかしくいふさうだから困るは子。夫でモウく此頃はじれつたくつてならないから磯さんが來ると。ツイ悪いと知りつゝ無理を言たり。無性にじれたりするもんだからチヤお前は何様かしたさうだ。其様なに愚痴な女じやアなかつたがと。不測がつて居るから宜じやアないか 玉「左様かへそりやアお前が悪いヨ。彼様善人をいじめちやア冥利が悪いはトいふ所へ表をあげて入來るは今の噂の磯次郎ずつと通つて 磯「お玉さん誠に御ぶさた 玉「きついお見限りだ子へ夫でも例も御盛でおめでとう 松「お前何處へお出だ 磯「ナニちよつと其處まで 松「其處までもないもんだ。先刻からお玉さんと兩個でどんなに案じて居たらうイケ好ね 磯「マアお玉さん聞て呉ねへ此頃はなにかおもしろしれへ事でも出來たのかア知らねへが番逸アノ通り私を籠て斗り居るヨ 玉「ナ

ニサ此嬢の方にやア。何もなければ。おほかたお前様の方に何か出來たからの事でありませうホ、ハ、磯「大不首尾だ 松「ソレ御覽。女は女の最負ほかア仕ないは。子へお玉さん 玉「ナアニ最負といふ解じやアないが。どうも私か考へて見るに。男ほど浮薄なものはないと思ふは 松「ア、そりやア左様だは。其うちにも磯さんは子。浮薄の問屋だヨ。なぜとて御覽。先頃も子私の所へ來る。髮結さんの梳人を口説たツサ。夫が何様な嬢だかと思ふと。漸々十五才ばかりになる。阿婆多ッ面の女兒をサホ、ハ、斯見へても何様に梵論買だらう 磯「コレサ其様に悪く言ねへもんだアな。是でも死ぬ死なふといふ者も。一個や半分は有のサ 松「ラムそりやアおたのしみだ子。其様な馬鹿ものは今の代世界にやアあるまいと思ふが子へ 磯「所が浮世は廣いの 玉「チャくお前方ア私の所へこの雪の降のに。夫婦喧嘩をしてお在か。おほきに御苦勞だツけ子へ 磯「ハ、ハ、ちげへねへ。エお玉さん此様な奴を噂にでもしたら。何様に罵しからう。私が一言いふと。五言六言七言八言。九言十言で返すから困りものヨ 松「へん私よりやアおまへの其口が罵しいは子へトいふ所へ表をあげて「ハイお誂トいひながら岡持の中より。羨肴と鴨堀を出し。一升酒瓶を置いて行 玉「チャ彼人。そりやア間違ひじやアないか 磯「ツットよし今私が誂らへて來たんだ 玉「チャ左様かへお止なら能に 松「私の宅の人も此處等は随分氣が利て居る子ドレ夫ならお燭をかけやう。お玉さん燭誂子は何處だへ 玉「アレそりやア私



が出すヨト是より三人火鉢の側にまどゐて。まばらく酒宴あり。種々の雑談に時を移ど知るべし。磯「ときにお玉さん。お前もいよ〜」繁さんの方へお興入と極つたさうだ。玉「イ、エ誰にお聞だ。磯「へんそりやア蛇の道は蛇だアな。松「眞實かへ。早く左様なると宜子へ玉「何様して〜」其様な事はないヨ。磯「夫でもお前其つもりで。半さんもお千代さんと別れたといふ。咄しだものヲ玉「ア、そりやア子お千代さんが何だか淫奔があつたさうだからサ。磯「ム、左様かノマア夫にしても。先の女房が居なくなりやア。仔細なしたアな。松「早く極ておまひナお前の氣にも似合ない。何を便くとして居るんだへ。玉「私きも早くまたいけれど。お爺さんもあるし。十分で繁さんの自由にもならない譯だからぞれつたいは。磯「ナンノ彼様な老爺さんが何と云たッて構ふ事はねへ。早く乗込なせへナ。松「磯さんお前他の事たと思つて。左様お言だが。夫ならお前もまた親類で何と言ふが番頭が不承知だらうが。構はないで私を入れる事が出来さうなもんだ子へ。磯「イヤサ左様揚足を執ちやアいかねへ自己と繁さんとは違ふハナ。自己は知つてる通り養子の身分だから左様は往ねへはサ。玉「ほんに半さんなッぞアお爺さんは眞實なり脇から見るとどうでも成さうなものだと思ふけれど復左様も往ないさうで子。何だか不定〜して居るは。磯「私が今回逢たら左様云はふ。お千代さんが淫奔をして出た解なら猶のこと。お前を早く入れてコレ見ると言ねへじやア可笑くねへ。玉「夫でもまだお千代さんに執念ても居るのだ

らうと思ふヨ。松「なに左様でもあるまいじやアないか。玉「ナニ倍とそれに違ひないヨ。全躰繁さんはお千代さんに惚きつて居たんだものヲ。磯「ハ、兎角女といふやア何様に通女のやうでも。愚痴を言やつさノ。玉「ナニ愚痴でも嫉妬でもないが夫に違ひねいヨト隔心なき友達のはなしは互に遠慮なく。また蓋の重なれば。自からなる高調子。折から潜戸瓦落理とあけて。すつと這入る八百屋繁兵衛「何もかも聞たきたい。イヤ磯さんお久しう。お松さんお揃で何様でございます。玉「イヤお前様マア胸らおさせだヨ出し扱に來てサ。繁「左様だらう〜。自己が居ねへと思つて。べらぼうに悪く言たノヲ不殘表で聞やしたト言ながらお玉の側に居る。磯「眞實にモシ一別以來だ子持合せを一ツ。繁「いたいきませう。今日の雪に珍らしいマア何様してお出なすつた。松「歩行て参つたのサ。繁「ホイこれは御挨拶どうも近頃婦人の口が悪く成たには怖れる子へ磯さん。磯「左様サ口も悪いが人も悪い子。外面如菩薩で。各々に美麗艶しい顔はして居るが。松「エお玉さん方人が出來たと思つて。徐々悪くいひ出すから宜じやアないかホ、磯「知れた事サ。これから漢士が二個になつたから。モウ言會ても負ねへせ。今まぢやア兩個して。私一人を何様にいぢめたらう。玉「餘ま〜いぢめられて居る風でもあるまい子へホ、繁「磯さんいぢめたかいぢめねへか知らねへが。自己が事をば強勢悪く言たせ。玉「イヤ。啞ばつかり。お前様も餘程な邪推ものだヨ子へ。お松さん私が半さんの事を悪く言はしない子へ。松「ア



、悪くいふ處か今まで何様に恍惚て居たらう。繁「ハ、合せ鏡のほどのよさもずんと昔の流行唄だ。松「アレおかアしな繁さんだ。お前様大造愚痴にお成なすつた子。左様は成たかないもの。だ子へ。磯「ちよいと私が中を把て言ますが。モシ繁さん。早く此嬢、お玉の宅へ入ちやア何様でござハやせう。私も此回は、おまつをいよゝゝ入る積りサ。松「フン正月の四ツ五ツある時かへ。磯「アレあの通りだ。斯良人を尻にまかれちやア協はねへ。松「各々尻が大きいから得手敷れ勝手さハ、ハ、松「憎らしい口だ子へト烟管で打真似をする。繁「コリヤ鹿相誤まつた。玉「モウ宜加減におふざけ見ツともない。繁「イヤ何様も其處等中から。尻が出るにやア怖れる。玉「マアお前様磯さんが折角信切に言てお呉なはる挨拶でもおしな。紛らかさうとしても左様は往かないヨ。繁「ナニ紛かすものか左様言てお呉なはるのは實に信切で有がてへ。マア磯さんその一件も子九分通りは整ひやした。磯「そりやア宜そして跡の一分は何處で引かゝつて居る子。繁「他じやアねへがお聞も被成たらうがお千代の譯合を老爺は啞だらうと思ひ詰て居るから。何でもこの辨黑白をするにやア。傳吉を揚て敲なくツちやア分らねへと。青砥さまの官人へ内々持んださうサ。然る所傳吉は。此ころ風を食つて烟となつたのサ。風をくらつて烟さ成さは悪事をせしもの捕へられ、其處で老爺も些當惑の容子だから。私が言にやア夫御覽じろ。傳吉の身に過りのないものが廻る筈がない。モウ、夫で一も二も入らない譯だから。お千代をば此去狀をつけて田舎へ返してお

呉なせへと。三行半を書て老爺にわたしたから。モウ此方は此方の勝手次第。いうれ近イうちにお玉を入ると極て仕思ふ積りサ。磯「ム、なるほど夫じやア老爺さんの念も晴た理屈だ。松「お玉さんマアおめでたうお前なんざア誠に羨しい子へ。思ひ通りに成て。玉「お前も早く左様おしな子へ。松「私の方は左様手輕くは往かない譯だものチ。磯「夫なら子繁さん。私が翌往て老爺を説付やう善は急げだ。風の替らねへうちがいト思ひよらざる磯次郎が。乘氣になつて勧めける。御意はよしの、櫻もち。甘き詞に繁兵衛も。お玉も俱に膝すり寄て持めば磯次郎は承知して。夫より半六に逢ひ。お千代が不義せしよし。其面當にもたる事なれば。お玉を早く後妻に迎へあかるべしと。詞を盡して進めければ。半六今は詮方なく。兎も角も繁兵衛が。心に任せ。萬事はよろしく恃むとの事。然ながらお玉は姓素性も。定かならぬ女の事なれば。直に後配とも披露志がたし。先々客分同やうに引取おき。そのうへにて世間への弘めは何様でも成事といふにより。磯次郎はそのよしを。心得て繁兵衛にも逐一咄し合。またお玉母子にもよきやうに談合して。吉日をえらみ。お玉は半兵衛がかたへ引移り。母は元の所に居て。ひとり住の樂なくらし。万端繁兵衛が仕送りにて。何不足なき隠居となりければ。羨むものさへ多かりけり。

盛衰 娘太平記操之早引三編卷之中 終



盛衰 娘太平記操之早引三編卷之下

第十五回

山田守るそぼつのみこそ哀しけれ。秋はてねばや稀にとふひとさへぞなき小舎のうちち千代はこゝに預けられ姑とは名のみ血脈にはあらぬ舅の妹なれば朝な夕なあさゆふの氣配きあひひ平生つねに瘡かさの塞ふさがりて三回の箸はとりながら食さへ細るせつなさに顔の色さへ例ならず鬱うつら／＼と送る日は算へ盡ねど舅の方より今に於て善惡の音信なきは何事ぞ此身の證明の立ざるにやもし遮莫さもあらばいかにしてか身の潔白を他に知らせんおもへばかなしき身の上と先の先まで兎やかくと案じ過すも無理ならぬ女こゝろの不便なる

そも／＼此家の姑といへるは八百屋半六が妹にて名をば沖瀨と呼做しつ米問屋の作兵衛といへるものゝ方へ嫁入しけるが沖瀨が三十四五のころ作兵衛は世をさりけるに子といふものゝあらざれば養子して跡を立んと半六など俱々相談しけるに作兵衛が親類にて藤八といへるものは心よからぬ男にて作兵衛が世をさりしを僥倖米問屋を我ものにせんと此相談に邪魔を入れ沖瀨もいまだ年若なれば他方へ嫁入らせ作兵衛が跡式はわが子藤太郎に繼せん

と言けるに沖瀨は是を請引うけひかず勿論跡を續事は血脈もあれば兎も角も夫に違背はあらねども再び縁につく事は思ひもよらずと云放すに藤八が心には沖瀨がこゝの家いへにありては万事につけて邪魔になれば彼是と言くろめ此長谷寺の地内へ移らせ下女と下男は附おけども切詰たる宛行にて万事不自由勝なれど沖瀨は本店に居るよりも是が結句氣樂なりと寐起を氣隨にするばかりを世の樂しみと日を送るにそれ天道は盈るを虧善に福ひし惡に禍はひすこのことばにもれず藤八が強欲にて押領したる米屋の跡續藤太郎は假初の病に伏て次第に重り終に此世を退けるが其他に藤八も見といふものゝあらざれば養子せんと思ふにつけ。折角わが手に入たりし。米問屋の株式を。只手放すは残念なりと。表向こそ養子と披露し。内證にては大分の金を把て。米問屋の仲間なる。次郎八に譲りしかば。次郎八は。おのが養子の磯次郎といふにその株を繼がせ。また藤八は得意さき。その他事に馴たれば。志ばらく後見を恃むとて。店の支配を任せけるにぞ藤八は歡つゝ。表は實義の躰に見せて。只身勝手を働きつゝ。隱居沖瀨への宛行も。年々に減少すれば。沖瀨は大に腹を立て。養子磯次郎を呼つけて。理解を言事度々なれど。万事は藤八が計らひなればと。彼に假託此程は。久しく隱居の安否を訊ず。いとも疎遠に送れども。かの繁兵衛とは合口にて交りも深きゆゑ。八百屋の方へは音信で。扱こそ今度も磯次郎が。お玉の事を彼是と。半六へも言しな



讀みうり商人のこゝろ「安倍の晴明ひとり占ひ。當時常用身の上の吉凶。願ひごと望ごと。夢はんじ夢の見  
 徳走り人まぢ人。失物は即座に去れる。算木をつけて十六文十高聲出して呼歩行を。聞つけて  
 小舎より。お千代は徐々と立ちいで。下女のお兼をよびちよ「アノお兼どんや。今賣に來たも  
 のを一ツ買ておくれなれ」へい「またお前さん種々お氣をお揉あそばして。困つたものでご  
 ざいますチへ。彼様なものが何の宛になりませうのか。お止めそばは宜ございますチよ」マア  
 中らなくツても能から。アレモウ遠くへ往たじやアないかかれ「そんならマアお心往せにめして  
 占つて御覽じましト駈出して。かの占ひの本と算木を買て來り。行燈の前へ廣げてかれ「サア御  
 覽あそばせちよ」そしてこりやア何様するンだチへかれ「アノ子斯でございますヨ。マアこの算木  
 とやらをよく頂て。願ひ事なら願事。何でも各々の思ふ事を念じて。本の上へ投ますのサ左様  
 してこの書へ合せて。其處に書てある字を讀で見ますと。叶ふか叶はないが知れると申すが。  
 ナニ左様甘くあたりはいたしません。夫だから中るも八卦。あたらぬも八卦と申すじやアござ  
 いませんかホ、。ちよ「夫では宛にやアならないかチかれ」何様してお前さん。これがあてにな  
 りませう。それだから私は此様なことは大きらひでございますのサ。宜と思ふ事でも。万一わ  
 るいと出ますと。氣にかゝりますものチよ」ホンニ左様だチへ。それじやア私もよしに志やう

か。万一悪く出ると否だからかれ「お止あそばせヨ。矢張お氣のもめる種でございますはホ、。  
 ちよ「おかねやお前は例も宜元氣でまことにうらやましいヨ。何様したら左様いふ氣になられる  
 だらうチへまたわたしの様に。先のさきまで考へて苦勞にするのは。眞にそんな症がと思ふけ  
 れど。何様も性質だから仕かたがないはれ私くしやアまた今まで。苦勞といふは何様なもの  
 だかぞんじませんは。是も大かた馬鹿の中でございませうホ、。志かしお前さんのやうな  
 目に逢ましたら。さぞ苦勞でございませうけれども。ナニまたお前様が私しなら。其様な非義  
 非道をいふ良人なら。先よりか此方からおさらばくで。また程の宜實のある情の深い人を良  
 人にいたしますは。たとへ悪名をつけられましたッて。此方の身さへ清ければ何にもこわい事  
 も畏しい事もございません。私しやア其様な無理難題を言たり。人の讒に乗てさわぐ様な人は。  
 たどへ男振が業平のやうで。金の中に埋つて居るやうな人でも。モウ大嫌ひ。チ、否な事かな  
 ト身をぶるくどふるはせて。お千代が顔をぞつと見るも。彼や是やの咄を聞て。所詮くづれ  
 ど思ふから。お千代がこゝろを勵まして。在所へ歸り相應の。所へ再び縁付ば。双方ともによ  
 からんと。おもふこと葉の端々は。お千代もそれと推量し。實にもつともなる詞とは。おもへ  
 ど左様はあきらめる。事さへならぬ濃厚。女兒育の身のうへには。これにこしたる大難の。ま  
 たあるべしと思はれず。胸に迫りて人目さへ。はぢぬ涙をせきかねて。はらりと落る膝の上。



手ばやくぬぐひて莞爾と。笑ふ眼もとに露ふくむは。いかにせつなきこゝろ根を。想像さへあはれなりちよ「ホンニお前のいふ通り。それに些どもちがひはないけれど。私しも今は両親もなし。唯一人の兄さんも。一昨年の秋辭世て。今は從弟の黍太郎といふのが跡を續て居るけれど。誠に心意氣の善ない人で。私は宅に居る時分から。中のわるい從弟だから。たゞほんの親家といふ名ばかりで。一年に二度か三度。手簡の遣取でもするぶんの事。遠くしく成ては居るし。此方が這いふ分解になつて見ると。いづれ始終は親家へ歸る様になるか。夫も一通りの事なら詮かたもないけれど。ヤレ密夫をしたの淫奔をしたのと。悪名がついて見ると。たとへ舌を嚙で死ねばと言て。阿容々々と歸られる義理でもないと思へば。實にわたしは無宿同前で繁さんはんの所を退出されて見ると。往所のない身分サ。其様な事をも委しく知つて居ながら。よくよく糺しも仕ないで。繁さんが腹を立て。今出て往どおひのは。餘まり邪慳かと思ふけれど。またよく考へて見ると傳吉の容子といひ。何様も私の邪推かはあらないが。なんでもお玉の細工にちがひなからうとおもふのサ。それだけだと夫を云たつて見ると。また嫉妬だのヤレ悪名を消さうと思つて。罪もないものに罪を被せるのといはれて見ると。ますく私の身迫りになるからマア。淳朴になつて。殊に爺さんも彼是と氣をもんて下さるからあまかせ申て置けれど。考へれば考へるほど。悔しくつてじれつたくつて。ホンニ何様したら宜らうと。氣がわくく

して来るヨかれ「夫は至極御尤でございませうが。全躰いはいお前様がわるうございませうから。此様とになりまして」そりやアお前がいはずともだヨ。私かまた萬事行届が善けりやア。這般なになりは仕まいけれど何事も足はないから。日頃若旦那のお氣にも入らないで居た所へ。丁度左様いふ謀計をする人があるものだから。能僥倖にして退出されたのサかれ「チャマア私の申すのは左様じやアございませう。アノ繁さんがお玉さんと情合の出来た時分に。お前様がやかましく被仰て遠ざからせてお仕舞なされば宜に。それをかまはずにお置遊ばすものだから。段々女の方にも驕がついて。種々な悪い事を考へ出すやうに成ますから。夫を申のでございませう。また斯申ちやアお輕薄のやうでございませうけれど。お前様のやうなお方が。廣い世間にも左様澤山ありはいたしません。第一御標致はよし。針線はよし。琴三絃から。香茶の湯まで遊ばして。そのうへ御良人さまが何様に色狂ひを被成うとも。嫉妬をやかうではなし。誠に申し分はございませぬものチホ、否なお兼だノウ。他を宜かげんにひやかしな、ヨなんぼ各々の身にかゝらない事たつても。餘まり氣樂だノウト。怒みまじりも女性の平生。お兼は莞爾笑を合てかれ「ア左様何もかもお氣におかけ遊ばしちやア否でございませう。サニお前様をひやかしますのでございませうトわかい同志のものがたりは。喜怒哀樂も交雜にて。詞の文のあとさきの。そろはぬも再。あとけなし。折から姑の歸りしかば。漸しは他に移りつゝ。お干



第十六回

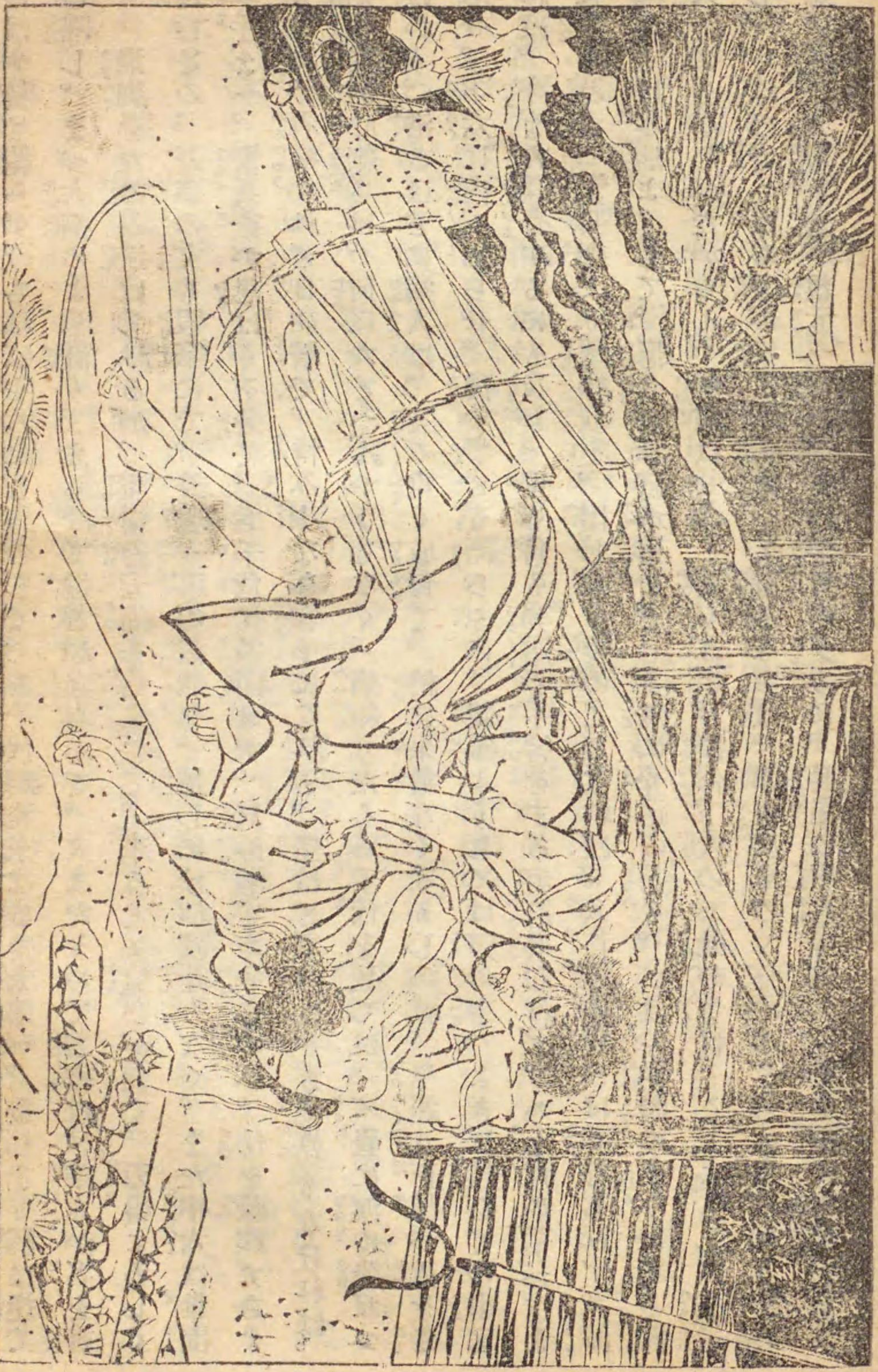
代は泰山のおとづれを。今日か〜と待にけり。

憂事のあるたびごとに身を投げ。深き溪こそ淺くなるらめ。是は往古の言の葉にて。それ人情のおもむく所。今もむかしも替りなければ。身の憂ときは命さへ。捨んどもも理なり。さればお千代は此處にありて。朝な夕なに半六が。善音信をまつのみにて。他に要なき身なればや。緯に紛るゝ間もなく。只其事の胸にのみ。塞ぎて今は病となり。鬱々と起もせず。寝もせでくらす子舎のうち。いと心も結ばれて。配逐られぬ縁なら。いつそ死んで世を啣つ。た一筋の心根は。哀れぞ増る初夜の鐘。折から沖瀬は隔紙を。そろりと明て内に入りおきせ。うだへ鹽梅は些も宜か。お前の病は不殘氣から出るのだから。前後にかまはず。些少保養でもすれば宜けれど。奥山へ淨瑠璃でも聞にお出と言ても。それさへ否だといふから困つたものだ。勿論お前の身になつて見れば。夫も無理はないけれどなんぼ女でも。左様氣を逼く持ちやアいけないはなちよ。ハイありがたうございませす。私も左様ぞんじます。どうも若旦那の氣に入んどか。また私のやうな不束ものでお間に合ないとか云事で。離縁と被仰なら詮方もございませんが。無いも志ない名をつけられましたのが。誠に残念でなりませんから。其悪名の

ぬけないうちは。死ぬにも死なれず。何の因果かと思ひますと。誠に閉塞で參つてなりませんと。時ならなくにむら村雨。まくらの上へはら〜と。落す涙のいぢらしさ。姑の沖瀬も貰ひ泣おきせ。ホンニ困つたものさ。お前に咄したらまた閉塞せる種だともつて。今日までは無言で居たが。何様も私も苦勞になるから實は此間容子を聞に往て見ると。そのお玉とやら云女が宅へ来て居るやうす。ハテナ此方の片も付ないで。何様いふ分解だか兄さん半六をさ。聞た所が大きに兄さんの。思入の違つた事があつて。困つて居なさるのサト聞てお千代は胸に駭り。愀氣は自ら嗜みてもさては父子。繁兵衛が同腹になり。無名を負して逐拂ふ。良人の邪慳に引かえて。泰山の慈悲と見せたるも。皆言かはせし狂言とは。今こそおもひ志ら驚が。小首傾げて此日頃。音信待し甲斐もなき。人の心は斯ばかり。汚なきものか情なしと。思へばいよいよ塞がる胸を。押力さへなかく〜に。弱り果たる面持を。見るに心もかな火箸。細るおもひを把なをしておきせ。サア其譯といふは。兄さんの心では。何でも嘘に違はあるまい。左様して見れば傳吉を。ひどい目に逢して糺たら。白いか黒いか分解らうと。夫々へ手を廻して。恃んだ所が傳吉は。何様いふわけか逃たさうさ。左様して見ると淫奔が。有たにいよ〜違ひないからさつぱりと離縁してお玉を跡へ直そうと。繁兵衛がいふのも道理。それには仲に立人もあり。ならぬとも云兼て。マア〜客分同様に。二三日跡から来て居ると。聞ては私もがつかりして。



お前が心の真直なのをも。兄さんに能咄してたとへ離縁に成るでも其悪名をば振やうにして。おくんなさいと言ては來たが。肝心の傳吉が居なく成ては是を證據に證明を立やうと。いふ手がりがマア無成た様なもの。夫だがノお千代よく聞な。悪がなければ善もわからず。何様な事があらうとも。悪氣を出さず正直に。守つて居れば皇天さまのお恵で。決して悪事はない。たとへ翌が日離縁に成ても。お前の悪くないといふは。此私を知つて居る。今斯して不自由な。暮しをばして居るもの。お前一個の身成行は。どうでもして遣うから。思入氣を強く持て。早く病氣も快勝やうに。氣を把直して居なせト信實見する詞の端。お千代は聞て嬉しさに。またも溢るゝ一雷。いと恃母しくはあもへども。また熟と思ひかへせば。此姑とても良人の血脉。今は兎もあれ縁の糸の。切ては此處に便々と。世話になりて居られもせまじ。恃み切たる泰山さへ。心の變るは人の平生。況て姑は女の事。血脉を捨て他人の此身を。世話にせんとは覺束なしと。先の先まで案じいる。誰を親身に談合を。せばやとあもふ人さへも。ながらの橋の橋柱。朽て甲斐なきあもひには。いと病もますかみ。うつす姿も日に添て。衰へ行くそ哀れなれ姑の沖瀬は心をつけて。お千代が心を慰めつゝ。痛はる事の信實なれど。病は氣鬱の症より出て。稍々に重りゆけば。今は等閑にも捨置がたく。醫師は元より加持祈禱。あるひは名灸按摩針と。疎かならぬ手宛にも。病ひの勢ひ強きにや。何れも少しの利目なく。此ほど





いはや枕も擡らず。されば半六にも談合して。お千代が親家なる黍太郎へ。委しき分解は逢ての咄し。まづ大病のよし計り。おらせて遣るが宜らんと。文志たゝめて表書は。半六が名を書て。飛脚をたのみ遣はしけるが。生憎黍太郎も病氣にて。來るとも協ひがたく。万事よろしく侍むとの。返事の文も假筆にて。義理一遍の禮狀を。越しにければ詮方なく。また半六は世間の手まへ。繁兵衛が思はくを兼て。お千代に對面せず。只沖瀬とお兼とのみ。傍を離れずさまへに。看病すれど日に増て。特みななき容子になれど。然はとて呼ぶべき親族もなければ。姑主従が心細さは。何にたとへんやうもなく。病細りたるお千代を見ては。不覺に涙の先だつばかり。浩るほどに病人は。益々重く成行て。終に果敢なくなりしかば。早速八百屋へ人を走らせ。半六に内々知らせ。後の事ども語らふに。親家よりしては芳の事。よきに侍むとの事なれば。今また談合するにも及び。兎も角も葬送の手筈をするが肝要なれど。お千代が手へはまだ渡さねど。繁兵衛より離縁狀を。出したる妻のことなれば。八百屋の寺へは葬むられず。沖瀬が寺は本店よりして。懸合ざれば承引すまじ。殊に葬送の營も。いは内證の弔ひにて。緯大造にもなしがたからん。如何はせんと語らふに。僮俸下女のお兼が寺は。こゝよりして程近し。されば寺へはお兼が姉と。言拵へて葬るならば。手輕にもの、整はんと。いふによりて其意に隨ひ。即お兼が親元へ侍み。その翌日の夕方に。長屋の甲乙五六人。その中に年老なる。

人に万事の世話を侍み。由井の郷なる寶玉寺へ送りける。然れば寺にては形の如く。經を讀み引導わたして。さて此寺は一向宗にて。死骸は茶毘の烟りとす。宗門にてありければ。鑑札を受取て壘ヶ谷の火屋へ昇入れければ。穩亡は出て是をうけどり。此處でも回向の經などよみ。程なく日も暮ければ。穩亡は庫裏にゆき「サア鈍空起ろ〜」客人がござつたぞよト。呼びされて欠び伸をし。眼をこすり〜出來たるは。年齢三十ばかりなる。色黒みたる大の男が。天窗に手拭卷たれば。僧か俗かは知らねども。名を鈍空と呼からは。さしも賣僧とおもはれたり。人々を見て會釋をしごん。客人のたつた一ツか子。此頃は何様いふもんだかべらぼうにひまたなア。モシお前方は何處でございますへ。長屋の人「ハイ私どもは長谷の地内サごん」ム夫じやア近い子。マア一管おやんなせへ。今に火屋へ入れやしやう。佛さまは男か女か子長屋「アイ女も女まかも若い美しいのだごん」ハ、甘く言なさる。幾許美しくツても。死じやア譯はねへ。何かへ並焼かへ長屋「アイ左様サごん」夫ならどうぞ祝儀を一分お呉なせへ長屋「ハ、祝儀もねへもんだ。そして一步の二歩のと出す様なのじやアねへヨ。まかし私等が了見で。一朱も上やうごん」ナ二人を施主の三四人も附て來ながら。其様な戯言を言ちやア往ねへ長屋「ナニサこりやア。施主じやアねへはナ。長屋の役で。據なく來た人計りだハ、ごん」左様かへ夫ならマア。何様でも宜ごせへやす。まかし一朱じやアつまらねへト口の内で訥々言ながら。かの早桶を引擔



て。火屋の内へ行ほどに。長屋の人も跡につき。戸口まで行て。一朱渡しまた穩亡の布施をも遣りて「サア、是でモウ歸へらう。そんなら翌巳刻時分にヤア。また私等が骨拾ひに來やうから恃ん申しやす。イヤ何方も御苦勞」。サア是からは跡淨めに。小塚へなり丁へなり。皆さん思召志でへだハ、ト由縁かゝりもなき人の。野邊の送を他目から。見れば怪しきやうなれど。死を哀戚の情なければ。是もまた理なり。かくて鈍空は鎌を持いで。桶にかけたる細を引きり。蓋どり見ればいかさまにも。また年若き女の死骸。片白粉に草束ね。島田の鬻に移り香の。まだ消殘る梅花のかほり。鈍空は顔を志かめ「ア、自己も久しく此様な匂ひを嗅ねへ。是がマアせめて虫の息でもあらうなら。幸ひ四邊に人はなし。口説て見る氣にもならうけれど。水より冷てへ體となつちヤア。ア、南無阿彌陀、トいひつゝ、兩手をさし入て。桶よりぐつと引出し。亡者の顔を熟と。見て居たりしが呆れ貌ぞんハテナどうも此佛は見おぼえの顔だ。勿論生顔と死顔とは相號の變るものだが。イヤ何様見ても違へぬ。志かし夫にしちヤア觀音さまの地内だといふのも合點が往ねへ。ハテナアト腕を組暫く見詰て有けるが。何様見ても八百屋の婦。お千代さんに相違ねへが。何様いふ筋で地内から。送られる分解になつたか。こりヤア必定彼一件から。繼て離縁に成たのだらうト言た所が田舎にヤア。縋紳とした親家もあり。地内に居やう筈がねへがス。ア、夫りヤアア兎も角も。畢竟言はゞ僅な金に眼が

暗んで。標致といひ氣だてといひ。十人勝りの貞實ものに。悪名つけた此方の罪。たちまち廻つてその金を唯三兩遣ふうち。土地にも居られねへ譯が出来。お負に天窓をくりぐつと。詮方なしに穩亡の。下働とは氣が着ねへ。天せへあるに此死骸を。また自己が手にかけて。焼といふなア。ハテナ不測な因縁だはへ。コウお千代さん堪忍しなヨ。さぞお前死ぬまでも自己を怨みに思つたらうノ。夫といふもお玉めが。賞貨を志つかりと。遣ふといふから欲に食つて。偽文を拵へたり。簪まで盗だり。悪法かいた身の報ひ。コレ此妾に成やしたト生たる人に物いふことく。詫言しながら手拭とれば。さも怖しき毛毬栗天窓「ドレそんならばト立上り。鎌を丁どふり揚て桶の輪を發矢と切れば。切るゝはづみにお千代が脇腹。礮どあたりし籬の竹。死活の法に自然。協ひしものかう、ノと。一聲。鈍空驚き抱上てぞんエ、氣が付たか蘇生たか。お千代さんくト呼るゝ聲の耳に入。眼を細く見ひらいて。怕りしたる此場の有様。鈍空志つかり抱しめて。耳に口よせ小聲になりぞん胆を潰すは尤だ。此處は基ヶ谷の焼場だヨとばかりでは分解まいが。お前は死んでこゝへ來たのだ。蘇生てはまた種々。咄しもあり法もある。マア氣を志つかり持なせトいはれてお千代は心づき。夫なら死で來たのかや。それにしても不審さちよお前は髮結の傳吉さん。まだ難儀が懸不足で。死んだ跡まで何様する氣だへト怨み歎くもやうく。虫の音よりもまだ細き。聲志はがるゝも道理なり。必竟お千代が蘇生て。



またこの末は奈何にする。第四編に委しく説て。全部の趣向を見はす。

盛衰榮枯 娘太平記操之早引三編卷之下

またこの末は奈何にする。第四編に委しく説て。全部の趣向を見はす。...

娘太平記操之早引四編序

夫戯作の本意たるや勸善懲惡の理を明かにして。漢文字に疎き婦人がた。蒙童の教へに設しより。只管時好に協へんとて新奇無量の趣向を巧み専ら人情世態の解に易きを要として。アレサ馬鹿らし。い何ざまますと。北里の詞も其まゝに綴るに至つて。風調下り。故人の作意に反くものから。若き人は意。氣たと稱せど。往昔性質の老年は。埒なき物との爪。彈。一理なきにはあらざれど。其處に作者の用心あり。淫奔に看せて是を誠しめ。堅いと見せても和ら。



かき筆のあや鳥くれは鳥。つゝまる所は勸善懲惡  
夜光のお珠も打わられて八千代に榮ふ阿千代が  
貞操よく氣をつけて。看なましといふ

于時己亥の仲冬

松亭主人戯題

娘太平記操之早引四編卷之上

東都松亭金水編次

第十七回

今川了俊が壁書にも。その主人の愛する輩を見て。善惡を知れといふ宜なる哉。人その好む  
所あるときは。必ずその道々の友を愛す。たとへば娼妓買を好む人はかならず。學者を友にせ  
ず。茶を好人は酒飲を。友とせざるの類ひ。これを以て知るべきなり。されば八百屋繁兵衛は  
思ひよらざる磯次郎が。計らひをもて親司の手前もやうく濟して。お玉を宅へ入れれば。世  
間はれての女房とは。まだ弘めねど内々は。内室さんとも木綿袴。かけて働く事はせず。火鉢  
の傍へどつさり。居る神輿の御嘉元は。善か悪いか尻は重く。尿の他は立事なく。朝の嗽  
も様ど。嗽茶碗や楊枝筥。それさへ下女に持運ばせて。朝飯まへから青ツきり。他目を忍ん  
でグイ飲せねば。腹鹽排が悪いといふ。是も女神の御詫宣。お玉がこゝへ這入てから家の風儀  
も何日しかに。亂れ初にし忍ぶ摺。老爺半六は折にふれ。見聞につけて胸をいため。以前に換  
る在さまを。いはい老爺か罵しさと。謠はれんも心憂く言ねば。世間の聞えさへ。宜しからざ  
る兩個が行狀。何様したもの隠居せし。身にも苦勞は猶止ず。日暮に氣を痛むるとは。知る



やまら齒の新嫁が。我儘氣隨は今さらだ。詮方なけれど風俗を。些直してと蔭言に。下女や丁雅が口の端にも。掛るはいと卑なき。折から来るは磯次郎が。二世と契りし以前は唄女。今では自味な女房氣に。眞砂の櫛も目にたぬ。やうにはすれど何處やらが。意氣でくつきり垢抜しは。夫者のはてど知られけり。松「ア、引草臥た。お玉さん繁さんは。玉「ア、今朝何所か出て未歸らないは。松「イヤ左様かへトいひながらお玉「藤松「この宅もノウ。老爺さんが居ないと餘程いゝけれど。私しやア何だか斯して來は來ても。何とか思ひやア仕まいかと氣になるは玉「ナアニ其様な人じやアない。寔に能人だは。まかし老人といふもなア。氣障だは子へ。松「左様サ私しやアお前の慈母でからが氣が詰るものヲ。玉「イヤ否な子へ。また私の慈母ほど。何にも構はないものはありはしないは。松「夫でもサ。ア、繁さんが歸ればいゝノウ。玉「今に歸るだらうアノ磯さんは何様した。松「モウ來る筈だが。何様したかサ。アノお玉さんお前お聞か。アノチ引お千代さんが死だを。玉「イヤ左様かへ一向知らないは。アノ嬢は田舎へ歸つたじやアないか。松「ナアニ田舎へは往ないで。磯さんのマアお祖母さんのやうなもので。此方の老爺さんの妹ださうだ。ソレ地内の子。玉「フ、ム私きやア何だか聞かないヨ。松「その宅へ往て居て死たッサ。玉「さぞ愚痴に私を恨んだ事たらうノウ。松「恨んだも恨んだも。今に化て出て。お玉さんを把殺すと言たとヨ。チ、怖い。玉「アレサお洒落でない何も私がお千代さんに。把殺される咎

は有まいじやアないか。各々が淫奔をしておいて。そりやア甚だ迷惑だ。松「それでもお前人の一念といふものは怖いものだから。何ぞ法事でもしてお遣。玉「ア、法事を志ませう。コウ芋松や。其方一寸往て一升把て來な。左様して刺身と茶碗か何ぞを。分解て來や。早くといふのだヨ。玉「ハイ、幾個めへ誂へます。玉「ム、三人前計りで宜はな。そしておさんやお前この鐵瓶へ水を足て。そして猪口や燗鉢も持て來ておくれヨ。おさん「ハイ、松「コウ芋松どんお前その序に煙草を買て吳な。玉「煙草はこゝに在は子。松「ナニ、と云ながら帶の間から引出す巾着の紐をゆるめ錢を出して。松「國府にして吳なヨ。玉「ハイ、ト出て行程なく酒及肴も來れば兩個は其所へ燗をつけて。霎時は對坐の酒宴にお玉は眼淵赧然ど。なれば一入愛敬も。尙彌増るその風情。亂れし髪を搔あげながら。玉「エお松さん。お千代さんが死期に。怨だといふのは正真かエ。虚言だらう。松「ホ、ハ、正真でなくつてサ。磯さんがお前その時往會して。膽を潰して歸つたものヲ。玉「否なち千代さんだのウ馬鹿、しい。松「夫が怖かア。私に金を五兩ばかりも越し。玉「左様するど何様するエ。松「夫をお寺へ納めて法事をするから。玉「夫なら直に法事をしても宜らう。松「ナニお前が直に志ちやア利ないと。玉「イヤ誰が左様言たエ。松「ア、夫かへそりやアあのエ、引誰か、左様言たヨ。玉「アレおふざけでない。お松さん虚言だ子。松「マア何でも宜から五兩越しなヨ。左様するど化ちやア出ないから。玉「ム、遣う。今に淺草の市で



買て来て 松「お前も大概だよ。なぜ自己の交接ものは不殘此様だらう 玉「何様だ 松「人が悪く  
つて口が達者で。食るものは一疋もないからサ 玉「チャ呆れ切ったアノ可愛らしい口から。怖  
ろしい事を言出すヨ 松「チホ、面目ねへ。ア、私しやア大造酔たさうだノウ 玉「ナニまた  
其様に飲もまねへで。今日は宅の老爺さんは居ないから。心配なく飲なヨ 松「チャ左様か夫  
ならお前また早く。左様言て呉れば宜。何様に配心してゐるか知れやア仕ねへ 玉「チホ、  
夫でも心配をするのかヨウ馬鹿らしい 松「ナゼ其様にふざけやア止めへし 玉「寔に大人し  
いは。サアお爛が出来たヨ 松「マアお前飲。私しやアモウ酔た 玉「今ツから。可笑なお松さ  
んだ。何ぞ殺を言て遣ふか 松「左様さ私も左様思つて居るが。今に繁さんが歸るか。磯さんが  
来るか。その節にも思つて居るのサト待ば影さす磯次郎。庭口から裡を覗いて 繁さんは留  
守か 玉「チャ磯さん先刻から待て居たは。サア早くお出ヨ。お前マア何處を放蕩してお歩行だ  
磯「是でもまさか用もあらアな 玉「不測だ子へホ、松「夫よりかノお玉さん。不測といへ  
ば繁さんが時々眞面なを言出すが。私しやア何様も可笑くツてならないは 玉「何様に理窟ッ  
ばからう。夫りやア筋を言出すと。種々むづかしいヨ 磯「なんだ他に上れ〜と云て。何も  
なしかエ。刺身の 俵 獨活が少く。茶碗に柿の吸口ばかり。ぢやア納らねへ 松「お前か繁さん  
の顔を見たら。何ぞ把に遣ふと思つて居たんだヨ 磯「いゝ心意氣だ。大かた奢らせやうといふ

相談か 松「チャお玉さんお聞。不畢邪推ものじやアないか子へ。また先に左様思はれて居て。  
私等が出すわけはないから。何でもお驕り 玉「ナニ私が驕らう何が宜エ 松「ナニ磯さんに驕  
らせたが宜は子。當然だ 磯「驕らう〜。夫ならト考ながら孝松を招き何か分付てやる。折  
から歸る主の繁兵衛「イヤお客さままだ子。先刻からか 磯「ナニ私しやア唯今志がた來やした繁ア  
ム時にお玉。殺かねへノ 玉「ア、今磯さんが左様言つておやりだヨ 繁「左様か。夫なら自己ア  
蒲焼でも奢らう。何でも同じ錢を出す位なら。甘美て其上に。お玉の嬉しがる物が宜 松「ム、  
女房孝行だ子。お羨しい 玉「チャ好ねへ。私きやア蒲焼じやア何様も嬉しくない子 松「ム、  
左様〜。お前は餘り好ない子 繁「その好ない物で嬉しがらせるから奇妙だらう 玉「へん嫌ひ  
なもので嬉しがらう譯がないは。子へお松さん 松「ム、分解た〜。お玉さん左様じやアない  
ヨ。精がつくからの事たア子 玉「チャ左様かへ。子。ソラ御視。諸事此所で往から理屈ばいとい  
ふ事サ 繁「ナニ〜理屈ばいハ、ハ、磯「何だまた男女二手にわかつて舌戦するの。モウ其  
様な野暮は止てお玉さん三絃でも弾ねへナ 松「アレお止 磯「なぜ〜 松「夫でもお前お千代さ  
んが死亡たじやアないか 磯「ナニ虚言〜死亡さうだといふ噺しサ。よしや死亡にもしろ。ナ  
ニ構ふものかノウ繁さん 繁「知れた事サ。全肺老爺が。餘まり人が善過るから困るヨ。頼に田  
舎へ遣てくれると宜のだけれど。便々として置もんだから。打ば響とやら。こゝの事なんぞが



種々聞えて甚だ中位サ。玉ヲヤ夫じやア私が如斯して這入た事も何もかも。お千代さんにやア知れて居ますのかへ。繁左様サ。不殘知てるヨ。夫に姑御が先頃來て。見て往たから筒拔だんを入れられたんだ。ノウ左様じやアねへか。松左様サ。思入見せ着て遣るが宜は子。玉志かし向ふがその男と夫婦にでもなつて。立として居る事なら左様だけれど。傳さんは行方知れず。自己は親家へも飯られないで。他の厄介に成て。煩つて居て見れば。實は餘り可愛さうだ子ト元來己れが悪巧みにて。逐拂ひしを氣に病て。煩らふと聞ば今更に。空怖しくもひつゝ言辭に情の色を見せて。繁兵衛はじめ磯次郎。お松等にも。自己が心の優しと知らする巧のほど。實に往昔の呂后にも。劣らぬお玉が舉動なり。斯て程なく誂への。酒殺も來りつゝ。四人齊一膝を合せて酌つ酌つ飲むほどに。はやくも初更の頃となる。折しも丁稚に提灯持せて。歸り來る老爺の半六。見るとより人々は膝を直し。玉ヲヤ老爺さんお歸りなさいト。會釋を聞て半六は其所へ居り磯次郎と。お松が顔をむろりと見て半六ア、ヤレ、年はなりたけ取たかないもの弱い時は何事も大緩で。まづいは道放し。夫だけに苦も少ないが。サテ老年見ると。前や後がよく視へて。滅多などは出來なく成コレお玉此一坐は他人なしの水不入で。能様なものなれど。自己を爺父さまといふては。少し筋が違ふであらう。事に寄たら未始終。父子の縁を結び

もしやうが。夫はまだ後の事ハ、。老年はこれだから。弱輩の氣に入ぬテトおなじ理屈も笑ひに紛らし。人の心に當らぬやう。然としてしやんと打釘は。お玉が胸にこたへぬべし

第十八回

當下磯次郎は形容を改めていそ「老爺さん此間御頼み申ました。内々の事は何様でございませう。まだお嘸し下さいませんカ半六ア今日既にその事で往たのさいそ」ハ、ア左様でございませうか。夫りやア大きに半六所が種々。面倒な譯もありだが。マア大概は談じも行届いたのサトいふ顔を見て磯次郎は。莞爾として手をつかへいそ「大きに有難うございませう。何様して仲々。一通りの掛合じやあ。所詮むづかしい分解でございませうが。爺父も藤八も。全く貴君に宛じて。得心いたしたのでございませう半六お前方のまへだが。この嬢していふ。が心操は兎もあれ。最初町唄女をして居たといふものだから。流石に磯次郎が女房とは。披露が仕にくいといふのは尤な事サ。左様いふとコレ此所に居る。お玉なんどにも響く譯だが。吾儕等が。織瓜茄子と商ふ身分でせへ。斯して表を張て居て見れば。裏店小店の女兒を。チイ夫と娶にするとも。マア出來憎いやうな譯で子トいふ折丁稚の芋松が敷居の傍へ手を突て。芋、エ、アノウ米屋の藤八さまがお出なさいました半六ムナニ藤八どのが來た。ハテナ何ぞまた風が替つたか知らん。夫



なら自己が子舎に仕様か。志かし此處でも大事あるまいかまつ「イヤ何ならお前さんの子舎に  
被成て下さいまし今に磯さんを上ませう半六夫なら左様ヨ。芋松や。お客を自己が子舎へ案内  
して。茶烟草盆でも出して置け藤「へい」ト出て行

そもこの藤八は半六が妹婿。米問屋作兵衛が世嗣にしたる藤太郎の父にして。磯次郎  
が後見同様の伴頭なりしが。此お松がいまだ唄女にて在ける時より。深く思ひ焦れて黄金  
の威勢をもて口説たりけれど。お松は磯次郎と深き中なれば。聊もうけひかず。藤八も  
始は誰とも知らざりしが。はや後々はお松が好男子は磯次郎なることを知りて。何卒磯次  
郎をおひ失ひ。お松を手に入れんと。磯次郎が養父なる次郎八は。砂浦新田といふ所に。隠  
居してありければ。これへゆきて。種々磯次郎がことを譏言またれども。直に退失ふ手續  
にもならず色々心配る折から半六が来りて。お松は元唄女の上にして身の上こそ正し  
からねど。心操は仲々に。然るべき人にも増りて。貞節なる事はいふも更なり。良人を  
おもふの真情深く。磯次郎が妻にするとも。恥かしからぬ女なれば。這回は自己が娘と  
なし。改めて磯次郎方へ娶入さすべし。勿論長谷の地内に居る。沖瀬は米屋の家にて。大  
切の隠居なれば。是へも早速相談したるに仔細もなき挨拶なれば。はや此上は砂浦の隠居  
へ承知させるの一段なれば貴さまより。能言傳て。何でも家を究るか肝心。素性系譜を彼

是むづかしくいふは。ずんと古風の田舎流義。姓より育で當人の。氣操の能のが第一と。理  
を盡したる詞のうへに。半六が娘分にして。送らんとあればこれもまた否むべき言辭も  
なく。藤八は澁々ながら。私に於ては仔細なし。次郎八どのが何といふ歟。と其所へ詞  
は濁してあげど。肝心の家元なる。沖瀬も承知のうへとあれば。はや變改もなるまじきか。  
然にても左様なりては。都合の悪き事多しと。猶さまんに悪巧して。即ち今宵半六が  
方へ来り。今日段々漸しの趣きを。砂浦の隠居へも物語りしに。次郎八どの、申さるゝに  
は。八百屋の隠居の取扱といひ。殊に娘分にして嫁入せうとのとなれば。兎斯いふべき  
理もなければ。他方の噂には。殊の外の悪婆と。といふ風聞もあると。まづ兎も角も隠居  
所へ當人を呼び置て。五七日も様子を見うけ。其上にて實に半六どの、詞に違はず。往々  
家の爲ともなるべき婦人ならば。最初は娼妓にもあれ唄女にもあれ。夫等の事には強に  
構ふ理もなし。養子なれども大切の。株式をも嗣する磯次郎の氣に入たる女を女房にす  
れば。自ら家内も納る道理猶々めでたき事なれば。早速に改めて祝言も整ふべし。まづ  
まづ砂浦の隠居所へ。お松を逗留に越すべしとの事なれば。可加となら今宵直に。私  
が同道いたして参りたきものといふにより。半六は案に相違はずれど。藤八が詞といひ。砂  
浦の隠居も尤の口説。彼是と言ては却て宜かるまじ。その言葉に隨ひ。幸ひお松もこゝ



に來合せての事なれば。藤八に連させて。砂浦に送るが宜らんと。その事を皆々に嘲し。何

でも物毎の早く納る方が宜からんといふ

繁なるほど随分おもしろい趣向だなア。磯夫から親爺次郎八のいふ通り。砂浦へ遣やせうか

半六「自己もそれが宜らふと思ふのサ。志かし當人は何と思ふか。磯お松どうだ。砂浦へ往か

松「ア、そりやア往もせうが。子へお玉さん。連が連だから恐れるノウウ。玉「ム、左様サなふ。志

かし構ふ事はないハ子。夫にお前磯さんの内儀さんと極てお視。主人じやアないか。松「そりや

ア左様だけれど丁得女の決しかぬるは。かの藤八が前方より。お松を數回挑めども。いと強

面言釋て。恥をかゝせし事も多ければ。もしまたそれが腹醫を。されはせぬかと人にこそ。い

はぬど塞ぐ胸のうち。半六はじめ磯次郎さへ。その事をば碌に志らず。たにお玉のみ能志りて。

可笑なものとは思へども。彼は固來大膽にて。男子を騙す手事には。微妙を得たる女なれば。己

が心に引あて。夫しきの事は何とも思はず藤八と同道して砂浦へゆき。磯次郎が養父なる。次

郎八を賺しこしらへ。首尾よく米問屋へ乗込が肝心なりと勸められ。お松も今はその氣になり。

砂浦へ往べしとの事。此よし半六より藤八へ語りけるに。仕澄したりとぞくく歡び。彼是夜も

更たればとて。駕を雇ひお松を乗せて。後方に着そひ藤八は。飛が如くに急ぎ行○遠寺の鐘を算

ふれば草木も眠る丑満頃。こゝは何所か志らぬとも。右も左も松と杉。暗きがうへに生茂りて。

晝だに然こそ闇からめと。思ふばかりの細道を。行事十町ばかりにして。冠木門のありけるが。

藤八は聲をかけ。藤「チ、其處だく些待て居て吳なト腰より合鍵とおぼしき物を把出し。扉の

際に切抜たる。穴より腕をおしいれて。カチリノト錠を明け。藤「サアノく這入なせト扉を

ひらき「コウと玄關も大造らしいな。何にしる不殘寢たらうから都合が悪い。マアノくこゝ

から入れやせうト亦傍の木戸をひらき。内玄關ともおぼしき所の戸を明け。お松を駕から出

してそこへ居らせ。駕屋には賃錢を拂ひて歸しける。お松はこゝに居て。宅舎のやうすを見る

に。その掛り武家屋敷のごとくにして。磯次郎が隠居の住居とは思はれず。玄關には鎗長刀な

どをかけたる躰。仲ノ町人の寮にはあらず。さてこそ藤八に變話れて。こゝへ誘引たりけ

る歟と今更胸の悸々して。四邊を見まはして居たりけるに頓て藤八は奥より行燈を提げ。片手

に烟草盆を持って來り。藤「何様だお松さん怖かつたらう。松「アイサ何だか氣味が悪かつたヨ。そ

してこゝが磯さんの老爺さんの宅かへ。何だか大造だ子。藤「チニ此所は自己の續魂お心易くす

る諸侯のお下屋敷だア。砂浦の隠居所までは。まだお前二十町も在から今夜往といふ譯にもな

らず。道も物騒だから。マアノくこゝへ落着たんだア。今に夜着や蒲團を持って來るから。寛り

と寝て翌砂浦へ往うぞ。松「チヤ左様かへ。夫ならまた翌出て來れば宜かつた子エ。私きやアま

た路は知らず。其様に遠かアないかと思つたは。磯さんも誰もかも。砂浦といふなア何所だか



知らないのか子馬鹿らしい藤「ナニサ誰でも知つて居らアな。どうせ今夜中に往着事の出来ぬへのも不殘承知サ。松「そりやアお前様と同伴だから。些も氣遣はないけれど。何も旅でもありやア仕まいし。知らない所へ泊らないやうにするよ宜つたのに。磯さんも磯さんだ。此様に遠かア遠いと言てお呉なら。今夜出は仕ないものヲト彼を怨みこれを罵る。その心根を大略は。察しながらも知らぬ顔。藤「左様サ全躰翌出れば宜つたのヨ。夫に他の者となら宜らうけれど。道連が藤八といふものだから。尙急腹だらう。エ。お松さん何がお前の氣に入らぬへかア知らぬへが。座敷を勉て居る時分から。自己にやア實に情ねへせ。所がまた何の因果だか。どうもお前が能つて堪へられぬへから。ハテ思々しいと思ひながらも。冷たい金を運で見たが。唯の一晚でも。艶い詞をかけられた事もなし。夫から世間の取沙汰にも。その艶郎は磯さんだと。聞いて見ちやア詮方がねへど。まづ九分通りに明らめたが。今日は何様した神さまの。引合せやらお前をつれて。出る譯になつたのは。年頃日頃の念願が。協ふ時節の來た事か。と砂浦へずつと往ば。亥刻過には往着所を。駕やへ頼んで道を換へ。こゝは名に負入ケ谷別莊守は日頃から心易さに得心させて。借うけたこの書院。たとへ三十日泊らふとも。勝手次第。サア早く寐て嘶さうト傍の押入引あけて。把出したる夜具蒲團。藤八手自敷伸て。二ツ枕の船底は。水漏さじとの謎々ならん。藤八はお松が手を取り。藤「コレサ何を其様に塞鬱で居るのだナ。今いふ通

り。お前故には白子屋の。丈八じやアねへが。箔屋町の。燈籠佛へも月參り。糸の平内。女夫石。枕ばしへも願かけて。どうぞくも口癖に徒既參りをせぬばかり。その深切をナアこれお松さん。些は斯と汲わけて。呉ても罰はあたるめへせト力任せに〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇引あげ。お松は今更籠の鳥。逃たくとも道は知らず。然ばどて年闌ぬ。恍惚處女のやうに。騒がば人に笑はれん。万事騙すに如はなしと。心を定めて莞爾笑ひ。松「前方からしてお前様の御深切は。寔に嬉しうございます。磯さんと彼様なつて見ると。どうもお前様とまた斯とは。成憎うございます。殊に今回磯さんの宅へ這入る様になつてお見なさい。いよく濟ないじやアありませんか。志かしそりやア私が言はずとも。お前様も御承知の事だけけれど。マア一通り言ない事は分解ないから言ますヨ。決して悪く思てお呉なさいますなヨ折角此様に信切に言てお呉なざるものヲ。其様な譯でもないとなら。お前様何しに彼是と言ますものか子。夫こそ直にアイと言たいけれどト思はせ振の挨拶は。猶も男に氣を持せる。仕打も了得それ者の流れ。然して外すは手練の魂膽。それとは知らで藤八が反付られても懲ずまに猶濡かゝる夜半の雨。近くなりけり

盛衰 娘太平記操之早引四編卷之上 終



盛衰 榮枯 娘太平記操之早引四編卷之中

第十九回

お松は兎かく藤八を。面白可笑賺し拵へ。此場を遁れて砂浦へ。送られんと思ふから。手術を盡して種々すれど。砂浦へ送るといふは。固の詐變にて。お松をこゝまで謀出し。自由にせんと。目論見ゆる。夜が明ても日が暮ても。仲くこゝをば立退ず。餘りの事にお松は呆れて。松「アレサ藤八さん。是まで言ても得心のないといふは。お前も餘りじやアないか。左様出來る譯なら。直にアイと言ますハ子。然してマア何にしろ。砂浦とやらへ送つてお呉なさいナ。昨夜は宜が今日もまた。彼地へ往ないといふ事が。万一磯さんの方へ知れて御覽なさいナ。私も濟ないければ。お前様だつても餘り宜事もありません。ハ、ハ、ハ、そりやア逸々御尤至極ヨ。所が實は砂浦へ送つて往といふのが。まづ大虚言サお前と志んみり嘶しを仕度斗り。衆人を甘く騙かして。連て出たんだア。コウお松さん悪く思ひなさんな。それといふのも不殘お前に惚ぬいたから起發た事で。何もお前を憎んで仕た譯ではなし。夫ほどまでに骨を折て。事によりやア命にも。身にもかゝるは百も承知サ。然して見れば藤八も。まんざら憎くも有や

すめト綱繆かれば今さらに。お松は何と詮事なく。いつその事に恥しめて。若腹を立ばたて。所詮此身を汚されては。生ても居られぬ世の義理合。と覺悟は究て居ながらも。磯次郎より豫聞く。この藤八は悪漢なれども。砂浦の隠居が氣に入にて。萬端渠が心の儘に。舖の事から朝夕の暮しまでも計ふよし。若この漢子の怨を稟ては。この身は兎もあれ磯次郎が身に拘はらんは必定なり。如何にしても言振て。後にこそ詮方あれ。とやうく胸をおし直して。莞爾と笑ひつゝ。松「そりやアお前様の御信切。今に始めない事だから。私もモウ嬉しく思つて居ますけれど。異に破目に成たものだから。終に一回お前様の。自由になつた事も有ませんから。定めし私を憎くお思ひだらう。と察して居た所を。憎くも想はず。矢張昔のやうに彼是と言てお呉被成なア。實に餘程な深切でなくツちやア。と今更お前様の心意氣に感心しましたから直にアイと言て。今までのお禮をも言ふとおもふ。亦生憎で寔にぞれたい事が有ますは。藤「ハ、ハ、ハ、月水の虚言を憂ど。いふ狂歌があるが大かた其様な事たらう。松「アレ左様お言じやア氣の毒だ子。私のこと眞正に。左様だから困るは子。藤「夫なら何様も詮方がねへから。五日でも六日でも。濟うち逗留を仕やせう。松「チヤ夫だつてまさか左様も成まいじやアないか。左様這様するうちにやア。磯さんも不測を打て。砂浦へ聞合ていも御覽な。夫こそ大變で。お前様も。私も宅へ歸る事も。出來なくなるじやア有ませんか。藤「へん出來なくなりやア歸らぬ



へ計りサ。京大坂へ往うが儘。お前と兩個で暮す位。些も困らぬへ。そりやアお前の量見次第で。今ツからでも帆をかけて出かけるなア仔細ねへのス。松「マアそりやア能々の時サ。ナニ私だつてまだ老朽た身じやアなし。お前様一人位。過しかねやア仕ないけれど。左様成て見ちやア。實も蓋もないからサト飽までお松に欺かれて。よもや虚言でも有まいか。と思ふも則艶治郎の。手前官より物事を。任担するものなりかし。斯て其日も暮ければ。藤八はまた酒殺を取寄せ。莊守の人を招きて。終夜酒宴をなしつ。その翌日の晝は過ても更に歸る氣色も見えず。お松は獨氣を揉て歸るべき由を藤八に。催促すれども點頭ばかり。なか／＼歸る氣色もなければ。然らば衆人を酔潰させて。抜て出ること上分別。と頓て又盃を改めてさま／＼にして強るほどに。藤八も莊守も。昨夜よりの酔が出て。舌もまはらぬ斗りに酔ひて。各々に眩枕して。高駈に伏しければ。時分はよしと裾引あげ。お松は此處を忍び出て。門の外迄至りつ。見ればこゝなん入ヶ谷と。聞たるのみにて何方をさして往べしとも知れざれば。唯茫然と徳みて。誰ぞに道を聞たやと。見れど四邊に人もなし。日のはや西に傾きて。冬の日の暮安きに。こゝにて暗くなりたらばと思へば胸のみ轟きて。またも苦勞の十寸鏡。空さへ曇る薄暮天。斯てあるべき事にもあらず。と宛こそなけれ足に任して。先こゝをば立出つ。四五町ばかりも來りし折。チイ／＼と聲かけて。追かけ來ぬるは定かに藤八。見つけられじと身を潜め。

此方に立たる六地藏の。後に隠るゝその折から。きよろ／＼眼の藤八が。こゝだ／＼と言さまに。お松を無手と抱留る。アレヨト逃を逃さじと。捕へる手先を振はらひ。賽の河原のそれならで助け給へや地藏尊。と菩薩を楯に摺ぬけても。さて左様甘くは虎の皮の犢鼻褌は止めぬぞ牛頭馬頭の。呵嘖に齊一藤八が威勢尖く追かけまはし。遁れ堅田に病鷹ならで。翼鍛るゝ心地しつ。今は足さへ竦縮つ。終に藤八に捕はれて。此度はいかなる憂目にや。あはの鳴門に立波の。胸も碎る思ひなり。こゝに磯次郎は半六父子且はお玉が勧めによりて。氣にはかゝれど藤八に。お松をわたして遣しより。兎に角心の落付ず。第三日目の暮頃。人を頼みて砂浦の。隠居が方を窺ふに。お松は彼所へ往はせず。また藤八も當下より。舗へも歸らず本宅に。在ぬよしを聞からに。扱はど獨仰天して。これには深き仔細あらん。かねてお松を藤八が。彼是挑む由を聞たり。這回のことを僥倖に。お松を知らぬ土地へ連行。戲淫とするものか。憎き奴が計較。と忽地眼の血走りて。日頃親しき甲乙を。三四人語らひて。何方を當とはなければ。常に藤八が往き通ふ。出入屋敷の夫々まで。其所か彼所かと尋ねたり。夫は休憩こゝは彼。蟻が谷なる焼場のさま。幽に聞ゆる鉦の音は。无常迅速の境を示し。聲高やかなる稱名は。頓生菩提を導くなるへし。稍に更る夜風は松の梢を吹過て。霰交りの一ト時雨小笹が上にはらはらと。玉ちる音も俱にこれ。寂寥まさる媒なり。當下傳吉の鈍空が抱起したるお千代の亡







第二十回

片傍は川片傍は。松と杉との植込に。根には小笹のさらりと。足に障りていとせまき。路の  
 行手にむかふより。三四人連れに挑灯一張。それさへ眞の立けるや。暗き火影を後から。▲「サ  
 ア」挑灯もち。餘り早過るぜ。何だか隘い癖に。種々な根株が有から歩行やアしねへ。×「左  
 様ヨべらぼうに曲路じやアねへか。そして臺が谷へ行ば。倍とした當りが有かのう。□「何サ  
 どふも倍とした當りのあらう理屈はねへのサ。たゞ是も氣やすめヨ。④「コウ」夫ならいつそ  
 の事に迷子のくお松。さんやア引いとやらかせば能。□「左様言なさんな。磯さんの身になつ  
 て見ねへ。何様に氣が揉るか知れやアしねへのヲ。▲「全躰。アノ女が氣が利ねへじやアねへ  
 か。子供じやアあるめへし。逃出して來るが宜はナ。×「エ思ひの外先が好男子で。隨徳寺どや  
 らかしたのかも知れねへ。ハ、ハ、異口同音に囁々と。噁りちらして行先より。葛籠を脊負た  
 る大の男。手拭深く面を裹て。四邊をさよろく四廻して。來りしが立どまり「モシ一寸御無  
 心がござりやすト言れて恟としたれども。大勢なれば力強く。×「ハイ何だへト立留れば。男ど  
 うぞモシ。挑灯の燈火をかしてお呉なせへ。重エものを脊負て居るから。ツイ彼所で蹴蹴て。  
 どうも血が出る様だト。屈んで足の爪先を。ひねくり廻せば自から。脊負たる葛籠は逆になり

中で瓦多離といふ折しも。アレ怖いヨト女の聲に。心付てや傍なる。垣根に葛籠をおつかけて。  
 足の指より出る血を拭んとすれど紙はなし。頬冠りせし。手拭といて。端をさらりと引裂つ。  
 指を結へる折からに。こなたの人々その顔を。見れば眼はきよろりと圓く。毬栗あたまの怖し  
 さは。一癖ありと思はれて。人々顔を見あはせつ。言葉を出す人もなし。彼毛毬栗は葛籠の  
 紐の。弛しを止め直し。「ア、こりやア有がてへ。どりや往ませうト歩行出す。人々は跡を見か  
 へり。▲「コウ今の奴が脊負て居る葛籠を。お前方は何と思ひなさる。×「左様ヨ何でも中は女だ  
 ぜ。□「アレ怖いとか何とか言たが實に怪しい。▲「何様もお前。夜更小夜更に。女を葛籠へ入れ  
 て歩行わけがねへアノ葛籠の中のが。万一自己達の尋ねるお松。さんじやアあるめへか。×「自  
 己も左様思つたヨ。□「何と夫なら。彼奴を捕まへて糺して見やうじやアねへか。よしや間違て  
 も夜中に女を葛籠に入れて歩行からにやアどうで彼奴も癖者だア構ふ事はねへ。▲「左様サく  
 此所等が勘の付所だらう。□「サア夫なら早く仕ねへ。まごくして居ると何處か往て仕廻はア  
 ×「サア衆人早く來ねへト彼毛毬栗を追かけて跡へ戻れば毛毬栗は。この大川にわたしたる。  
 橋の半へいたりしころ。跡より追着人々が。□「斯々待ねへ。お前に聞てへ事があるト。呼掛ら  
 れて振り返り「アイ何だへト立留れば。▲「何だじやアねへ。先刻傍で聞て居りやア。葛籠の中  
 で女の聲。どうも合點が往ねへから。態々跡へ歸つて來たんだ。この葛籠の中に居るなア。お



松。さんといふ女だらう。夫なら早くこゝへ出せエト蓋にかゝれば毛毬栗が「インニヤ其様な女は知らぬへト先の辻番で聞て見ぬへト言も終らず行んとするを。人々は眼胸して。葛籠の紐へ手をかけて引戻せば跟々ど。一足三足遂巡赫と急立毛毬栗が。眼をむき出して「なにを爲ンだエ。放しやアがれト猶足早に行んとするにぞ扱こそ癖者ソレ逸すなト前と後に立塞がれば。毛毬栗は脊負たる。葛籠の底へ手をかけて「エ、うるせへ唐片朴じやアねへか。何を脊負て歩行が。其方達の世話にやアならぬへ。邪魔アするなト振あぐる拳を丁とうけとめて。葛籠の紐を曳と引牽れて怯むを附入りて。繩を外せばとり携り霎時争ふ在さまは。祇園牛頭天王の祭禮に。神輿を昇が如くにて。彼方へ引ば此方へ引寄せ。宙に釣し肩にかけ右往左往に争ふはづみ葛籠を礮と欄杆へ。あてると見えしが逆に蹴りて。川へ水入と落したり嗟と呆れて双方が。足踏かけつゝ仲揚り。見れども見えぬ暗き夜に水の音のみ濤々たり。是では旦那へ分解なしこの坊主を縛しあげ。連れて往て一詮議。といひさま取着兩人を捨倒さんと揉合所に。身を沈まして毛毬栗が兩足すくひて引倒せば得たりと上に乗かゝり。起しも立ず繩をかけて。ぐる／＼巻に縛しあげ。引立てこそ往にけり。斯るべしとは一點去らぬ。お玉は日々の食好み。日さへ暮れば小鍋だて。小丁稚と下女が足をも厭はず。其所よ此所よと馳廻らして。火鉢の傍へ三ツ足の燭臺へ燈す蠟燭も。細いは暗いと二十目掛を照して夫婦が。酒宴の興他の見る目も鬱悒て。半

六も。此頃は。お玉が所業に呆れはて。人の噂に聞た節も。取所のなき女そとは。全く他人の悪口にて。然のみはあらじと思ひしより。尙彌増る身上知らず。それを制する事さへならで。鼻毛を伸す倅か愚鈍。困つたものと心では。苦にすれど口へは出さず。その容子をぞ伺ひ居る。さればお玉が我儘を。誰咎むる者もなければ。よき事にして日々の行跡。法に過たる舉動あり。心合たる帮間豆八吞太郎を呼よせて。或ひは酒をのみ。或ひは双六。挾將碁。待手の争ひに聲を高うし。短き日さへも暮しかねて。身に持扱ふばかりなり。或夜繁兵衛と二人して。亥刻頃までの酒宴に。ほろ／＼酔の能喜元。繁兵衛はそこへ寐ころびて。手枕して居るをお玉は揺起し。玉「サア旦那真正にお寐なさへヨ。何んだ子あればかりの酒にお前様酔たのかへ。弱ひねへ繁ム、／＼／＼起る／＼。ア、どうも酒を飲と無性になつて。横のものを堅にするのも否だ。玉「ホ、横になつて居るのを。堅にして見せやうか。繁「ア、これサ櫟ぐつたいヨ。そして芋松が見て居らアな。玉「何の構ふものか。當然だものヲ。繁「ヘン左様厚面皮出りやア。仔細なしだけれど。玉「サア夫なら早く床へお出なさいヨ。私さやアモウ其様に世話を役せちやア否だ。繁「エ、驚しい女だ。寐たかア早々ど。一人で寐ればいゝ。ト言ながら起て帯を解蒲團の上へ行て寐轉ぶど。お玉も跡より行て。屏風をくるりと引。玉「何だエ一人で寐るエ。おありがたう。一人で寐る位なら。此様に氣を揉は任せせんヨ。お前様はモウ顔に似合ない。怖ろしい邪



慳だ子、繁ハ、欲に限りなしサまた自己が様な。女に優しい者はあるめと思ふぜ玉ヘン  
 そりやアお千代さんにやア優しかつたかア去らないが。私にやア餘り優くもない様だ子へ。ア  
 ノモシ夫といへばお千代さんは。正真に死んだのかへ。繁「自己も委しかアしらねへが。定か昨  
 日死んだとかいふやうな噂しだッけ。玉「イヤ左様かへ可愛そうにノウ。さぞ私の事を怨たら  
 う。ヲ、否だ。繁「何も恨むわけもねへのス。モウ、其様な事をいひッこなしヨ面白くねへ  
 した。玉「お前其様な事を言ないで。回向でもしてお上ゲ。先頃中はお互に死ぬ死なふといふ中  
 で。憎いの可愛のと言って。終夜些も不寐にお出の事も。有ったのじやアないか。繁「そりやアお  
 めへ一年なり半年なり。夫婦に成て居るからにやア。些は可愛がつた事もあるだらうス。今斯  
 なッて見ちやア。他人よりも嚴重ぜ。玉「その可愛がつたりがられたりまた中を他人より嚴重や  
 うにまたなア。私の爲だ子。お前様も悪い狐に魅込れて。とんだ罪をお造りだねへ勘忍してお  
 吳なさいヨト莞爾として顔を曲繁兵衛が顔を覗きこみて。頬の邊を指で突。繁「コレサ止しなヨ。  
 其様な事をされると。〇〇〇〇になつて悪い。玉「〇〇〇〇とは。何様な氣になるのだエ繁「エ。  
 此様な氣サ。玉「ア。アレ痛い髭だねへお前様もこの頃ア。めつきり髭が澤山におなりの様だ子  
 玉「年が老ると。段々斯なるのサ。ソレ女の髭も年をとると。多くなる様なものサ。玉「イヤヤ  
 ヤ女に髭が有ますものか。繁「ア、あるね。女も十五六位では。髭も薄すりとして。毛々として。

滑こくて宜けれど。段々年を老ほど。強くなつて。チャリ、と志て来るから怖れる。玉「啞ば  
 ツかり。ナニ髭がありますものか。そりやアお前様。アレ否な繁さんだ。大造な放屁を被成だ  
 子。ヲ、嗅さい。繁「ナニ大造らしい。自己の屁は其様に嗅くはねへ答だ。玉「ソノ人を。  
 嗅くない放屁がありますものか子。お前様はモウ、何でも手前勝手だヨ。繁「コレサそんなに  
 いじめるご自己ア泣ヨ。玉「ア、泣いてお見なさい。娼妓衆なんぞは泣くといふとお客が澤山ある  
 と言ますから。お前はんもお泣なら。墮落が澤山と出来ますだらうホ、ハ、ハ、繁「ハ、ハ、違へ  
 ねへまかし女の泣なア。他が嬉しがるけれど。野郎の泣じやアおさまらねへ。玉「ナニ左様でも  
 ありませんのサ。今夜お前様泣いてお見なさい。繁「ム、泣う、ドレ。玉「ア。アレ痛いヨ。何様  
 おしのだへ出し扱にサ。アイタ、ハ、ハ、繁「ナニ其様に痛くもあるめハ、ハ、玉「他の痛いの  
 なら三年も堪へるのかへ憎いヨウ。繁「まさか夫ほどに悪氣でもねへはナト好た同志が聞のうち  
 は。實に賢きも愚なるも。其所に差別はなきものにて。人生娛樂色情の。一事に止る故なるべ  
 し。かゝる所に下女が取次。聲と俱に入來るは。別人ならぬ磯次郎が。屏風の外へ胡座をかき  
 て。繁「ア、ヤレ、疲勞したと溜息をつけば。繁兵衛が「でへ遅く出かけたノ。何處へ往た  
 のだ。繁「據なき次第さ。といふも他じやアねへが。此間の晩。ソレ藤八がお松を連れて出か  
 けてから子。石浦へは往ずサ。尤藤八も夫つきり影も容も見せねへといふ譯で打捨て置れ



ず。其所で今朝ツから人を雇つて。東西南北を駆歩行。何様探しても一向知れやせん。鬻左様かそりやア騒動だ。それじやア藤八が虚言か子。磯左様見えるのサ玉ヲヤ怪しからねへ子。全躰藤八さんが。お松さんを彼是お言ひだといふ事は聞て居たけれど。まさかねエ旦那。其様な事もあるまいと思つて。アノ晩もお松さんを勧めて出したが悪いことを志たッけねへ。磯ナニそりやアお前の所爲でもなし詮方がねへ。まだ蓋が谷の方へ出した一群が歸りやせんが。所詮マア知れめへヨ。繁何にしる馬鹿な理屈だなア。そりやア老爺にも左様言つて。翌の朝は此方からも人を出しやせう。そりやア左様と。マア何處へ連れて往やしたらう。磯さん駕籠屋を糺して御覽じたか。磯エ、如才なく糺しやしたが。入が谷あたりで屋敷へ送たといひやす。繁それがお前手がしりじやアねへかト繁兵衛お玉も諸俱に胸を痛る計りなり

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引四編卷之中 終

第二十一回

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引四編卷之下

江戸ならば隅田川とも見給ふべし。こゝは鎌倉片瀬川。その往昔は大河にして。海より汐の入ければ。西行法師こゝへ來て。

浦ちかき砥上が原に駒どめてかた瀬の川の沙干をぞまつ

斯なん詠じられしとて。今も口碑に残りけり。夜も更けわたる子刻前。岸邊を通る荷足船。艦をキリ／＼と軋らして往か飯るか其中には。五六人圓居して。咄しながらに行船を。岸の方に聲高く。ヲ、イ／＼と呼かくる。聲はたしかに女とおぼしく。さらぬだに夜の船は。四邊も凄く物淋しきに。呼かけられて船中には。聲を静めて寂寥と。岸の方を借と見れば廿二日の月しろもやゝ山の端を離るゝゆゑ。その容形は定かならねど。若き女の只一個。賤しからざる風俗にて女「モシ／＼どうぞ船をこゝへ着てお呉被成ヨ。後生だから。どうぞお頼だヨト泣聲を出して呼ぶほどに。譯は知れねど不便なり。まづその容子を聞かんとて。やがて水棹をとり直し。岸へつけければ嬉しげなる。容子に其所へ走り來て。女「アノ私は子。此譯があつてこゝまで



逃出して。跡から追手のかゝるもの。どうぞお前方のお情で。船へ隠してお呉なさいといひつゝ、船へ乗んとするを。船頭はおし隔て、船「ム、左様かへ。そりやア筋によつたら隠しても上やうが。若も後で私等に。難儀が懸つちやア迷惑だから。マア其譯をお言なせへ女「アレサ些ども氣遣ひないヨ。譯はゆるりと言ますから。ア、斯して居る間も心が急ト手摺足摺歎くにぞ。了得に人に人鬼もあらぬ浮世や哀になり船「エ、そんなら乗んなせへ。間違があつたら其時よト港板を岸へさしつければ。女は歡び飛乗て女「チャ皆さん御免なさいト莞爾笑ふて其所へ坐し。胸なであるして後を見る。この時船の中なる人。月の光に透し見て「ヤお前はお松ぼらじやアねへかまつ「チャお前さんは八百屋の半六さんでございませす。こゝにお前さんがお在なさらうとは。夢にも知りませせん。誠に嬉しうございませすト歡ぶお松が顔を見て。半六いよゝ不審つ。坐お前どうも今時分其様な形をして。こゝへ来る筈はねへが。合點が往ねへ。モシ万一狐狸か。または河童の化たのじやアねへか。もし左様ならば此人數で。生捕にして觀物に出すがどうだ。ト口には言へど戰慄。肘をはつて白眼つめれば。傍の人もこの言葉に。去來といはれ組伏んど。肩をいからし肘をはる。この時お松は莞爾として松「アレ私きやア其様なもんじやアございませせん。成程お前様が左様被仰のは。些も無理のない所だが。實は這般でございませすト彼藤八に誘なはれて。砂浦へは往ずして。知らぬ宅舎へ伴なはれ。夫より後は簡様々々ど。一伍一什を細かに咄し。夫でモウ何様しても飯ませんから。宵からおもいれ酒を強ひて。寐かして置いて駈出しました。道は知れず眞暗で。何所を何様か呻吟て。來て見ればこの川端。道を聞たいにも人は居ず。夫にモウ怖くつて。どうしやうと思つた所。船が來たから先刻のやうに。呼かけたのでございませす。ト聞て漸く安堵はすれど。案に相違の藤八が。道にかけたる舉動を。心に憎くお松を憐み。半六は烟草をつけながら半「イヤモウ呆れ切れた奴だ。よし／＼夫にやア詮方がある。マア今夜は自己が宅へ同伴に往がい、松「寔に私しやア嬉しふございませすは。餘り不測だから。私の方でこそ。お前様が狐じやアないかと思ひましたヨホ、ハ、半「その筈さ。どうも此所で逢ふとは思はれねへから松「左様サ眞正に左様でございませす。然してお前様。今夜は何所へお出なさつたんでございませす半「今日は少し掛合があつて。大磯まで往た所が。大分遅くなつたから。是非泊つて往と言たけれど。扱他と違つて。アノ土地へ泊つて見ると。い、年をして遊びにでも往たかと思はれるのも難儀だから。出かけた所が。サア暗くつて一足も歩行ねへから。據なく乗合船で。この川筋へ出たのサ松「チャ左様でございませすかエト噺しながらに往舟の。こゝへ渡せし大橋の。下へ來りしその折から。上では磯々人の音。喧嘩とおぼしく聲高に。嘗るわけは分解ねど。五六人の争ひなるべし。時に此方の欄干より。舟を目がけて飛下るは。定に人と船中には。駭き騒ぎて立かゝる。折しも船へばつた

々ど。一伍一什を細かに咄し。夫でモウ何様しても飯ませんから。宵からおもいれ酒を強ひて。寐かして置いて駈出しました。道は知れず眞暗で。何所を何様か呻吟て。來て見ればこの川端。道を聞たいにも人は居ず。夫にモウ怖くつて。どうしやうと思つた所。船が來たから先刻のやうに。呼かけたのでございませす。ト聞て漸く安堵はすれど。案に相違の藤八が。道にかけたる舉動を。心に憎くお松を憐み。半六は烟草をつけながら半「イヤモウ呆れ切れた奴だ。よし／＼夫にやア詮方がある。マア今夜は自己が宅へ同伴に往がい、松「寔に私しやア嬉しふございませすは。餘り不測だから。私の方でこそ。お前様が狐じやアないかと思ひましたヨホ、ハ、半「その筈さ。どうも此所で逢ふとは思はれねへから松「左様サ眞正に左様でございませす。然してお前様。今夜は何所へお出なさつたんでございませす半「今日は少し掛合があつて。大磯まで往た所が。大分遅くなつたから。是非泊つて往と言たけれど。扱他と違つて。アノ土地へ泊つて見ると。い、年をして遊びにでも往たかと思はれるのも難儀だから。出かけた所が。サア暗くつて一足も歩行ねへから。據なく乗合船で。この川筋へ出たのサ松「チャ左様でございませすかエト噺しながらに往舟の。こゝへ渡せし大橋の。下へ來りしその折から。上では磯々人の音。喧嘩とおぼしく聲高に。嘗るわけは分解ねど。五六人の争ひなるべし。時に此方の欄干より。舟を目がけて飛下るは。定に人と船中には。駭き騒ぎて立かゝる。折しも船へばつた



りど。落るを見れば人にはあらず。いと古びたる破葛籠を。繩もて緊と縛せしなり。船頭は船の方へ。とり除て橋を視上。船「チイあぶねへ何をするんだ。既の事にお客がたに。怪我をさせやうとした。馬鹿くしい。サアこゝへ来て持て往ト。橋の袂へ船さし寄せて。見れば其所なる人は右と左へ散々に。なりて一人も居らざれば。船頭はまた頬ふくらし。船「何だ船の中へ捨物をして。何處へか往たのか。つまらぬへ奴等だ。見りやア穢らしいこの葛籠。川へ打捨て仕舞がいゝ、トいひつゝ繩へ手をかけて。川へ投げんとしたるをり。懸けたる繩の弗と断れば。船「エ、べらぼうに重てへなア。まア此中は何だらうト元より壊し葛籠の蓋。とれば中より轉び出る。白装束なる女の容。髪さへ亂れて肩に垂れ雪より白き顔に。凄さもいと彌増りて。船中一回にわつと聲たて。其所へ其儘平伏て。心の中に南無阿彌陀。と唱ふる人さへある中に。お松はいと駭き怖れて袖にて顔をうち覆ひ。嗟といふて俯したり。その中に半六は頭を擡げてよく視るに容形こそ換りけれ。紛ふ方なきお千代が面貌。渠は一昨日死んだ筈。こゝへ來らんと道理はなけれど。人は死期の念にひかれて。惑ひをなすと聞なれば。因來宛を生前に。明す事さへならずして。竟に病に辭世たれば。其一念の妄執にて。われに怨みをいはんため。假に容形を顯はしたる。ものにやあらんと思ふにぞ。猶ほ怖ろしさも彌増せど。心弱くては協ふまじ。と懷より出す水晶の。珠數の玉なす額の汗を。おし拭ひつゝ揉立て。南無や精靈頓生苦

提。この世は假の夢の宿。たどひ宛を身にうけて。明すよしなく終るども。心の眞は佛ぞ知らん。即身成佛うたがひなし。心遣さず冥土へゆけ。といひつゝ珠數を揉立てば。女は其所へ平伏て。わつと一聲高く泣しが。稍あつて顔をあげ。虫に等一聲を出して「チヤ貴君は半六さま。何様してこゝにトすり寄を。よく見ればお千代に差はず。氣味悪けれど半六は。倍と心を落着て半「ハテどうも合點が往ぬ。其方は一昨日死んだ筈。既に昨日お寺へ遣て。茶毘の煙となつた身が。こゝへ來やう譯がない。迷つて出たかトいふをきゝち「左様思し召も御尤。これには段々容子があつて。私は蘇生り。こゝへ參つたその譯を。お聞なされて下さりまし。ト夫より焼場の一伍一什。傳吉坊主が悪念發起し。私を連て八百屋へゆき。お玉が始末巧のほどを。お前様へお咄し申し。兩個が證明を立てて。葛籠へ入れて吾儕を脊負。こゝへ來たとき往來の。人に葛籠を咎められ。争そふはづみに落された。川には丁度船が在。またその船にお前さんが。乗つてお在被成とは。願ふてもない私の僥倖。まかし肝心の傳吉坊主が。何處へか往つて仕舞つたら。矢張り證明が立ますまいか。トまたも慕るゝ野の菊の。霜夜に弱る風情あり。始終の咄を聞よりも。お松は忽地顔を上。松「チヤお千代さん。お前さんは。蘇生つてお在のかへ。今お咄しの様子では。何から何までお玉さんが。彼様な艶しい顔をして。鬼より怖い心意氣。左様とは知らず。今の今まで。吾儕をはじめお前さんが悪いと斗り思つて居ました。



左様いふ譯なら是から直に。アノお玉を退出して。お千代さんを元の通り。子へ半六さまといふを聞く半六はうち點頭て半「ヤレ」／＼まア今夜の様に。思ひ寄りねへ事ばかり有事もねへものだ。自己アモウ兩回ながら。生膽を抜けたぜ。ア、漸々正氣になつた。まかし自己は逃れぬわけだが。夫に就ちやア乗組の衆や。船頭衆にも肝を潰させ。寔に氣の毒千万ナト詫ればこゝに乗組し。人も曩よりお千代が咄し。またはお松が身のうへの事さへ側で聞ければ。その本末は詳に知らぬぞ。かゝる不測の再會を。いと怪しくも思ひけり。兎かくするほどに。船もはや着ければ。みな／＼こゝより陸へ上りて。おのが隨意に道を急ぐに。半六は二人の女を。船より上て歩行せしに。お千代は長き病ひの上にて殊に昨夜蘇生と。そのまゝ葛籠に氣を凝し。或ひは高きより落されて。氣力ますます衰へ果て。歩行がたく見えしかど今は夜更けて駕籠さへも。自在には頼みがたく。お松はこれを種々に勞りて。やう／＼と二三町も歩行せしが。固來白き衣類にて人の怪しむ事もあらんと。上着をぬぎてお千代に着せつゝ。手を曳き腰を押などして。又二三町來にけるが。こゝに半六が往昔より心易くする人あれば。これ僥倖と門を敲き。如此々々のよしを粗かたりて。お千代をこゝに預けおき。お松をつれて家に歸り。繁兵衛やお玉には。お千代が事は曾ていはず。たゞお松が身の上のみ。在しがまゝに語りければ。みな／＼大きに呆れ果て。藤八を憎みけり。かくて其夜も明ければ。半六は遠しく。お千代を頼

第二十二回

みし家へ往て容子を見るに變る事なし。まづ少しは安堵して。やがて近邊なる醫師をたのみ。養生の藥を貰ひ。四五日も立ほどに。氣力付て食事すすみ。心も定になりけり。

鹿を追ふ獵師は山を見ずと。むかしの喩にいふ通り。お玉は這家へ乗込んで。世間の事には心もつかず。たゞ己が身の榮耀のみ。日を超月を経るまゝに。驕にのみ長じつゝ。人の妻たる道をも知らねば。その自墮落は止どきなく。奉公人をば犬猫に。齊一思ひて憐みなく。鼻に仕へる術さへ知らず。されば始めこそ半兵衛も色香にひかれて何事も。悪くは見えぬ慾眼にも。今はやう／＼疎ましく。聊か後悔のおもむきは。あれども今更詮方なければ。まづ其儘におきけるが。此ほどお松は砂浦へは往ずとて。磯次郎は氣を揉て。人を雇ひ諸方を。探す折から父半六が。お松を連れて歸り來つ。今宵の始終をこま／＼と。晰せば人々歡びて。夜も更けたれば翌朝。磯次郎へ知らせければ。是も早速きたりつゝ。まづその無事を歡びて。半六に一禮なし。亦藤八が人面獸心の行ひを憎みて。直に人を立て砂浦の隠居次郎八にもその由を告げ知らするに。次郎八も以の外憤りて。藤八を捕へて詮方ありと。それより所々を探しけれど。渠もその夜酔伏たる間に。お松は何日か逃出したれば。さてこそ店へ知れたり。と思ふものから其儘に



透電なしてその後。更に行方知れずとぞん。斯て四五日を經にければ。お千代は早速に全快して。髪あげも志にけれど。半六は猶この事を。隠して半兵衛お玉に告ず。またお松にも言合めて。更にこれを知らせねば。お玉は夢にも志るよしなく。いよく我儘に募りけり。さて半六は心のうちに。種々と工夫なし。お千代が咄しの趣では傳吉が来るべし。然したならば當下にはど。俟どもいまだ渠は來ず。お千代もはや全快なりしかば。便々としても置れず。迎も追出すお玉が事。一日おけば一日だけ。身上減す放蕩女。何時までかその儘おかん。と胸を定めてお松を呼び。密にその段取を呑込せれば。お松も船にてお千代が嘶しを。聞ばきくとしてお玉が計較。女に似合はぬ不敵の仕方。と今までこそは萬の事。何にかぎらず相談對身に。なつてお玉も。八百屋へ入れしが。この時お玉を疎み果て。面を看るさへいと憎く。思ふ折から半六より斯々してと頼まれしは。僥倖なりと思ひつゝ。一日お松が來て見れば。お玉は繁兵衛と對座にて。例のごとく酒飲ながら玉「チャお松さんかよくお在だ。お前この頃はきついお見限りで。一向お在でない子。松「アイ是でも種々用があるから。其様に遊んでばかりやア。居られない。玉「フン人の女房になるにやア。左様ならなくつちやア往ねへかノウ。ア、自己ア否だぞ松「そりやアお前なんぞは繁兵衛さんの様な優しい人を良人に持て居るから。夫でも宜らうが。何様して世間の並は左様は往ないヨ。玉「アウ左様か。夫じやア私は。餘ほど後生が宜のかノウ松「宜

ぐれへか。お前の様な悪黨が。一生斯して居られれば。皇天さまは。ないと同じ事たは玉「チャお松さん可笑いふ子。私が何が悪黨だ。其様なことを戯談にも言つてお呉でない。氣障な松「ナニ戯談なものか。また悪黨にやア違ひないものヲ玉「アレサお松さん。竟にない今日に限つて。其様に悪く言なア。何様いふ譯だ。何ぞ悪い事があるなら。是が悪いと明に言てお聞せな。私きやア他さまに。其様に悪くいはれるやうな覺はないヨ。テエ繁兵衛さん「何様だか自己にやア知れぬへ。まア何でも男を迷はせる事が上手だから。どんな悪業を仕たか。それも知れぬへのス玉「アレお前はんまでが。其様に悪くお言じやア。餘まりお情ない子松「お前左様お言ひなら。私が言て聞せるから。マアよくお聞ヨ玉「ア、聞なくつてサ。さアお言松「お前マア。なんぼ繁兵衛さんに惚て。お内室さんになりたいたいと云て。傳何とかいふ。髪結とやらを頼んで。お千代さんに有もしない悪名をつけて繁兵衛さんに去らせなくつても。何様か仕様もありさうなものだ子。お千代さんは夫を氣病にして。死ぬほどに煩ふのは。どんなに切なからうと思ひだ。ト吾より他に知る人はあらじと巧みし謀計を。如何にしてかは聞出しけん。と胸にギツクリ答へても。有繋は悪嬢色にも見せず。玉「チャ何だかと思つたら馬鹿らしい。私がお其様などを知るものか子。よしてもお呉お松さん。不羨ながらこのお玉は其様な者じやアないヨ。成ほどお千代さんが淫奔をして。出される間もなく。こゝへ這入ッたから。其様な悪口を



いふ人も。あるかア知らないが。夫を真にうけて彼是いはれちやア。迷惑な事た子。コレこゝに肝心の。繁さんもお出だけれど。子へ繁さん。お千代さんが傳吉と。淫事をおしに違ひは有ますまい子。繁「左様サありやア違へぬ。傳吉が自身と名乗て出た位だものヲ玉「ソラお覽。そしてお松さんお前そんな事を。誰からお聞のだ。松「アイそりやア脇から聞たのサ。ナニ他を聞糺すにやア及ばないから。よウくお前のこゝろに聞てお覽な。知らないとお言なら。大かた忘れたんだらう。玉「お前もまた不入とを。異にいふのだ子なんぞまた證據でもあるのかへ繁「モウ宜じやアねへか。お千代は死ぬし。傳吉は不居。今争そつた所が。詮方がねへ松「アレ繁さん。お前まだお玉さんに。妖されてお出だ子何も私が憎まれ口に。此様な事を言たくはないが聞ば聞とつて。涙が溢れるやうな譯だから。モウこれッきり交ないとお言でも。構はない氣になつて言ふから。左様お思ひなさい。人に欲のないものはないけれど。人の命にも拘はるほどの事は仕度ないものサ。玉「モシお松さんお詞の中だが。人の命に拘はるほどの事を私が仕たとお言ひのかへ松「アイ左様サ。玉「そりやア何の事たへ。こゝろ易だていお言ひかアあらないがわちきやア人殺しの科人にされちやア。其分にやアされないヨ。何日私が人を殺したエ。サアお言。サア言てお聞かせ。ト膝立直して眼に角たて。掴みつかんとする威勢。折から次の間に聲高く。その證據人は此所に居やすト。いひつゝ明る障子の音。ぬつくと立たる。毬栗天窓は。

形こそ換れ髪結傳吉。有繫のお玉も恟として。言句も出ず。守り詰る眼前へ。傳吉は畏こまり傳「お玉さんお久しぶりだ子。先頃お前に頼まれて。繁兵衛さんを甘く騙り。お千代さんを追出させた。その御褒美の約束ちがひ。青砥の官人へ吹込で。逐拂つたも知つて居るぜ。それからどうも詮方なしの。青道心が身の上は。墓が谷の穩亡と。なり下つたもお前故だ。夫からお千代さんの一件は。三編の下の巻と。四編の中の巻に委しくあるから。夫を看なせへ。さて吾儕も葛籠をば。てつきり川へ落したと。思つたゆゑにヤレ／＼なア。折角蘇生つたお千代さんを又川へ落すといふも。よく／＼の定業だ。まかし是じやアまた片便で。詮方がねへとは思つたが。焼べき佛を擔ぎ出しちやア。モウ焼場へも歸られず。毎晩こゝらを徘徊で。様子によつたらモウ一へへ悪玉で去け込で。金を借るか夫でなかア。突出されやうと腹を据ても。サテ一旦自己の身の。悪事をよくも思ひかへして。善心に戻つたものを。今さらまた舊の悪形に。立けへるも耻かしさ。何様か宜工夫がと思ふ所へ半六さんに。お目にかゝつて静動をきけば。お千代さんも達者だ。聞ちやア此方の心も岩てこ。其時船に居あはせて。一什の話説を聞てからは。お前に愛想が盡たといふ。お松さんを證據にたて。その黑白明に参りやした。僅な金に目がくれて。悪事をしたお蔭。人並でねへこの身過。皇天さまは怖ろしいト兩手を組ば繁兵衛は。聞て悔り身を直し繁「今の咄で聞て見りやア。お千代に全く科はねへのを。夫ならお玉が



悪巧で、眞アイ密夫だと言たのも。金が欲さの作言サ。トいふにお玉は急立て玉「コウ傳吉さん。なんぼお前の身がつまらなく成つたと言て。他に難をつけて自己ばかり。宜子にならうとまなさんな。お前方が二人三人。言合して私を突落さうと仕たつても。ヘンこのお玉さんは其様な手で。いくのじやアございやせんト落着はらつた面魂。容形に似合ぬ大膽を。蔭で聞身の腹立しく。間の襖をさらりと明て。お千代が手を引立出る半六。お玉を青眼と睨つけて半「コレお玉そのやうに。口伶俐いひわけしても。モウ協はぬはへ無言で居おれ化の皮は顯はれたはへ。それといふも繁兵衛めが。阿房から發たこと。親でも見でも片手打の捌はならぬ天下の大。サア二人とも出て行おれト尖どき怒りに二人は仰天。お千代は鼻にとり縋りちよ「夫では吾儕が濟ませぬ。なんぼ此身の證明が立ても。良人を追出さしたと言はれてはト詫れど可ぬ老の。一徹。身の誤りにお玉は固來。繁兵衛も詮方なく。俱に立出る門の口。五足六足通りゆく。此方に往む一人の漢士。すつくと其所へたち出て「ヤアお玉遅い」。其方が悪事の段々を。具に聞て肝が潰れ。疎み果た人畜生。半六さんの下知をうけ。其方の慈母が隠居所も。今追立て店をあけた。サア同伴に。何所へでも。足のむく方へ行きヤアがれト突飛されて跟々と。お玉に携る母親と。面見合せて互に愁傷。されど今まで種々に。巧みしわけの顯はれては。有繋に白きを黒きといひ。横紙破りのお玉母子も。今はなか〜言句も出ず繁兵衛はこれを見て繁ヤ

お前は磯さんかへ磯「ナイ吾儕だ。サア是れからお前の腹を。聞た上で詮方がある。お玉母子と同伴に往て。切ない暮しも好た同志。とやる積りなら夫でよし。尙も先非を改めて。親父へ詫をする氣なら。及ばずながら遣て見やうト問詰られて。繁「實はお玉が悪巧みは。今夜はじめて聞たけれど。日頃の身持にこの節は。弗々愛想が盡ちヤア居るが。出さうと言たら彼是と。蹊跟からうと一日送りに。まて居た所が今夜の話で。いよ〜呆れて色戀も。一向さめて仕舞やした成らう事なら親父への。託をお頼み申たい磯「夫にいよ〜違ひがなくば。ならぬへまでも骨を折て。詫言をして見やせうト。繁兵衛を連れて引かへす。お玉母子も己が身の。悪事おもへば今更に。袖に涙の露しぐれ。あても渚の千鳥足。あるべの方へ迎り着しが。日頃の行状を憎むものから。誰あつて世話をするものもなく。後は袖乞して果たりとかや。倍も磯次郎は繁兵衛をひき連て。八百屋へ來り。親父半六にさま〜詫れど。半六は猶承知せず。種々むづかしくいふ折から。お松お千代も俱々に。歎きて詫言したりしかば。夫に免じて漸々許し。さて此由を地内なる。姑の沖瀬にも知らせければ。沖瀬はお千代が蘇生を聞て歡ぶこと限うなし。かくて繁兵衛お千代が中は。以前にまして睦ましく。親半六によく事へて。孝行をなしにける。かくて後繁兵衛は。磯次郎お松が志を感じ。砂浦の隠居へ咄し聞えて。頼てお松をば磯次郎と。改めて婚姻さし。兩家ます〜榮えける。然ればお千代は一旦の。恨みはありといひなが



ら。善心に立歸りし。傳吉坊主が功にて。その赤心も顯はれて。再び妹脊の縁をさへ。結びどめたる事なれば。と金子を與へたりければ。傳吉の鈍空は。歡びてうけ收め。これを長途の路用として。諸國行脚に出にけるが。年數多經てかへり來つ。佐々女が谷の片邊に。草莽をかまへつゝ。生涯行ひすましける

盛衰 榮枯 娘太平記操之早引四編卷之下 大尾

仇競今様櫛初編卷之上

紀山人戲作

第一回 ほころぶ花

そもあし引の山鳥は。雌雄眠床を一にせず。山の尾上を隔てて寐るが。曉天の日に映じて。雄の初尾に移れる影を。雌のやうにおもふより。啼ことあるを人よんで。をろのかみといへるなり。夫とおもひ合する奇話あり今は六百餘年の昔。右幕下柳都に治國要を開きて萬民歸伏したる頃ほひ是も鎌倉雪の下尾池小路といふ處に。家主の郷兵衛といふものあり。別て貧しくはあらねども。萬おもふにまかせざるが。先の郷兵衛は實躰なる性にして。人にも用ひられたるが。男子一人ありて身まかり。今の郷兵衛は。其跡へ入夫せしものにして。原來はよしある武家の浪人なり。物足らぬ喜しをも。苦勞にはせざれども。天性心ざまよからぬ人にて。下をあなどり富る人には媚へつらひて。おのれが榮利のみを事とせしが。今の主人には男子一人出來たり。先代の倅なる。惣領は梅太郎と呼れ。器量利發よの常ならず。弟は菊次郎とて。是は少しく心ばへ父に似て横しまをのみ見ならひけり。まかるに郷兵衛の妻ありのが爲に兄なりける。比企が谷の金澤屋瀬兵衛といふ者の一人の娘ありしが。天性美麗にして。花々羞るばかり



なるに。そののみならずこゝろはへやさしく。幼き時より兩親に。孝行に仕へしかば。父母の寵愛かぎりなかりしも。瀬兵衛は前に病死しけるに。その妻いたくなげき悲しむのあまり。終にわづらひつきて。これもつゞいて身まかりければ。跡を相續すべきものは女子といひそのとき娘お春僅に十歳のことなるゆゑ。その後見はゆきといかぬより。伯母の事なれば。ありのは郷兵衛にかたらふて。金澤屋の跡諸事とり片づけて。不用なる品はみな賣拂ひ。その料は人に預けて。これはおはるが身に付べきものとし。あるひは兩親の菩提のために寺へ茶湯料なんどそれ／＼に納め。終におはるを引とりて。わが子のごとくにいとほしみてそだて養ひけり。然るに月日のあしはやく。梅太郎は今年十九歳。菊次郎は十七歳。お春は十五歳になりぬ。梅太郎はそのうまれ顔ばせ美しく。手跡もよくし歌の道に心をよせ。よろづすなほなる性にして。只實情に家へののみまりて。兩親に孝行をつくし。入とまじらひ遊ぶ事を樂とせず。又お春も直なる生れといひ。利發ものなれば伯父伯母を實の兩親のごとくに孝行を盡し。且容顔はたぐひなき美人にて。鎌倉廣しとはいへども。在斯美目かたちうつくしき。女は又外にはあるまじと。なべて評判たたるより。近所の人もよき一對の夫婦ごらんらんと。迭にいひけるより彼等が異名を懸けては。尾池小路の京離とのみ呼びけるとぞ。その事誰いふとなく菊次郎は聞て。かねてお春をわがものにせんと。子供心の中よりも。おもひ居たる事なれば。まきりに妬くおもひけ

り。梅太郎もかねてより。このお春に心あれば。何とぞして折もあらばと。心のうちにまたふのみにて。人目の關の繁きといひ。いまだ年わかつて。何かはづかしきやうなれば。いひよるまほも夏虫の。胸のみこがし居たりけるに。お春も梅太郎が美しき男ぶりに。こゝろときめき。おのづから。なま情のつくころなれば。おぼえし手利の縫物も。いつしか手にさへ束の間も。小袖の妻とよばれなば。嬉しからんと娘心に。仕立おろしの戀衣。針のいとにむすぼるゝ。おもひに啣ありさまなり。ある日郷兵衛夫婦は。長谷の境内にて。大間々光榮寺の百觀音を開帳あると聞。參詣に出ゆきしが。留守にて梅太郎は一人便室に本を讀ていたりしが。折ふし下女は二階にて。髪を結ふて居るに。菊次郎は毎日宿には寄つかず。遊び歩行ゆゑ。よきをりなりとお春は養花を入れて梅太郎のそばへ持ゆきはる「モシお養ばなを入れました。めしあがりませんか。梅「アイそれはありがたい。御念のいつたはる「アノ慇懃らしい。あなたは誠に物がたいねへ。どうぞわたしを實の妹のやうにおもつてくださいまし。梅「わたしやア妹のやうにやアおもひやせんばる「なぜでございます。お氣に入らぬ事があれば。どんなにもお阿なすつてくださいまし。お氣に入り過て居るからさばる「おやうだんばかり梅「ナニ實に妹とはおもはねへ。女房のやうに志てへとおもふが。それもこつちでばかりかたおもひで。あまへのいやなは志れてある事とおもふから。けふはあすはとおもつても。つい日へは出さないのさばる「あの子。おば







つして風流を好むより。慾を知らぬ馬鹿ものなりといひて。己が横道の心にくらべて。弟の菊次郎が悪者交遊ばかりするを。至極心になひて相續人と定めんとおもふより。梅太郎をば。かゝる手跡もよく學問を好むものゆゑに。相應の人つきあひもなる事なれば。一廉の物持なる大商人か。武家なれば高祿の家へも養子につかはさば。二つながら全き良計なりとて。そのよしをより／＼妻にも語りしかば。直きころのありの聞て。日ごろより弟は氣に入らぬゆゑ。弟を外へつかはすこそ道といひ。兄もずいぶん我世とならば。身上持を知らぬともあるまじとて。この事をいさめしを。左右用ひざる容子なりしが。そのうちかゝることになりしより。母は志きりによるこびて。むづかしき父のかたは程よくとりなして。終に近處の人までも。言號にてもありたるやうに。思はする程にはなりにけり。梅太郎はもちろん。お春もはや表向晴ての夫婦のごとくにおもひ。兩個とも心うれしく。至極中むつましく。出生の子を蝶よ花よといつくしみ。いよく孝行おこたりなくくらしけるが。左右郷兵衛は歡ばざりけるとぞ

第二回 花すり衣

扱も梅春の兩人は。おもひ／＼し中なれば。そのうれしき譬へがたく。生れたる兒をば柳之助と號けて。掌の玉といつくしみけるが。こゝに一條の悲み出來たり。そのよしを尋るに。琵琶

小路といふところに。金貨を渡世とする。萩原屋村次といふものあり。諸大家へ仕送りし。且は廣く金貨。數多の地面を所持して。家豊にぞくらしけり。郷兵衛の家主せる地面も。すなはちこの萩原屋の持なり。志かるに村次に一人の女子あり。名をお秋とよべり。いつぞやより梅太郎を見そいて深く戀こがれ。人にはそれといひかねて。ひとり胸のみこがしつゝ。慕ふもいまだ十七の。花の苔みの枝ぶりは。又憎からぬ仇風俗。終には戀病にわづらひ着て。漸々に重るより。兩親はいたくなげきて。はじめのほどは癆症ならんとのみおもひたるが。針灸藥餌の驗もなく。大家の事ゆゑ出入の醫師は。何十人となく入りかはり。あるひは光明寺の修法の祈禱。赤城の神の張護符。中川原の金毘羅をはじめ。鶴が岡へは素足參りのお百度。江の島へは日參する人が十人ばかり。大家に媚へつらふ世の人情。毎日に見舞て容子を問ふほどに。そのころ名高き養生坊文聖と呼ぶ醫師ありて。弘く仁術を施す程に。やがて請じて治を乞ふに。養生坊まよ／＼案じて。是は果して癆症にあるへからず。恐らくは人を戀慕ふなどの切なるより。おもひ／＼とおのづから。在斯わづらひとはなりたるものなりと。いふに兩親は信じ兼しが。お秋の口ごろ氣に入りなる。侍女に志か／＼といひをしへて。ひそかにその事を問はせしかば。はづかしとてさすがにいひも出さざりしは。深窓にのみそだちたるゆゑにして。おぼこ心の理なりと。侍女は辭をつくして。いづれにもあなたのお氣に入りたる男もあらば。今



くらに「といふて。二のなき此お家。金の山を積でもおもらひなされてお躰さまになさるれば。成ぬ事はござりませぬ。それを匿しておひとり。お氣をもんでおわづらひなすつて。旦那さまや御新造さまに。御苦勞をおかけあそばすと。やつぱり御不孝になりますから。もしさやうの事があらば。日ごろ何事もおかくしなく。ひとかたならずお目をおかけあそばしてください。わたくしにばかりそつとおつ志やつてくださりまし。人には決して申さず。よい工夫をつけますほどに。詞をつくして問ひけるにぞ。お秋は重き病ひの床にも。今さらはづかしさにあげかぬる。まくらとかほにもみぢして。まばしいらへもせざりしがあき」とねや。よく問ふてたもつた。わしが病ひといふは實は「いはんとせしがさながらはづかしくいひかぬるさまにさては」とおねはなほとひかけされ「どなたでござりますあき」ナニ煩はそれゆゑでもあるまいよと「まアなんでもおつしやつてくださいましあき」そんなら人においひでないよと「なんの人に申ませう。モシ。本次郎さまでござりますかあき」いへこれ「アノ旗屋小路の基さんかへあき」いへこれ「竹さんではござりますまいあき」なんのばからしい。それよりお刀禰のは豊田町の信さんだらうこれ「ハイわたくしも申あげますから。マアあなたどうぞおつしやつて聞してくださいいましあき」あてゝお見よと「どうも志れませんが。まア名頭を假字で一字おつしやつてござらんじやいましなあき」かなで一字はむづかしいねと「なんのあなたたとへば言右衛門さまならば。この

字又。まアそういふ人はございませんけれども。箭布さまならば。やの字とあき「夫はわかつて居るが子。そんならアノ。む。の字か。うの字だよとこれ」エ。むの字と。うの字では。お二人ござりますのかへあき「なしのマアト」なみだ一人もひとりそのお方とはとても添事はなるまいとおもふから。いつそ死のふとおもひつめて居るよと「これ」おゆるしあそばせよ。そしてうの字とむの字とおつしやいますのはあき「な」にさ。うの字かむの字か假名の事を志らぬからよくわからないといふのさこれ「へエさやうならそのお方のお名はよく御ぞんじではござりませんのであき」何さそなたもわたしに似てわからないのふ。梅といふ字だよ。むめと書たも。うめと書たもあるからさこれ「さやうでござりますか。梅さんと申すは。チ、あの音羽屋の事でござりませうあき」なせへこれ「梅幸ではござりませんかあき」マア梅幸にいきうつしたよとこれ「わたくしにはわかりませんヨあき」ム、おまへは志らなからう。鎌くらに二人とない男ふりだといつてこれ「あの評判の雪の下尾池小路の人でございますか。それならついぞ見ました事はございませんが。よく人の噂を申す。京びなどいふ畧名の人。チ、ほんに夫なれば御もつともでござりませうあき」アノ内へたび／＼来る。郷兵衛さんの息子ではなとこれ「エ引。さやうでござりますか。チヤ／＼あんな九大夫のやうな爺さんの子に。どうしてそのやうな美男が生れたものでございませうトおされはこゝをしりぞきて。委細のわけをつふさにかたりしかば。村次夫婦は娘の病ひの根が



知れて大きによろこび。これより急ぎ雪の下へ使を遣るに。郷兵衛は地代の引負の未進が數多  
 其外にも借用あれば。それを勘定せよとの使なるかど。ひやくもので琵琶小路へいそぎゆき。  
 村次に對面すれば。案の外に酒さかななど出して大きにもてなしけるに。郷兵衛はふる／＼も  
 のにて。さてだん／＼御借用が不義理になりましてとあたまをかきいていひ出すに。村次はうち  
 ゑみて。何さ／＼その事はお返しなさるにはおまばぬ。いかやうでもようござるといふに。な  
 ほさら合點ゆかざりしが。村次はふた／＼郷兵衛にむかひ。借今日わざ／＼招きしは。外の事  
 にもあらず。親の口より言憎けれど。娘の重病は其許の子息梅太郎に戀こがれての事なり。助  
 るとおもひて聲に呉てたまはらば。命の親の貴さまの事。なか／＼あたには思はじと。理りせ  
 めて涙ながらにたのみけり。

仇競今様櫛初編卷之上終

仇競今様櫛初編卷之中

第三回 さよあらし

當時村次が妻のお宇津も。一間を出て郷兵衛に向ひうつ／＼今内の人から申ましたらうが。扱外の  
 事どちがひ。親の身ではおはなしもいたしにくいくらゐの事なれども。それといふもわが子の  
 可愛さ。その様子をば兼てから。かくしてばかり居ましたを。やう／＼の事で女どもに聞せま  
 したが。梅太郎どのはおまへの惣領息子。お大事の跡取ゆゑ。なか／＼貰ふ事もならず。又娘  
 はひとり子の事なれば。とても添ふ事はならぬほどに。おもひ切れと申てきかそふかどぞんじ  
 ました。漸々にごわる重病。今ははや燈火の。消るを待やうなものなれば。それにそんな事  
 を申て阿ては。すぐさま死は定の事ぞやと。女どもが申ますゆゑ。ア、かわいそふに。あれ程  
 迄にも戀またふものかど。また親の愚痴ではほんに一時も夫婦にして。そはせたならばどのや  
 うに。歡ぶであらうとぞんじますゆゑ。それでまことに無理な事ながら。どうぞ聞といけてく  
 ださらばト。ほんぶんきいて郷へはもどより。せがれをこの大家へ聲入させん事を大きによろこび。一  
 あうの思案にもおよばず。早速にのみとみておなから。郷それは何よりお安い事と申すうちに



も。却てわたくしからこそ。お願ひ申たいくらゐのこと。冥加至極もござりませぬ。なるほど梅太郎は物領でわたくし方の相續人でござりますけれども。なんのそんな事を申て居られます處ではござりませぬ。ことに舍弟の菊次郎と申すがござりますれば。さしつかへもなし随分きつどさし上ませう。トいふに村次夫婦は大ききよるこが郷斯て郷兵衛はいそぎわが家へ立かへりてかきこみたか。が「サア、早く御神酒を上る。コレみなこゝへ來い。マア、歡べ。こりやなせ爛をはやくつけないぞ。目出たい、ト小をざりしてわめきたつるにたりふし梅太郎菊次郎の「チャ、あなたまた御酒に酔ておかへりか。郷酔てもかへるし。まア祝ひ事がある酒の爛をつけさせやりの「アイ今お春ははつを連れて湯にまゐりましたから。わたくしがトわけはあられどおみきをあげ酒の扱その容子を尋けるに郷へはに、郷「さてまづ歡べ。あの大家の萩原屋で。是非悴の梅太郎めを。婿養子にもらひたいこの事。これに越す僥倖な事があらうか。そこで約束をとりきはめてかへつたトてがらしくもの「それはまア、おもひもよらぬ。殊に物領を外へつかはすと云ふ事は。あまりにおりのはびつくり。御了簡またあのお春と兼てからおもひあふた中をむごたらしく引わけると申すはそれはどふもむたいな事。第一柳之助二人中へても不便なり又先方も大家で。人に志られた大金持なれども。御夫婦ながら人の評判のわるい人たちそれは左も右も。なぜ又見るかげもない此方など、縁ぐみをまたいといふのは。郷「ム、夫はおれが人徳といふものだ内ではこなたをはじ

め。やかましいのヤレ世話好だのといふが。おれが徳満々たるものだによつて因みたがつてこの通り。イヤはやうるさい事さ。時にさめた最ちつと熱爛にさつしやいおりの「ハイト酒のかんをさやうならばなぜ弟の菊次郎をつかはさる筈にはなさいませぬ。郷「ばかな事をいはつせへ。あれは此方の相續人だ。ア、物領の馬鹿野郎めは。本ばかり讀で居て。第一慾を知らねへけれど萩原屋なんどの聲には随ぶんいゝのさりの「ム、こまつたものだ。あなたのお目には。ア、弟の大不孝もの、悪ものがお氣に入つて。まアそれはそれにもしろ。あれ程に夫婦のつもりになつて居るお春をば。郷「これさ、貴さまはものゝわからぬといふものだににもかくれてちゝくりあつたくらいの中だ。おれが死した夫婦といふものではないはりの「それはあなた御無理といふもの。あれ程わたくしが申たらば。すこしおもふ旨があるから。うつちやつて置とおつ志やつて。すでに身もちになつて。その子を取あげる時。あなた手つたひまでなすつたじやアござりませんか。郷「やかましいはへ。女さかしく牛賣そこなふとは手めへの事だは。エ、四五のいふなりの「そして縁談といふものは。第一が當人の心底。それにマア當人にもなんともいはずに取きはめるといふは。郷「コレム、わからぬへぐど、ぬかすな。親しいふ事を背く子があるものか。りの「イエ、そうおつ志やつても縁談ばかりは。郷「エ、七めんどうな事をぬかすか。そんなら言て聞そふまづおはるとあいつがちゝくり合を。そのまゝ捨ておいたのは日外瀬



兵衛が死んで。金澤屋の家財を引うけて賣拂つた金をば。あの子の身に付事として外へあづけて置たはよし加志かるところが連々都合があるいによつて。其金をばちつとづゝ受取て。去々年までにみんな遣ひきつたのだけは。それをばかくして居たのは。やかましいからの事だ。處で外へかた付るには。是非身のまはり手道具にした餘りは持せてやらなけりやアならぬ。そこでも。今あのごとくして置いて。外へ片づけやうとしても。一旦梅太郎の女房になつた女が離縁されたのだと外は名がつかぬへは。そこで兄の野郎作めはよそへ婿にやつて志まひ。お春は菊次郎が女房にづる。べつたり孫はそのまゝ孫にしても。是子細なき上分別ト。のがたりにおりのばまは。と興さめたるあまりことばも出ず。夫の顔をうちまもりあるそのところへ。表にどや。あまたの人。つり臺にさまゝの進物樽さかなをとりそろへて内に入り使の者上下を着し。志かつべらしく口上をのべて。今日幸ひ吉辰なれば直さま結納を送り申すゆゑ。幾ひさしく目出たく御入納くだされて。明後日は最上吉日なれば。婿入の祝言の用意いたし相待をり申すこの事なるに。郷兵衛はぞくく。よろこび。結納の志なく。目出たく受納て。いよく。明後日善はいそげと申すなれば。相違なくつかはし申べしと。對談してぞ歸しけり。在斯ければ妻のありのは今更に詮すべなくも。恨み泣いたいひとり。泪汲出すばかりなりこの折からにお春は湯よ

りかへりてさき程よりのやうすを立聞。泣よりほかのことぞなきやがて梅太郎も。用むき志まひて歸り来るに。郷兵衛は。郷「これ。梅太郎こゝへはいれ。梅「ハイモシこの樽肴は何でござります。郷「ヲ、夫はそちが身の出世の祝事。目出たい結納よ。コレ其方を琵琶小路の萩原屋へ御に遣るがうれしいかと。耶はあきればてまげしいらへもせざりし。梅「そりやモシあなた。憚りながら御無理と申すものでござります。さほどの事を當人のわたくしへは。なぜ又おつしやらずに取きはめをばなされました。親子と申ても。最早十五歳以上になれば。一人前の男と申すもの。夫にあなた親じやと申て。御自分の了簡で。一應いひ聞せもせず。縁談をきはめると申事がまアござりませうか。それは左もあれわたくしにはお春と申す。郷「コリヤ。手まへもまたお春お春と。あれはひつけう内證事。親の免した夫婦でない。まづ密通の不義の沙汰だ。梅「これは怪からぬ。すでに眉こそおとさねども。齒黒もつけさせその上に柳之助といふ。郷「これは早い道理が。女房でないといふ證據は。まづ誰が媒人で。いつ取結びの盃をして。いつ誰が謠ひをうたひました。手まへなどはほんの懷子で。世間のやうすも知らず。番處つめる事也。へもたびく。出勤して見なくては。理といふものは分らぬはトいふおぼはしやうのかけ。はる「そりやあなた御無たいでござります。おかしさんもあなたも御承知で同床寐を。郷「コリヤ馬鹿ものめが。いつ免許たといつた。證人はたれた。うぬ我儘をぬかすと追ひ出してままふぞト。いなきど



ほるに梅太郎も 父の一徹といひをぎはらやへつらふて。最早とりきはめしたるとなれば。今さら  
 ら變改はなるまじければ。左右いふは不孝なり。といふてお春を見すてがたく。柳之助もふび  
 んなり。どやせまじかくやせまじと。途方にくれて案じわびしが。よくくおもへば大恩ある  
 親の事。又實の子の菊次郎に。家督相續させるこそ。老ての後も心安からん。親には一命も惜  
 むべきにあらじと心なしかさ梅「いかにあなたのおつしやること。委細承知いたしました。梅」そ  
 んならきつと背ぬか 梅「かしまりましたトこびてきふにふがほつくり 郷ヲ、く出来た。そ  
 れでこそ繼子根性でなく。ほんの親孝行と申すもの。コレおりの。サアく喜べくトさみて又  
 もやすはい その儘そこころびぬのふじの山をや夢に見るらん。噫無慈悲なる強慾なり。梅太郎は  
 へおはる 梅「今度の事は最早取きはめもたたるものなれば。左に右背く事ならず。殊にそなたは  
 知るまいが。萩原屋には大まいの借金。なかく急には返済もなるまいと。案じて居るくらゐ  
 の事。今回の縁談を不承知といへば。先方は定めて噂にも聞たであらうが尋常ならぬ難題者。  
 なにかむづかしくいふは必定。まて見ると大切など、さまの御難儀のみか。今の株にも離れて  
 ままはねばならぬやうにもなりゆくこと。じやに因て一旦承知して行はゆかうが。さぞ其方は  
 恨めしい男とおもやらうが。心の中はいつかな。たどへそなたに半年や一年別れてあても。決  
 てかはる事はなく。いかにもして先をば離別し。是非添とげるやうにまやうほどに。かならず

泣いて恨んでたもるな。このところをよく聞わけて。ア、なんとといふても實の親なれば。どふ  
 なりといひやうもあれど。義理ある父のいふ事ゆゑ虫をば殺して詞はそむかれぬト になほいらく  
 むるにおぼるはまとうしやくりあげなくよりほる「みな御もつともでござります。ちつともあなたをお恨み  
 申す心はござりません。又ど、さまの被仰事も。御無理ともぞんじませぬ。これもさだめて  
 據ないわけ。わたくしも實の両親があるならば。このやうなうき目は見まいもの。やつぱり  
 わたくしが身の因果。因縁のわるい事と。あきらめるより外はござりません。今のやうにおつ  
 しやるは。別れる今日の捨詞。たとへ一年が五年過ても。なんのそうはなりませぬわたくしは  
 どもかくも。一生あなたのお側に居られずば。生てはをりませぬ心にとりからおもひこんでを  
 りますゆゑ。どうぞ跡でもこの柳之助をば。御ふびんを掛てやつてくださりましたト わつこばかり  
 せば母のおりのもこへ來りていゝ どもに聲たてふしまづむは。あはれなりけるありさまなり  
 くになだめつなきつして三人が

第四回 あださくら

實に世のさまの儘ならぬ。ならひなればや古へより。憂世とこそは唱へたれ。斯てその翌日も。  
 泣あかしなき暮して。第三日めは吉辰ぞと。明日の別路今より惜みつ。一夜を千年万代ども。  
 後にはあふ瀬の有や無やの。關も人目もいとねども。容易に見ゆる幸もなからんなど。死ぬ



べきばかりかきくどく。お春が心察し入りて。涙はなんと千行の。瀧のしら系線かへし。別れはをしの一つがひ。うき寐の床になげきふす。明れば早天より萩原屋の迎ひの人。媒人何がしなんど。みなく相詰せき立れば。なごりはつきじ涙をば。隠すとすれどほに出る。尾花が袖を拂ひもあへぬ。露にまぼれば母親は。なきくいさめてしりの「コレお春。さぞまア無慈悲な親とらめしく思ふであらうが。どうもわしが爲には實の子でも。郷兵衛との爲には繼子ゆゑ。その義理があれば押してもいはれず。よんどころない今度のしぎ。まづ梅太郎が心さへかはらねば。またよい事もあらうほどに。一旦はつがふた詞にしやう事がない。たいちひさい子をなぐさめて。どかく時節を待がよい。此すゑはなほさらしに。わしもいよくいたはつて。世話をしでやるほどにトしんせつにいほるいほぎな。又志ばしとて肩衣の。脊中をなほし袴むし。まがつた親のどうよくしん。そのお志つけたしわざをも。いふ事ならぬ義理の縁梅太郎もまた見かへりおは梅「たつしやで是からはわしにかはり。御孝行申てくれトらふもなみだにこゑるいはなきわかれし。瀧「サアく何をして居るぞ。はやくトよびたてられせんかたなく立出酒を勧め菊次郎が大きによろこび。ともにとりもちでさんざめけば。すこしも早くと急がし立られ。いとまを告て立出しが。急ぎてつい脇差の小づかを取落せしとて。わが部屋へ入るに。お春もついで入り。又さめざめと泣出せば。この時お春にだかれし柳之助は父の梅太郎がかほを見て。にっこりとわらひた

るに。おもはず胸いつばいにふさがりて。つい取おとすその小づか。あやまつて梅太郎は足の大ゆびを切つたり。ちしほなかるればおはるはおごはる「チ、あぶない。ほんによく切れるお小づかでござりますトいひついで紙に「祝ひ事には血のついたものはおわるうござりませう。これはわたくしがいたいて。いづまでもあなたの像見とトほの小づかをとり是でよろしうござりませうト父のこゑになごりつきせぬ別れをも思ひ切りつゝ世の人に。未練といはれん耻しやと。梅太郎は立出て一おもひにぞ馳ゆきしは。不便なりける次第なり然るに萩原屋にては。上を下へとどさくさく。そりや婿さまのお着じやと。出逢ふ人々案内の人。立派を盡す婚儀の大禮蓬萊の島臺に種々のかざり付。見れども見えぬ梅太郎は心馬にあらざれば。只お春が胸のうち。左右にあらんじ煩ふて。千秋萬歳の祝言の盃も。忌々しとのみおもふなるべし。花嫁は病中の事なれども。戀舞の梅太郎を。わがものとせんと極まりてより。急に心清しくなりて。床をはなれ髪をかきあげたるに。美しき女ぶりお春にも劣るまじく。梅太郎も心にうき事あらざりせば。この新枕のいかばかり楽しからんに。お春のなげき心にわすれず。顔には出さぬど胸になく。かなしさあらずもてはやさるゝは。なほひとしほにうき涙おもしろからずうちふしたるが。お秋は露あられれば。おもひそめたる時の事より。わづらひ着たるその容子。逢れずは死ぬべしと。覺悟志たる事までも。残りなくものがたりしたれども。梅太郎の耳へは入らず。よきほど



に挨拶しつゝ。只天の明るをのみ今や〜と待わびて。東の志らむ比をひに起出で。近ごろ八幡宮へ日参を致すなれば。けふも参たし。いふはいつはりにてつは内へちよつさかへりて。彼小づかをよく切る小づかなりとて。かたみにせんとお春がままひあきたるが。もしもやはやまりて。不可簡も出しはせぬかど。案じらるゝより。お春をすかしなくさめて置たしとおもへば斯もいつはりけれども。村次夫婦はこれをゆるさず。三日も濟ざるうちは外へ出す事なりがたし。鶴が岡へは代参をつかはすべしといふに。せん方なくも止りけり。斯く一日を百年のやうに待て程なく三日の祝義もすみしかば。その翌朝未明に鶴岡へといつはりて。子僧一人を召つれて。急ぎわが實家へ走りゆきて見るに。郷兵衛は前夜無盡へゆきたるよしにて眠たきと見えていまだ起ず。下女と母ばかり見ゆる程に。まつなれにしおのが部屋に入り見るに。お春は蒲團を出したるまゝにて床もとらず。臥衣も着更ず。幼子の寐たる枕上のうち伏て。泣つかれ眠り居る顔ばせ。消かゝりたる行燈の火かけにちら〜して。めつきりと瘦たるやうに見えて。目元の赤く泣はらし。髪の毛顔にかゝりたるさまは。見るにあはれとそのままよりそひゆりおこして梅コレお春。あんまりなつかしさに。どうしたかとおもつて來たが。まア〜かはる事もなくつて。いひつゝ、いただきひきよすれば。お春は涙にくづをれて。よく來てくださいました。といはんとすれば目隠りて。泣音はかかる千筋の涙。いと〜に袖にた〜へたり。郷兵衛は目をさまし。お

き出でこのよしを聞。志ゆるぼうきをもちてこゝに入り。おのれ何ゆゑにかへり來しぞと。いひさま打てかゝりけるが。梅太郎はさま〜にあやまりて。只ちよつと親父さまの。御機げんき〜に來れども。いまだ起出給はぬゆゑと。さそくをきかすわびことに。郷兵衛すこしにつこりして詞をやわらげ。夫なれば早く歸りて。この後はどのやうな事ありとも。あちらの兩親を實の親と敬ひ。大切に孝行せよ。釋迦に心經ながら。よく用ひよとだましすかしてその儘に。早々に追ひやりけり。

仇競今様櫛初編卷之中 終



# 仇競今様櫛初編卷之下

## 第五回 花ぐもり

借も萩原屋にては。お秋が病氣は漸々に癒たれども。お秋はある時氣に入りの侍女お刀禰にひ  
 そかにいへるは。おもひく／＼てまつ死ねほどこがれわづらひたるも。其方のとりなしにて今の  
 如くなれる事は。うれしさにこれに越す事あらざれども。その梅太郎さま。さのみ邪見にてもな  
 く。よく情ふかきやうにはあれどもとかく夜も俱に寐るといふばかり。ほんの名ばかりの夫婦  
 なり。されど思ふ男を夫として。朝夕顔見るうれしさにいつか病氣はなほつたれど。まことの  
 下紐はどけしなきわだむすひぞと。うちかこちものがたりし。されどもやがて長い年月の内  
 はまたお心の解る事もあらんかと。そののみのりて待なりといふをお刀禰はうち聞て。なる  
 程御さまのお顔つき。どうか物思ひのあるやうと。お兩親さまにも。とんだお氣に入りの結構な  
 御さまなれど。御苦勞のあるやうなを。とかくにお案しあそばしますと。物がたりをなしける  
 が。その日郷兵衛は書狀にて。密に村次がもとへいひ越したるは。梅太郎事。當分けて他へ  
 あん出しくださるまじくと記し。なほかのお春が事を。巨細に申つかはしければ。原來とお

もふより此後は門へもいださぬやうにして置たりしとぞ。斯りければ幾日たちても梅太郎は尾  
 池小路へゆかざれば。お春はいとに案じわづらひ。何となくきぶんあしきて。食さへろくる  
 く喰はざるに。弟の菊次郎は。左右五月繩お春につきまどふて。さま／＼にかき口説けば。そ  
 の時々耻しめてたしなますれども。親の馬鹿押のつよきを受つぎて。面の皮厚くもいひ寄り  
 けるが。けふもよき菊コウお春さん。なんとまアそうかせいをかけた三絃の糸のやうに。つんつ  
 んとするこたアねへ。おめへといふものも。まア情を志らねへものだせはる「おまへといふもの  
 もまア義理を志らない人だねへ。假にも一旦お兄いさんの梅太郎さまと夫婦になつたわたし  
 菊」なんのそりやア内證事だ。ソレ親父がいのをいひやしたらう。いつ盃をとりかはして。  
 その時の仲人はたれが上下を着て居り込でだれが謠ひをうたつてサ。そして何流のうたひで。節  
 の數は幾ゆすりあると。ソレ聞れちやア一言もなしといふ句で。ぐつと承知して兄貴は志れた  
 のろまどの。うち／＼めされてつい聲入その跡を某が。宇治川の先陣と。乗かつ氣せんさ。子  
 それ佐々木の四郎といふしやれで。米澤町の屋も是調へてありそ海。はまむらや丸むきとい  
 ふその容顔美麗を。どうまア見すて、おかれるものか。そして實は親父もおふくろも。おめへ  
 をおいらの北の方と。ぐつときめるといふしやれだせはる「腔をおつきよト口ではいへどいづぞやおや  
 せしとなればその 菊」ナニ嘘をいふものかな。そしてまづ兄貴はもう／＼あつちのお秋さんに命と  
 事をおんづめる







山鳥の初尾の鏡掛ふれて。影をだに見ぬ人ぞ戀しきと。俊頼朝臣の歌に似て。二世の夫と引分  
 られて。涙に身もうく一人寝は。實にあし曳の山鳥の。その志だり尾の長き憂世に。又何事か  
 樂とせんや。志かるに菊次郎が爲にかき口説かれ。既に父は薄々は。菊次郎がおはるにせまり  
 て。夜などひそかに通ひゆくを。知りても志らぬさまにもてなし。如何にもして和合せ。早く  
 めあはせんと計る様子に。時々母にはなげきたるが。又せんかたもなか／＼に。生てこの世に  
 あらんより。長き未來に夫を待んど。女心におもひ定むるも。尤なる事どもなり。嗚呼そ  
 れ薄命なる阿春が身。憐むべし／＼。かくて其夜滑川へ急ぎ行。岸邊にイみ日ごろ念ずる觀世  
 音の名號を數返くりかへし／＼て唱へ奉り。冀くは極樂國にて。亡父母に逢し給へ。又陽  
 間なる伯父伯母はじめ。第一には梅太郎との。無病にて長生し。未だは何とぞ分て待。蓮葉に  
 招きてたべ。又乳子の柳之助。何とぞ息才に成長し。孝行を盡すやう。守らせ給へと幾たびも。  
 くりかへし／＼涙と共に念じ終り。逆巻水の正中へ合掌したるその儘にて。ざんぶと踊り飛入  
 たり。惜むべし在斯婦人は。多く得る事かたしとす。爰にまた梅太郎は。それとは夢にも志ら  
 ぬ火の盡す玉琴三絃のいとも興ある音曲をかはる／＼に坐につらねて。氣をなぐさめんと具  
 たり。されどもこの程厳しく命じて。外へ出る事をゆるされず「尾池小路へは勿論その外へも  
 當分は文通だもすべからずと、かたくいましめらる／＼ほどに。こは春の事聞出して。斯はい

ひつけ給ふにこそと。推察しつゝ心にをさめ。うつ／＼として樂まず。口に美味を食へども。お  
 春が歎きをあんずるより。更に味ひを知ることなく。只うつとりと夜の目さへろく／＼眠らぬ  
 さまなるにぞ。今日は如何して機嫌をなぐさめんと。いろ／＼に評定し。秋にも相談するに。  
 聞ば詠歌を好み給ふよしなれば。和歌の書籍をおほく文庫より出して。その道知りたる人をし  
 て。なにか咄しもするならば。少しはうき／＼志給ふらんか。といふに有あふ男女も手を打て。  
 いかさま琴や三味せん笛も太鼓も。遊藝は手を盡したれども。一ツとして氣に入りたる容子も  
 見えざればとて。是より父にもかくと告るに。それはさいはひなるかな。近ごろ抱へたる侍女  
 に。元來は梶原さまに奥つとめして。和歌をよくし手跡をよくせしゆゑに。お氣に入りて用ひ  
 られしが。仔細あつて暇出たるが。その親なる者には地代の貸金三十兩ばかりあるを。催促  
 すれども手だてなく。是非なくその女を奉公にかへくれよとの事。給金にてなしくづしの濟  
 かたゆゑ。則ちめし抱へたるが。丁度さいはひなり。それ／＼といふほどに。かしこまりて彼  
 女名をば系裁といひたるを。爰にてはお糸とよびかへて。すがた風俗も美しく座に出て機嫌を  
 どり。くさ／＼のむかし物語などまたりけり。こしもさおされ「モシおつな事をあたげ申すや  
 うだがお糸さん。アノ梅といふ字は。うめと書又むめども書が。どちらがよいのでございませ  
 うい」ハイおれはうめと書のが古い假字の例で。むと書たは後の事じやと申す事。和名抄に



あやまつてむの字を用ひましたので梅も馬もやはり。ホ、ホ、ホ、ものしり風なおはもむうござり升。まアうの字が本の事でござりますのさあき「いつぞやの時ほんにわたしがこまつた事があつたのうこれ」ほんに若旦那さまは。どのやうに若御新造さまをおかわいがりあそばしても宜しうござります。あのやうにまで。ほんに夫はそうと。その御本はもし何と申すものでござりますすへい「これは源氏の湖月抄で。爰は浮舟でござります。こちらの古今集。またこちらの千載集。こしもおたの「モシこれはをかしい名でござりますねへい」ほんにさやうさこれ「まくらさうしかへ。チャ／＼／＼おつなヲホ、ホ、ホ。あるい本がござりますねへあき」なにをかしい本ではないよこれ「さやうでござりますか。どれ拜見いたしませうトひらきみて成ほどをかしい書はありませぬへい」それは清少納言のでござりますものをこしもひやくもし、あの清少納言の夜をこめて申す歌は。どういたした事でござりませうねへ。鳥の空ねと申す事は。空へねる鳥もありませぬかねへい「なにあれは子。後拾遺和歌集の雑の歌で。詞書の長いうたで。唐の孟嘗君の故事でござりますとさ。秦王にとらはれとなつて。やう／＼に逃出したるとき。函谷關と申す關を夜ふかく越るに。家來の中に鶏のなく真似をよくする人があつて。それに鶏の聲色をつかはせると。夜が明たと心得て。その聲に催されて。あたりの鶏がみな啼たによつて。關の戸を明て通したといふ事が。その傳は史記の列傳にござりますトこぼさばやりに梅太

郎も好の道なれば。耳をそばだてその婦の才を感じてすこしは心をなぐさむるやうにおもひけり。志かるになほその函谷關の故事の物語りをするに至りて。おもへば我もとらはれも。同じ身のうへ。いかゞしてか爰をのがれ出て。ひとたびは是非とも急にお春に逢たきもの。このほど夢見はわるしなど。なほいや増す物おもひも。かくして等に歌の道の物がたりなど何くれとするに。このお糸はおもひの外學才ありて。至極おもしろかりければ。粗輿に入りしとぞ。又おされはお「モシこの大和物がたりといふ本に。女が身を投る事があり升が。ぶぶりと落入りぬとありますよ。をかしいねへ。何もぶぶりと書ずとも事だねい」それはいく田の川へ身をなげた。ひらはりの女の事でござりませう。男二人におもはれて。水鳥を射て中た方へまたがはふと申ければ。一人は頭を射あて一人は尾のかたへ射あてたと申して。それで争ひになりましたので住わびぬわが身なげてん津の國の。いくたの川は名のみなりけりといふ歌をよんで身をなげたと申す事をあれはせんたい萬葉の九の卷にある。菟名負處女の事を。花山院の大和物がたりにつくりこんだもので。やはり同じ事でござりますよ。ひやく「なにも死すとも事だねおたの「おまへならどうおしだひやく」わたくしならばなんの面倒なことはない。一人は本の亭主にして。一人は男別夫にして置のさこれ」わたくしなら一日がはりに亭主にしてやるよ。なんのマア死ぬといふ不意氣な志やればつまらないねへい「そうも申されませぬ。こないだなんどは



十七八になるやうな美しくい姿の女が滑川へ身を投て死にましたそうさト梅太郎は梅、そしてその女はどこの者でいさされば。處はその時はよく知れまじなだと申すが。丁度わたくしが此方へお目見に参つた時の事でございます。梅、ム、それはまたこの人に聞なすつたい。花水橋の邊の人が遠目に見かけて。どめやうとぞんじておつかけて参つたうち。つい飛こんでまいましたそうさ。そして跡には守り袋を木の枝にかけて。ねずみびらうどの雪踏がならべて脱であつたと申す事でござります。梅、ム、鼠びらうどの。そして守り袋にはいさどうぞせめてゆかりへおらせてやりたいと手が、りもあるかに。守り袋の中をあけて見ましたれば。さまくのお札があつて。その中には。臍の緒の書付に。建久二年辛亥の正月。幾日とかの生れ幼名はむつとか書てありましたそうさ。梅太郎は梅、此お春が幼名は。正月に生れたりて。むつきといふ心よりおむつとつけしよし。そのうちはると名をかへたるよしは。つねく物がたりに聞承知してゐる事ゆゑに大きにおどろきものをいはず。かけ出んとしたるが。さすがに人目をはいかりて。おらぬ顔にまざらかし。やがて夜更たりけるに。みなく退きたれば梅太郎は顔色かわり。おきりに胸のさわがれて。寐るさまにて考へ居たるが。このうちお秋も来り一ツ夜着に入りて寐たるが。梅太郎はいつものごとく。かたくしてわきを向き。眠りしさまにしてお秋が眠いきをうかいひながら。ねむり付たるさまなるにぞ。そつとぬけ出雨戸を

ひらき。植込の松より塀をのりこえ。やうやく表へ立出つ。裏の園は木戸を開き裏店の路次づたひ。終にのがれ立出て。一もくさんに雪の下なる。尾池小路へ走り行

第七回 かへり咲

却説お春は滑川へ身を投たるが。爰にこのわたり大畑村の漁獵師網八といふもの。毎夜此なめり川にあみを投て魚を得渡世と志たりけるが。今宵よりの曇り空に。定て獵のあるらんとて。例のごとく投網したるが。爰に重きあやしきものを引上たり。何ならんとおもひしが。やうく船に引あげて網をかなくりすてよく見れば。是すなはち死人にてありけり折から雲間もる月かげにすかし見れば。まことに美しくしき美婦にして。年は十七八なるべく。又たぐひなき容顔に志ばし見どれて居たりけるが。かゝるうつくしきものをむざくと押流してやらんよりは。火にあたゝめ水を吐せ薬をあたゝなば百に一ツ蘇生こともあるまじきならずとて。そのまゝ船を岸にこぎよせ。まづ死骸をばいだき上て。爰に枯木を取あつめて。火を焼つけいろく工夫して水を吐すればおびたしく吐いだし。まだ入水して間もなきと見えて。乳の下にあたゝかみあれば。是をたよりこの焼火にてあたゝめつ。ねんごろにいたはるほどに。四支冷々たるも。すこしくあたゝかくなり六脉次第に發動して。稍人肌になるほどに耳に口つけ聲かけて呼



びたつれは。やうやくにして心づき。既に蘇生きたりしかば。網八はよろこぶ事大かたならず。すぐさま背中に負ふていたはりつゝ。わが家へこそは歸りけり。

○此網八は信切なるか。不實なるか。其善惡また梅太郎雪の下へ往て奈何なる物語かある。都て後編發市の期を俟て見給ふべし。なほあはれにおもしろきものがたり多くして。三編にいたりて首尾全うせり

仇競今様櫛初編卷之下終

仇競今様櫛二編序

或集に哀れとやつげのをくしもみだれ髪さしも  
 けづらぬ戀のやつれを。とはやごとなき卿の讀置  
 せ給ひける。實にや情ある男女の中らひは。いとゞ  
 心をつくし櫛。曉つらきさし櫛のさして古代にか  
 はらねど。時につれつゝたゞうつり行ものは尊き  
 卑き人の風俗とこと。葉のみ。上りたる代には。い  
 と似るべくもあらざりける。其を當風につゞりな  
 せる。絲井のあるじの筆ずさみを。こよなる愛聞え  
 しに。予に此端書をせよとて。せちにすゝめてゆる







さねばいともだしかたくて。そのことわりを例の  
 はかなきよみ歌を添てあたふるになん  
 戀こひにのみやつれ果はとにし我身わがみとて  
 玉たまのをくしもさすかひそなき  
 のちのやよひ風月樓のあるじ  
 高敷





仇競今様櫛二編卷之上

十返舎一九著

第八回 夕の花

春の夜の闇はあやなし梅の花。色をも香をも知る人ぞ。互ひに心かはらじと。かたくちひし中をさへ。浮世の義理に是非なくも。志ばし隔ちし梅太郎。實家へかたく音信を止められ。便りさへもならずして。囚れ人のごとくにて。朝夕おはるが身のうへや。柳之助の事わするまなく。斯といめられて居るなれども。便りのなきをそれとはあらず。さこそうらみているならん。うつ／＼としてたのしはず。胸のみいたみて居たるうち。彼お糸が物がたりにて。おはるが滑川へ身をなげし事を聞。おどろき周章まどひしが。それといふてはなほさら。身をうごかさん方便なしと。あらぬ顔するくるしさを。癪にまぎらし寐たるが。夜の間にそつとぬけ出て。臥着のまゝに歩素足。氣もたましひも身に添はず。宙を飛で走り行。尾池小路にかけつきて。案内もなく内に入れば。家内の混乱大かたならず。母のありのは柳之助をいだき。目も泣はらしてことばもなく。あたりに通の書おきあり。梅太郎はとる手もはやく。ひらき見るその文は。書おきの事とありて

さても御ふた方様是までの御かうおん海山つきしなき御事は今さら筆にも詞にもつくしがたくまた梅太郎様御事につきてもさま／＼の御くらうかけ／＼御事いか斗か心くるしく御座候せめてながくおそばにをり候はゞまんが一も御おんおくりとぞんじをり／＼へどなからをり／＼は御おとづれもとたのしみくらしをり候うちにも御事おほの御中ゆゑか御たよりもなくそれも御うらみとはさら／＼ぞんじ不申候へどもなにをたのしみに柳之助をそだて／＼はんやまゝならぬうき世とは申ながらあまり／＼つらましき身のうへにてわたくしよりたよりいたし御きげんを御うかいひ申上てはかへつて御身のためあしく候はんとしんぼういたしをり／＼そのうちのつらさせつなさいふにいはいれぬうるさき御事も御座候まゝとともながらへをり候てもたのしみもなき身の上なればこれまでのでやくそく事とあきらめて身をなげ相果まゐらせ候

ト讀さして梅太郎は。胸いつばいのためなみだ。千筋の糸とおちかゝるを。袖にどめてもせきかぬる。目をおしぬぐひて。やう／＼に。よむ次の文躰は

たい／＼御ふたかたさまへさきだつ不孝はこれもさきの世のむくひにてもつたいなさもせひなきわけにてかくさだまりしいんぐわづくし御ゆるし被下かし又わけて御ねがひ申上



柳之助事とふぞく御世話あそばし御そだて下されわたくしなきあともむらひ  
 くれ候やう御をしへ被下たくふたおやのなき子にていたづらをいたし候は御ば様の御  
 そだてあまきゆゑと人にわらはれぬやう御志かり人なみくにおいたちを草葉のかけより  
 いのりをりたりまた梅太郎様御事をりもありて此かきおき御らんあそばし被下候はい  
 かに御くませもおそれ入るへどもかならず御ゆるし下されべく又あき様と御  
 中よきを御うらみねたみ候心よりと御志かりもあるべく候らへどもつゆほどもさやうには  
 ぞんじふしもとよりとくしんの御事にておはしまし候ゆゑあしからぬやう御ふくませ被下  
 かしせめてふびんとおほし出されをりくは御まへさまの御くちより一ぺんの御えかうも  
 あそはし被下候はいなによりませし御くどくとまとにありがたくうかみ候御事と夫の  
 みたのみをりたりどふぞお秋様とすゑく御むつましうめでたく御さかへ下されかしお  
 ぼし出されぬ此身ながらせめて今一たび此世の御なごりに御かほを見らるゝことのないを  
 今さらのやうに御残りおほくくちをしくそんじ上りさりながら夫はかへつておもひの  
 たねにも候はんとあきらめたりて只くなに事もさだまりし世の中にてさきのよのいん  
 ぐわとやらんとおもひきりたり

はるる

御ふた方様

梅太郎様

斯と見るより梅太郎は。何とことばもなかくに。先だつ泪のみこむところへ。琵琶小路より  
 尋ねの人むかひに。來しと告るうち。郷兵衛もたづねわび。かへり來りて聲たかく。悴は内か  
 と呼ぶほどに。こはたまらじと母おやに。何かさしやき一腰さして。跡をも見ずに走ゆくは。  
 かの滑川の岸にのこるお春が紀念の守り袋。せめてはそのあたりより。海の中までもさぐりも  
 とめ。死骸なりとも今一目。見ずはあつじと半狂亂の。氣を志づめても志づまらぬ。胸をおさ  
 へてかけゆきぬ。かくて人のをしゆるまゝに。身を投たるところへゆき。誰人やらんの拾ひ  
 たる守りを得ても今さらに。なみだのたねとならの葉の。廣き海まで尋ねるに見いだすべうも  
 あらざれば。いかにせんと當惑せしが。とても尾池小路に歸るとも。ゆふべの志だらのいひわ  
 けなく。又こゝろもその身にそはざれば。かの家を繼ぎ歡樂に暮さん心なく。共に死ぬべくな  
 げきても。かへらぬ水の泡と消し。おはるが菩提を吊ふに志かじと。意更に一決し。是より跡  
 をくらまして。志所もなしに走去りぬ

第九回

根にかへる花



それ赤繩のかゝるところ。出雲の神のまろしめす事とはいへど。奇にして妙なり。男女ちのおの知らずして結び。又知らずして解るを以て。思ふに別れおもはぬに奇偶の。あやしき縁にしもあるなりけり。爰に琵琶小路の萩原屋にては。梅太郎が何地へか出て。行方の知れぬにおどろきさわぎ。四方へ人をはしらせて。たづぬるうちにも指す方は。尾池小路の實家ならん。彼處へ重立たる手代をつかはし。すぐさま連てもどるべしと。村次はまきりに氣をいらち。娘が命にかわる戀聲。やう／＼に手に入れたるに。また失ふては大變なり。殊に尾池小路なる。お春が身のうへその外まで。風聞にくわしく知りたれば。夫婦は物怪の幸ひながら。もし不了簡も出すまいかと。ひとしく氣をもむさいちうに。在斯事の出来ぬれば。妻のお宇津も聲をからして。下僕をまかりのしり。急ぎ見つけて引たて來れど。立さわぐそのうちに。おあきはかなしさとふるにもなく。思へば戀にこがれつゝ死ぬべきばかり慕ひたる。人を夫には志たれども。心に叶はぬ事やらん。名ばかりの夫婦にて。まことの下紐はとけしなき。仇むすびなる中なれども。さのみ嫌はるゝ容子にもあらねば。譬にいふ女ぎらひとやらんの人にもや。または愚なるわが身ゆゑ。夫のころにかなはぬを。それとはなしに過したまふか。いづれにもあれかゝる事は。女の恥る筋なればと。かたくつゝしみなほさらし。色にも出さでまめ／＼しく。敬ひつかへたるほどに。思ふにましてうち解たまへば夜の間の事はいづれにも。表向の情ふか

く。やさしくさるゝを人目といひ。うれしき事におもひたるが。このごろ不圖聞たるは。梅太郎かねてより。お春といふものありて。柳之助といふ子までなしたる中なりと。その仔細は兩親の。ひそかにさゝやきしを立聞して。はじめて是を知りしもの。此事おれたをやはお秋にはまらくめしつゝふものにもたかくいひつけて口をさめおきたればさらしにふるゝこなきりしが。このころやう／＼聞たる。又梅太郎がはしめよりの仔細などおあきさまくらならぶるのみまこさのちざりしをせざりしもゆくすもおもむねあるゆゑなりすべし。初編をよみ給へばおのづか。さればお春にこゝろのこりて。實の情をかけたまはぬ。ものなるべしと心づくより。いと悲しくおもひわづらふ。そのをりからに今度の一條。かねて期したる事ながら。かなしさはまた百倍の。なみだ汲出すばかりにて。身も浮くばかりなげきしが。そのうち尋ねに出したる。男子は追々に馳もどり。いづくにも居らずと聞くに。お秋も今は泣くづをれ。せきかねたりし泪の淵。ふかき縁にしとおもひしも。それかあらぬか淺茅生の。をのゝ篠原志のびかね聲立なげくを婢女ども。さまざまになぐさめて。程なく見えさせ給ふべし。かならずおまちあそばせと。いたはるうちに心をさだめ。をあきはなみだおしぬぐひあき「おめへたちがそのやうに。いふてくれるをおもふから。又かんがへて見れば梅太郎さまが。不圖人にはあらされぬ。大事の御用かなんぞがあつて。どこぞへお出なされても。すぐに夜の間にちかへりのならぬ筋からひまどつて。おいでなさるまいものでもない。これほどにかなしくおもふも。いよくち行方が知れぬぞか。なんとかした時の事。みんなわたしがはさまつて。つかかなしく



おもつたのも。みんな知つての通りゆゑ。かならずわらつておくれでない。もう／＼聞わけた  
いづれにも御沙汰のあるはづ。機嫌よくおまち申そう。ほんに今夜も思ひの外に夜をふかした。  
さア／＼みんな寐たがよいトんぎしてみな／＼ふし／＼へまりぞけば。お秋は今ぞおもひつめ。とてもこ  
の世でそふ事ならぬ。悪縁といふものならんと。心をきはめて硯をとり出し。さら／＼と一通  
の書おきをまた／＼めて。自害せんとする躰に。かねてより今宵の容子。心もとなくおもふから。  
お糸といへる心き／＼の。婢女ひとり立うかいひ。かくと見るよりおどり入り。剃刀を取らんと  
すれば。おあきはやらむ殺してたべと。あらそふこゑに人／＼おき出。かゝる事とは志らざれば。  
うろ／＼さわぐ聞まざれ。見つくる村次あたつともにも。すは絆なりと立かゝるに。お秋は今  
さら剃刀を取られて死ぬにも死なれねば。いかにして兩親に。顔あはせんと面目なく。あたり  
の人をふりはらひ。かけいだすをそれ押へよと。氣をいらてども烏羽玉の。暗にあやめも。志  
らざれば。やれ燈灯よらうそくと。立さはぐうち切戸をひらき。とらへられむと一生懸命。娑  
婆と冥土の一すぢ道。歩はだしにてはしりゆく。所は名におう龜が谷。合戦澤より東なる。極  
樂の井はすゝまき浄土へ。みちびく佛のゆかりぞと。こゝろのうち祈念して。わが身過去の  
罪障おもく。今この井に身を投て。兩親に先だつとも。おもひつめたる悪縁を。なげくあまり  
に存命ては。いよ／＼罪を増す道理と。かくはかなき世をおもひきり。死ぬるとも三世の佛た

ち。ゆるしたまふてこの世にのこる。兩親はじめ梅太郎どの。お春どのや柳之助等が。身のう  
へつゝがなきやうに。守らせたまへと合掌し。身を踊りて飛入らんとす。この折からに雲はれ  
て。圓の月は四方を照らし。あたかも白晝のやうなるに。爰へさわ／＼来る人ありうた「おもふ  
男はア谷間のヲ清水コリヤサイ。どこにイすむウやらおとも引せ引ぬ。せけなんだかく／＼ツ」へ  
ンふるい志やれたの。志かしはやり唄も多いが。よしこのといふやつは。古往今來。このくら  
ゐながく續くものもあるめへ「そうよそのくせろくな文句はひとつもねへせ。ときにおいらは  
外へまはるから爰でわかれやう」なにか又ゑて吉へいくのか。なんにしろもう引すぎだぜ○ボ  
ヲ引あれみや八ツの鐘がなるは「なんの八に嘯れて死んだものもねへの」すんなら又あすい  
ぢめてやらう「ヘンつらくもねへが受てくだつしト立わかれ一人はこの。あやしき女の立すがた。  
見れば身を投んとするやうす。まづ何がなしといめんど。いきなりにうしろから。志かどとら  
へて物をもいはず。堤のこなたへ抱き來て。月かげにすかしみれば。花のかんばせうつくしき。  
そのありさまのたをやかなるにぞ。志ばし見とれて居たりしが。おあきはかなしく突のけはね  
のけ。身を投んとあせるにぞ。志かど押へてうごかさず。菊「なんとおめへさんはどこのお方か  
志らねへが。身を投ようとは不りやうけんた。こゝは一ばんおつとめた。朝比奈の切通しで。  
わかひ女と一目見たから。友だちをはぐらかして。一人で來たのも他生の縁。わつちやアなに